

悠遊

創刊二十周年記念号



企業OBペンクラブ

ペン・フォト句 (自然編)



濱田 優



大月 和彦



矢澤 正二



安藤 晃二

悠遊

創刊二十周年記念号

企業OBペンクラブ

表紙の絵「高遠の桜」

山縣 正靖

はるか南アルプスの仙丈ヶ岳を望む高遠城址に、春ともなれば全山桜が咲き誇る。

伊那路の高遠は甲斐、諏訪、美濃の三国を結ぶ要衝の地であり、かつて諏訪と甲斐、甲斐と美濃の激戦の址であった。土地の人々はここに散った勇士をいたみ、慰めようと桜の木を植えて育ててきた。春爛漫、霞か雲かと幾重にも重なる桜に抱かれて、幽玄の境に踏み入れる日も近い。

目次

◇巻頭言……………西川 武彦 4

Ⅱ創刊二十周年にあたってⅡ

◇「悠遊」の変遷……………都甲 昌利 6
 ◇「悠遊」二十号に寄せて……………西川 知世 8
 ◇「悠遊」創刊の頃……………岩崎洋一郎 10

Ⅱ特集Ⅱ 日本の再生のために

◇日本再生は私たち一人一人にあり……………上田 信隆 14
 ◇若者こそ国の宝……………中村 将陸 16
 ◇「やましき沈黙」を守ってはならない……………大平 忠 18
 ◇金融緩和術、米国のパラレルに見る……………安藤 晃二 20
 ◇景観の再生……………西川 武彦 22
 ◇男が元気になる社会……………小寺 裕子 24
 ◇日本の進路を考える……………杉浦 右藏 26
 ◇日本の再生をめざして……………山縣 正靖 28
 ◇「ミレニアム・ジャパン」の礎石……………橋本 政彦 30
 ◇日航は再生した―日本も再生できる―……………都甲 昌利 32
 ◇反省……………市川 忠夫 34
 ◇日本再生の突破口……………野上 浩三 36
 ◇新嘗祭に再生を願う……………森田 晃司 38
 ◇ようこそ日本へ 馴染んでね!……………稲宮 健一 40
 ◇若者と共に……………大泉 潤 42

◇ザ・デイ・ビフォー・トゥモロー……………細谷 博 44
 ◇悪夢のサイクル……………大野ただし 46
 ◇究極の企業統治を創造する……………上原 利夫 48
 ◇自動車社会を改めるアクティブ・ウェア……………池田 隆 50
 ◇凜として立つ……………富岡喜久雄 52
 ◇さてさて、日本は困ったものじゃ……………門屋 信行 54
 ◇人こそ命……………鳥海 博 56

Ⅱ特集Ⅱ くされ縁

◇不思議な縁……………岩崎洋一郎 60
 ◇百年の響き……………三 春 62
 ◇切れた鎖……………志村 良知 64

Ⅱ自由テーマⅡ

◇折り紙ボランティア一年生……………松谷 隆 68
 ◇パムツカレで腰湯に浸る……………濱田 優 70
 ◇小諸吟行……………猪股 重子 72
 ◇日本語を教えて……………原田 信 74
 ◇隠れ棲む人たち―菅江真澄遊覧記から……………大月 和彦 76
 ◇私とフォト句との出会い……………矢澤 正二 78
 ◇開聞岳……………阿部 典文 80
 ◇オクラホマの悪夢……………平尾 富男 82
 ◇池袋の下宿……………寺井 融 84
 ◇二つの「姫街道」……………清水 勝 86
 ◇微生物燃料電池の夢……………吉寄 清己 88

◇心に残る歌……………	浜口須美子	90
◇「お札」の有難さ……………	野瀬 隆平	92
◇「東京家族」……………	松浦 武弘	94
◇「すずめの涙」……………	西田 昭良	96
◇ベトナム戦争の枯葉剤……………	田原 敬	98
◇音のない世界で―続編―……………	古川さちお	100
◇昭和の思い出……………	中村 爽	102
◇大仏開眼とヴェトナム……………	浜田 道雄	104
◇母の万歳！……………	新井 良侑	106
◇米長邦雄前名人から頂いた金星の話……………	鶴飼 直哉	108
◇さて七月参議院選挙 国民の選択やいかに……………	大越 浩平	110
◇国民健康保険制度の赤字……………	玉山 和夫	112
◇エジプト旅行顛末記……………	中村 晃也	114
◇雪の京都……………	保坂 令子	116
◇カーナビ……………	廣澤 重穂	118
◇大阪日記……………	新田由紀子	120
◇医者よ、なぜ黙っている……………	新山章一郎	122
◇創作短編Ⅱ		
◇危険なメソッド……………	大西 宏	126
◇隠蔽工作 ―大人の童話―……………	馬場真寿美	129
◇腐れ縁って……………	福本多佳子	132
◇悠遊の記Ⅱ		
◇散歩……………	金京 法一	136

◇厳しい時代の売り込み……………	高橋 孝藏	137
◇「800字文学館賞」……………		138
◇分科会報告Ⅱ		
◇ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞……………		140
◇二〇一二年「ペン川柳」勉強会の成果……………		145
◇サロン21……………		145
◇何でも書こう会……………		145
―緊張・充実感・そして楽しい交流―		145
◇「掌編小説勉強会」この一年……………		145
◇英語を読もう会……………		145
◇インターネット関連……………		145
◇ペン・フォト句会の実績……………		145
◇新年会の余興(575大会)……………		145
◇『卒サラびとの文芸館』が誕生しました！……………		148
◇追悼 垂水健一さん……………	西川 武彦	154
◇企業OBペンクラブの今年の歩み……………		156
◇会員名簿……………		160
◇編集後記……………		162
表紙制作……………	野瀬 隆平	
表紙の絵……………	山縣 正靖	
カット……………	山縣 正靖	
	児玉 忠雄	
	山縣 正靖	
	野瀬 隆平	
	福本多佳子	

会長 西川 武彦

『悠遊』が節目の二十号になりました。創刊の頃、当クラブからは、『60歳からの知的生活』『日本再生1000創案』『政治家・官僚への48の苦言・提言』『国際マナー常識辞典』など、タイムリーな本が出版されました。バブル崩壊で、日本がこれから先を模索していた頃です。

高度成長を登りつめ、Japan as Number Oneと囃され、一人当たりのGDPも頂点に達して、ジャパンはどうなったか。政治・経済・社会は、長く深く混迷して、彷徨うばかり。物は溢れ、飢えることはない。成熟社会ですが、裏を返せば、飽食飽和で、人並み以上に努力しないのに不満だけは募り、犯罪に走る。意欲・頑張り・我慢の欠如。子供たちも甘やかされ放題。少子高齢化が進み、六七〇〇万の労働人口は、二〇三〇年には五六〇〇万に、二〇五〇年には四五〇〇万に減ります。見方をかえれば、まだそれだけある。

今年の「サロン21」の通年テーマは、「日本の目指すべき方向」です。毎月いろいろな角度から方向を探ります。議論したことはなんらかの形で発信したい。『悠遊』の特集「日本再生のために」もその一つでしょう。

緑と水に恵まれた四季温暖な島国、エネルギー資源は少ない、歴史と文化を持つ民度の高い成熟社会、少子高齢化、異文化混在、地政学。これらを念頭にどんな国のかたちを描くのか。

原発にかわる資源が開発されても、世界の人口が地球を支えられなくなるほど膨れるなかで、際限なく資源を消費する産業社会はありません。わが国としては、経済成長至上主義を卒業して、「ほどほどの豊かさ」を求めているのが目指すべき方向ではないでしょうか。それをどういう形で実現するのか。

戦争で家を焼かれ、貧乏のどん底を経験したあと、長じて多彩に活躍し、天国へ旅立った小沢昭一さんの言葉で締めることにします。

「僕には今日の豊穡ぶりはどうもしっくりいかない。ほどほどの貧乏、ほどほどの豊かさがちょうどいいんです」。

創刊20周年にあたって



『悠遊』の変遷

都甲 昌利

今年の『悠遊』は二十号だ。二十年も続いたと思うと、万感胸に迫る。

こうなると、もう我々の知的財産だ。創刊号発刊当初は「まあ、せいぜい、二、三号続けばよい方だ」と危惧されたからだ。歴代の編集者達のなんとか存続させたいという想いが、存続させたのだと思う。そしてそれを支えたのが会員たちだ。

平成六年四月二十七日の「創刊号」の「刊行の言葉」に、第二代会長の鳴澤宏英さん（東京銀行OB）はこう述べている。

「企業OBペンクラブの同人誌第一号が、会員各位の積極のご参加と、編集に当たられた方々の並々ならぬご尽力により、このたび上梓の運びとなりました。国際ペンクラブ、日本ペンクラブ等に冠せられたPENの語は、Poet、Essayist、Novelistの頭文

字。つまりペン・クラブは、文筆を生業とする専門家集団でありました。

これに対し、当クラブは、同じ名称を使いながら、海外勤務を含む長年にわたるビジネス活動を通して、多面的な知識、経験、ノウ・ハウを身につけた企業人グループ。その意味で文筆に關しましてはアマチュア集団であります。アマチュアの言葉を使いましたのは、何もプロに対して卑下をしたものではなく、アマチュアなるがゆえの特色と強みを強調したい、との思いをこめたものにはありません。

具体的には、会員の共有する業实际的な幅広い資産を活かし、チームプレイによる知的生産活動を推進することが、当クラブの本領だと思っております。このような基本性格を有する当クラブが会員各位の自己表現並びに会員相互の交流の場として、同人誌を持つことの意味は、ことのほか大きいと考える次第であります。

今後、この同人誌が当クラブの求心力と活力を高めるよすがとなり、また、より実りある知的生産活動への励みないし刺激剤となることを念じております」

この精神は現在の『悠遊』にも脈々と流れているとい
ってよい。企業OBペンクラブが創立されたのは平成元
年十一月、『悠遊』創刊号の五年前だ。創立五年目に三
枝亨さん（三井物産OB）が「会員みんなが参加できる
ペンの広場を作りましょう」と呼びかけ、同人誌を作る
ことを提案された。早速、刊行委員会が設けられ、同人
誌作りが始まった。毎日新聞OBの石川正達さんが世話
人代表となり、有志が集まり、知恵を絞った。何しろ初
めてのことなので、原稿集め、構成、印刷、経費など試
行錯誤の末、第一号が生まれた。

会員の八割が執筆、四十数編が寄せられ、ページ数も
百三十ページを越す、質量とも充実した初めての同人誌
が出来上がった。装丁、目次、表紙の絵など現在のスタ
イルだ。

第二号は平成七年発刊で、この年は戦後五十年に当た
り、テーマは「戦後五十年に思う」であった。これまで
の特集テーマの主なものを拾ってみると、「地球環境と
資源のこれから」、平成十二年（西暦二〇〇〇年）には「ミ
レニアムに思う」、「IT革命の世紀」、「構造改革」など。

執筆者は銀行、商社、メーカーなどのOBでそれぞれ専
門性を発揮し、豊かな知識を持って、論点を掘り下げペ
ンを走らせ、今でも読むに値する。

『悠遊』に画期的変化をもたらしたのは、女性の執筆
者が加わった第十六号だ。これは直木賞作家の深田裕介
氏が名誉会長に就任されたとき、「ペンクラブに女性が
居ないのは時代遅れ、文章は男性より女性のほうが上手
い」ということで、女性会員が入会したからだ。この号
はまたペンクラブ創立二十周年で「創立二十周年記念号」
となった。

さらに特記すべきは、創刊号から十九号までの表紙の
絵の変遷だ。八号までは一色だったが、九号からはカラ
ー印刷で美しくなった。これらは皆、会員達が描いたも
のだ。豊かな画才を有した会員がいるのも我々の強みだ。
とても素人とは思えない。院展に出品して入選した方も
おられる。

カットの挿絵もまた趣がある。会員全員が協力して創
造する、まさに知的生産活動にふさわしい。これからも、
三十号、四十号と続くことを期待してやまない。

『悠遊』二十号に寄せて

西川 知世

『悠遊』の創刊号は一九九四年四月二十七日に発行されました。創刊以来、毎年発行が休むことなく続けられています。会員の皆様の書くことへの情熱に加えて、歴代の編集委員の方たちの力に負うところが大きいと思います、頭が下がります。企業OBペンクラブの底力を感じて頼もしい限りです。

一九九三年九月の運営委員会でクラブの同人雑誌創刊が提案され、同月、月例会において当時の石川正達理事を世話人として『悠遊』刊行委員会が発足しました。私はその年の四月から事務局の会計担当補佐としてアルバイトを始め、例会はもとより理事会や運営委員会を仕事場としていましたから、その成り立ちを目の当たりにしました。まったくゼロからの出発でしたが、あれよあれよという間に、『悠遊』という名前が決まりました。会員公募案に漢字をあてはめたのは石川さんだったと記憶

しています。皆の思いとびつたりあった名前でした。印刷は、経費は、と横で見ている楽しそうに議論を重ね、走り回っていました。印刷は毎日新聞OBの石川さんが関連会社を口説き落として、予算もクリアしました。短期間のうちに次々と難題を克服して発刊に至りました。もう二十年も前のことですが、懐かしい思い出としてよみがえります。

当時は、パソコンなど思いもよらず、ワープロを手許に置かれる会員も少なかったのです。原稿用紙に手書きの時代でした。個性豊かな筆跡が多かったことを覚えています。使われる漢字も難しく、ワープロに打ち直しながらたくさん勉強しました。『悠遊』の創刊のころからクラブでもワープロ原稿・フロッピー提出が増え、その後はパソコンの導入へと、原稿の様式の急速な変化がそのまま『悠遊』の歩みでした。

余談になりますが、私にとって忘れられない光景があります。確か、一九九七、八年ころ、クラブ内でパソコンの導入をどうするか真剣に討論が繰り返されていました。「原稿書きにはペン」という派と「ITを無視でき

ない」と主張する派の真剣な話し合いでした。お互い譲らず伯仲の話し合い。その場に立ち会っていて、ITとは果してどんなものかしらんと、私も一九九八年にパソコンを家で使うようになりました。今のITの普及を思うと隔世の感があります。

創刊号は当初の計画のページ数を大幅に超え、会員の八割近くの方が参加され、ページ数は一三八ページとなり、充実の同人誌ができました。各自が自由に書かれた文章だったので、経験に裏打ちされた多岐にわたる作品が並びました。クラブの方たちの多士済済ぶりが如実に表れていました。驚きと共に読んだことでした。当時の鳴澤宏英会長の刊行のことば、「今後、この同人誌が、当クラブの求心力と活力を高めるよすがとなり、また、より実りある知的生産活動への励みないし刺激剤となることを念じてやみません。」に言い尽された歩みが続けられるスタート地点であったと思います。

「テーマが決められたのは二号からでした。ちなみに二号のテーマは「戦後五十年に思う」でした。企業戦士として生きた時代、敗戦を生き延び、時代を生き抜いた感

概が書かれました。団塊の世代として育った私には読み応えのあるものでした。

当時、クラブの会合は丸ノ内養和クラブで開かれていました。四月例会会場入口に、出来立てはやはやの創刊号が積まれ、華やいだ雰囲気だったことを今も覚えています。当時の月例会は千円の参加費で、飲み物がつきました。私は参加費を集め、皆さんの好きな飲み物やアイスクリームを注文して……といったことが月例会の仕事だったのですが、いつにも増して参加者が多く、本も配らなければならぬし、間違わないように飲み物の手配もしなくてはと忙しかったことも思い出します。

私はその後十年間、事務局を手伝いましたが、その間に『悠遊』は企業OBペンクラブの大きな柱に育っていききました。俳句の仲間を得て、ふたたび企業OBペンクラブの一員となった今も、『悠遊』が確実な歩みを続け、発行されていることを嬉しく誇りに思っている一人です。

企業OBペンクラブのさらなる発展と、会員のご健筆を心よりお祈りします。

『悠遊』創刊の頃

岩崎 洋一郎

『悠遊』が最初に発刊されてから二十号を迎える。創刊号に寄稿したメンバーで、今も元気な方はもう少なくなっているという。当時を知る生き証人として何かを書くようにと編集者に言われて、月日が経つのが如何に早いかを痛切に実感させられた。

この『悠遊』の第一号が発行されたのは、一九九四年四月である。私が企業OBベンクラブに入会したのも、奇しくも同じ一九九四年の半ばであった。当時は、月例会は丸の内にあった養和会（三菱系会社の親睦団体）で開かれ、散会後も同じ場所で一杯引っ掛けて歓談するのが恒例であった。この良き慣習は今も遵守されていて、誠に喜ばしい。当時、クラブの会長は、創始者の八木大介さんは既に退かれています、元東京銀行常務の鳴澤宏英さんに変わっていました。該博な知見と鋭い意見、特に国際的な話題で会の談論は盛り上がりつつあった。鳴沢会長の広

範な交友関係は在日外国人にも及び、講師に来ていただくことも稀ではなかった。その内、月例会の場所も東京銀行の青山寮に移った。

ああ、一九九四年。実は、この年は私の人生における大きな節目にあたっていた。大学卒業以来勤めていた会社を前年に定年退職し、自営の個人コンサルタント業を開始したばかりであった。専門分野は戦略的提携であり、幸せにもすぐにアメリカのクライアント数社が契約してくれた。

そして同じ年に、知り合いの涉外弁護士を通じてある出版社から、国際交渉に関する英語の本を書かないかとお誘いがあった。このジャンルのハウトゥ本は当時皆無であった。その弁護士自身が書けば良いと思ったが、実際に巨大な英米企業と交渉の任に当たった実戦経験者が書くべきと反論され、私にその任を回してきたのだ。サラリーマン時代はいろいろな報告書や企画書を数多く書いてはいたが、不特定多数の「顔が見えない人たち」を相手にモノを書くのは初めてである。そして本の読者はおそらく年代の若い方たちであろう。粗原稿を出

版社に見せると、「内容はともかく、漢字が多過ぎる。『友達』ではなく、『友だち』と書かねばならない」「送り仮名が現代風ではない」など、いろいろな注文がついた。

その頃、立ち寄った本屋で、企業OBペンクラブが出した本を見かけて買い求めた。自分と同じように企業のサラリーマンが卒業して文筆活動をしておられる。もっと知りたくて、大胆にも事務局長の佐分利さんに連絡を取り、懇談ののち入会した。

翌年に、文章を磨く目的で「なんでも書こう会」が発足し、プロマネ浅野さんの磊落な人柄もあって、大いにお互いの文章を批判しあい、切磋琢磨に勤しんだ。会のメンバーでもあった元毎日新聞社の石川さんに指導していただき、文部省と新聞業界の決まりの違いなども含め、大いに啓蒙された。

私として特筆したい喜ばしい出来事も起きた。成蹊高校のクラス会でこのクラブの存在を紹介したら、中学と高校の同級生である多田修君（横河電機）と杉山修一君（東芝）も入会してくれた。二人は技術系でコンピューターに強く、クラブのホームページの立ち上げや会員の

パソコン指導に熱心に取り組んでくれた。杉山君は『悠遊』十号から表紙絵を担当した。柔道五段の猛者杉山君の繊細な水彩画家としての隠れた才能が見事に花開いた奇跡である。惜しくも両君は病のために早世したが、クラブに大きな足跡を記してくれた。

因みに、私の処女作『交渉の英語』（荒竹出版社）は、幸運にもよく売れて短期間で三版を重ね、要望があつて中国語版と韓国語版も出すことができた。もしかしたら、内容よりも推薦者の二人の名声のお蔭かもしれないが。その一人は大学でのクラスとゼミの仲間で行天豊雄東京銀行会長（元大蔵省財務官）、もう一人は小学校から高校を通じてのクラスメート榎原稔三菱商事社長という国民の第一級国際人の推挙が大いに効いたのである。

このクラブの魅力というか長所は、異なる業界の卒業生たちが、遠慮無く自由に意見交換できる場を提供するところであり、それぞれの特異な体験を口頭及び文章で自由に表現できる場を与えてくれることであろう。今も感謝、感謝である。

サロン21

昨年の運営は、毎月あらかじめ担当を決め、担当者がこれと言いたいというテーマにつき発表し、みんなで論議するというやり方で行われました。

毎月、日本の国内外の重要でホットな課題を取り上げ、論議が盛り上がりました。議論がアフター5あるいはホームページに持ち越されることもしばしばです。これは、我が国の山積する問題を前にしても、動きの取れない「決められない政治」の現状に対する危機感や焦燥感が、私たち全員に存在しているからでしょう。今年、四月から「日本の目指すべき方向」を主テーマにして、一年間論議していきたいと思えます。

平成二十四年に取り上げたテーマは次の通りでした。

一月 富岡 喜久雄

「日本の人口問題」

二月 鳥海 博

「日本の財政問題」

三月 新井 良侑

四月 大平 忠

「薬害の問題と治療薬の安全」

五月 中川路 明

「日本人の心」

六月 高口 恵子

「日中韓の今後のゆくえ」

七月 志村 良知

「電気自動車について」

九月 中村 將陸

「原発が安くて安全で環境に優しいとは本当か」

十月 都甲 昌利

「体験的ロシア論」

十一月 野瀬隆平

「何が問題か 日本の経済」

十二月 全員討議

今後のサロン21の取り進め方について

(プロマネ 一〇八月 高口、富岡

九〇十二月 大平、森田)

特集・日本再生のために



日本再生は私たち一人一人にあり

上田 信隆

日本再生と少しおこがましい感じがしますが、このテーマについて考えてみたいと思います。多かれ少なかれ、我々世代は今日の日本の不振を招いた責任から逃れることは出来ません。戦後の経済優先にシフトした思考は挫折感を伴っています。すべて結果が第一と言ってもあまりに短絡すぎますし、人間の欲望をすべて満足させる結果など到底望むべくもありません。政治においても、衆議院の民主党の惨敗は、民意の満足からあまりに遠いところに政党があった結果ですが、さりとて大勝した政党に私たちが過度の期待をすれば、また同じように失望することでしょう。過去の経緯などを検証することも必要です。

戦後六十年以上たつて初めて革新政党が天下をとりましたが、わずか三年半あまりで瓦解しました。いい悪いは別にして、ある意味では実にもったいないことだと思

います。ゼネレーションにわたる変革のエネルギーを、結果だけでなく変えることの無駄は、それまでの努力の投資を無駄にするようなものです。これからは常に政党の良否を結果だけで判断しないことも大切です。プロセスの実績もおおいに評価の対象にすべきでしょう。

一方、国益を優先して考えるのであれば、やはり強い政府が必要でしょう。民主主義のルールに従えば、もし政治に対して許容範囲をこえるような不満や不都合があれば、次の選挙で支持する政党に一票を投ずればよいのです。選挙結果には不本意でも従うのがルールです。応援したくないのであれば、じつと我慢するほかありません。強い政府を応援するのも、再生にはかかせません。

日本の政治体制を見ると、同じ過ちをくりかえしているとしか思えません。アジアにおいて日本ほど早く先進国の仲間入りした民族はなく、教育水準、技術力など優れたところはかなり多くあります。ただ、戦前はそれを過大に評価し、また戦後は過少に評価する傾向があったと思います。戦後の復興からバブルまでは日本は順当に回復しました。ところがバブルがはじけた後の構えが少

し悪かったのです。攻めているときは勢いに任せて前進しますが、いったん負けだすとズルズル後退するのは、日本人に顕著にみられる傾向です。若者が自信を無くし諦めやすいのは心配です。

給料を沢山もらい、順当に出世する社会になれば、皆が精神的にも自信がつき、活性化すると思います。しかし今年から私たちは復興税に協力しなければなりません。財政の負担に伴う出費は今後もっと増える、という覚悟が必要です。デフレ脱却には景気回復がはいり処方箋には違いありませんが、そう簡単にはいかないでしょう。無論、早くそうなればウエルカムですが、人生を長く経験するとこの種の期待を裏切られることの多いのも事実です。日本にそう都合よく世界は動いてくれません。

日本再生について、私たちの世代からあえて提言させてもらうなら、次のことを申し上げます。まず結論を申し上げますと、まだまだ私たちは我慢しなければいけないということです。給料では、自分の取り分が三倍になれば豊かになったと思うでしょう。しかし少々の収入増では、税金の負担などに鑑みておそらく豊かさを実感できない

でしょう。もともと多いわけではないのですから、少々のアップでは満足は得られません。たとえ企業家になったところで実にはリスクであり、人の何倍も働いて初めて成功の果実にありつけるのですから、よほどの覚悟がなければ企業を興すことなどできません。儲けても今の日本は法人税などじつに厳しいのが現実です。リスクを少なくかつ安全に過ごそうとすれば、企業など興さず、じつと我慢して生活することです。

あと一つの知恵として、経済だけでない価値観をしつかりもつことです。無駄なものには金をかけないということ。他人はどうであれ自分の信じる価値観を大事にすることです。なぜなら面白いものには意外に金のかからぬものが多いからです。そのような価値観を持つ人たちは、多分に我慢強くなります。

日本再生のモデルは、あの戦後の生活にヒントが隠されていると思います。あの時代は大人も子供も皆で頑張りました。皆がお金をためて、「勝てるまではけつして欲しがらない」と思っていたのです。

若者こそ国の宝

中村 將陸

英国の歴史学者アーノルド・J・トインビーが『歴史の研究』の中で、文明の挑戦と応戦について深い考察をしていることは良く知られている。日本経済が「失われた二十年」といわれる長いデフレに苦しんできた原因に

ついては、多くの解説がなされているが、中国、韓国、台湾などの新興国の国際市場への華々しい台頭があったことと無縁ではない。新興国の登場以前は、労働者の賃金を上げれば国内需要が増大することを経営者は理解していた。しかし、それ以降は、国際市場が思考の原点となり、賃金はカットすべきコストに過ぎないと価値観を転換させていった。これは別の観点からみれば、日本産業に対する新興国の挑戦と見ることが出来るよう。

こうした挑戦に直面して日本企業のとった応戦は、新興国の安い労働力を徹底的に活用して、自社の生き残りを図ることだった。当初は、国内生産の補完的な製造設

備を持ち出しての進出であったが、国際市場における価格競争の激化に伴い、主力生産設備、最先端技術に加え、雇用までも新興国へ続々と移転させていった。こうした企業の決断は、国全体の観点から見た場合、果たして最善であったのだろうか。特に雇用の流出は、日本の若者に多大な犠牲を強いるものであっただけに、明らかに誤謬だったと私個人は考えている。

およそ一国が繁栄を達成するための最も重要な要件は、次世代を担う若者に希望を与えることである。かつての日本企業には経営上の困難に直面しても、従業員の削減や、新期採用を取りやめることは最後の手段とする倫理が存在していた。苦境に陥った日本企業には、いくつかの選択肢が残されていた筈だ。すなわち、縮小した国内の仕事量を全員で分担するワークシェアリングの採用だ。勿論、製造工程における効率の低下は不可避だったと思うが、困難を全員で分担すべきであったろう。

しかし賃金を単なるコストとしか見ていない多くの企業経営者が取った行動は、給与水準の割高な正社員の枠を縮小し、従業員の非正規化を推し進め、仕事量がさば

ききれないときの、安い労働力を期限付きで採用するというものであった。各社がこうした方式に一齐に転換したことによって、日本社会は暗雲に覆われていくようになった。正業に就けず、生活基盤を失った若者が路頭に迷い、家族も持てず、人生に目標を失い、みずから自分の命を殺めるといふ、あつてはならない悲劇が蔓延するようになったのである。ウルトラ・リベリズムともいふべき市場原理主義を信奉し、労働者派遣法などを制定していった当時の政権政党の自民党は、次世代を背負う若者から情け容赦なく希望と活力を取り上げた。

「就活」といわれる大学生の就職活動は三年生から開始され、学生たちが一〇〇社以上の面接を受けるのは今や通り相場となっている。学生として最も身を入れて勉強しなければならぬ大切な時期に、就活ばかりに貴重な時間を浪費することは、国家的な大きな損失だといわねばならない。このまま放置するならば日本が世界の二流・三流国へと没落していくのは必至である。

私は、日本再生のために、国・企業・大学・学生および家族に発想の転換を強く求めたい。これまでも触れ

てきたが、今や日本の大企業は雇用を受け入れる能力は大きく損壊している。すなわち、就職の対象として過大な期待を寄せるべき存在でなくなっているのである。

学生は、自分を雇う企業が見つからなかったら、自身を雇う企業を立ち上げる道を探すべきだ。就活の時間を自分の会社の設立に注力するほうがマシである。国も大学教育の改革を大胆に進め、理工系、文系を問わず、経営学を専攻していかないすべての学生に、会社を設立する方法を教えるカリキュラムを用意すべきだ。

ネット時代には新事業立ち上げコストや、イノベーション・コストは大いに下がっているといわれている。画期的なアイデアは大企業や大学の研究組織の中からだけ生まれる訳ではない。今の時代、最も重視すべきは独創性と多様性である。新卒者が立ちあげた企業の規模は小さくとも、仲間企業がネットで繋がれば、さらなる多様性が生まれ、斬新な事業が生まれよう。このようなうねりを日本社会に起こすことによって、この国には大きく発展を遂げる可能が残されている。これこそが、二十一世紀のわが国が目指すべき再生の方向ではなからうか。

「やましき沈黙」を守ってはならない

大平 忠

昨年、原発事故についての調査報告書が三通り出た。三月十一日に民間事故調から、七月五日には国会事故調、そして七月二十三日には政府事故調からと出揃った。これらに目を通して考えてみた。

国会事故調報告書の冒頭、黒川清委員長の「はじめに」の言葉の中に、次のような一節がある。

「入社や入省年次で上り詰める『単線路線のエリート』たちにとって、前例を踏襲すること、組織の利益を守ることは、重要な使命となった。この使命は、国民の命を守ることよりも優先され、世界の安全に対する動向を知りながらも、それらに目を向けず安全対策は先送りされた。黒川委員長は、さらに、英文報告書の方では日本文にはない言葉を述べる。『…Our reflex obedience; our reluctance to question authority…』（反射的な従順さ、権威に異議を唱えることへの逡巡）

最後に出た政府事故調の報告書の末尾には、畑村委員長の所感七項目が載っている。これの（六）と（七）の冒頭部分に次のような言葉が記載されている。

〔六〕危険の存在を認め、危険に正対して議論できる文化を作る。…（七）自分の目で見ても自分の頭で考え、判断・行動することが重要であることを認識し、そのような能力を涵養することが重要である。…」

これらの文章に触れたときに、どこかで同じような言葉聞いたことを思い出した。二〇〇九年九月、NHKで放映されたドキュメンタリー番組『日本海軍四〇〇時間の証言』の中であった。第一回放映「開戦 海軍あつて国家なし」のコメントでは、「縦割りのセクシヨナリズム、問題を隠蔽する体質、ムードに流され意見を言えない空気、責任のあいまいさ。…今の社会が抱える問題そのままであり…」第二回放映「特攻 やましき沈黙」では、「反省会に参加していたひとりひとりは、特攻は決して命じてはいけない作戦だと、心の中ではわかっていました。…間違っていると思っても、口には出せず、そうした空気に個人は呑み込まれていく。そうした海軍

の体質を：『やましき沈黙』と表現していました」

東京電力、経産省、原子力安全委員会、これらの組織は、日本でも有数の頭脳を持つエリート集団であった。

彼らは、スリーマイル島、チェルノブイリでの事故の後、米仏諸国が、「メルトダウン」が起こった場合、さらに放射能が外部に漏れた場合の「過酷事故」に対する新たな安全対策を講じた事実を知っていた。ところが、「バックフィット（設備機器の改善・修理あるいは廃棄）」どころか、「バックチェック（安全確認作業）」さえ真面目に行っていないかった。これらの作業をすることによる操業低下と住民、国民の不安が増しての反対運動を恐れた。万が一の事故の場合の住民にふりかかる危険の可能性に対しては「やましき沈黙」を守ったのである。

かつての海軍軍令部も、海兵、海大の成績優秀者のみを集めた超エリートの官僚群であった。彼らは「戦争になれば米英には負ける」と言わず「やましき沈黙」を続けて、本来国民の生命を守るべき軍隊が、組織の自衛のため、結果として三百十万の国民の命を奪ってしまった。

「やましき沈黙」のよってきたる構造は同じである。

原子力村のエリートたちは、畑村委員長の言葉を借りれば、「危険の存在を認めたが、危険に正対して議論できなかった」、あるいは、「自分の目で見て自分の頭で考えたが、判断・行動することができなかった」のである。黒川委員長は、これが、日露戦争以来変わっていない「日本のありよう」であり、人に潜むこの「やましき沈黙を守る」習性を変えていくことが我々の責務と説く。思うに、黒川委員長は、原発の安全基準が今後どのように精緻に作られようと、人の心が変わらなければ同じことが起きると言いたのである。人の心が強靱でなければ二重三重の防壁も無意味であろう。

やはり、教育を考える。子供の頃から、自分の目で見ても自分の頭で考え、何が一番大切かを判断し、大切だと思ふことを実行する鍛錬が必要である。肝心なことは、実行する勇氣を持つ心の強い人間を育てることだ。

幕末まで薩摩にあった「郷中教育」では、「負けるな、うそをつくな、弱い者をいじめな」が大本であった。

これは、太平洋戦争、原発事故をもたらしたエリート集団だけではない我々自身の問題と受け止めたい。

金融緩和術、米国のパラレルに見る

安藤 晃二

日本再生のテーマに迫られる。意気軒昂、ペン編者の思い入れが伝わる。よろしく没交渉など決め込む、のメッセージに違いない。風雲急を上げ、再登場した自民党内閣は、破竹の勢いで剣を振るいだしたかに見える。

経済面で見ると、金融緩和こそデフレ脱却、正常化への秘術とばかり、必ずしも波長が合わなかった日銀を最終に押さえ込む積極策には瞠目する。その希望を反映してか、市場は、株価、円高緩和共に驚くべき勢いで急旋回の体である。グローバル化の進展、外交安全保障問題の先鋭化、震災復興の大きな課題とエネルギー問題が国民的議論を迫る。国政の舵取りが焦眉の急となる所以である。

日銀の専決にゆだねるべき金融政策を剛腕でねじ伏せる政権の手法に驚くと同時に、特段の量的緩和の下、ゼロ金利政策が継続する。現行の金利水準は需給原理に依

るものか、既に民衆は感覚麻痺に陥り、本来老後への義務感で蓄えた大切な預金が、何らの利回りも生まない現実に声ひとつ上がらない。年金生活者にとっては切実な問題である。特養老人施設への長蛇の列、低収入故に施設の間を漂流する老人達の寄る辺ない絶望の表情を、ある特集番組が伝えていた。六十五歳以上の人口比率は二〇四八年には三十八%、三千六百万人に達するという。

「金融緩和とゼロ金利」は「いつか来た道」を思わせ、何故か不安がよぎる。リーマンショックへの道、それ以降のアメリカの金融政策の動きである。いま尚続けられるバーナンキ議長率いるFRBの金融緩和政策に対する米国のある経済記者の意見は傾聴に値する。FRBは米国債と不動産担保証券(MBS)の需要を人為的に創造、金利は長期債券価格に反比例して下がり続ける。超低コスト資金調達術により余裕資金が消費を押し上げるといふわけだ。一般の預金者にとって平均〇・〇七%の年利は論外である。このタダ同然の資金の莫大な受益者は銀行行である。更にウォール街の銀行とトレーダー達は高収

益の下、起債市場で莫大な保証料を稼ぎまくる。何と二〇一二年の起債総額は三・三兆ドルである。また、彼らは市場で国債やMBSを買ひ捲る。背景には、値上がりする時分にFRBが買ひ取ってくれる理想の仕組みがある。(現在、FRBの国債、MBSの購入ペースは月間八五〇億ドル)当然、FRBの貸借対照表が肥大化する。金融緩和が始まった四年前、八千億ドルだったその規模が、今や二兆八千億ドルに膨れ上がっている。金利が上昇傾向に転じた場合、FRBは価値の低減した多額の証券を抱え込む。FRBが更なる損失を抑えるべく、このポートフォリオから降りる動きに出れば、市場は大崩壊を引き起こすに違いない。FRBの抱える時限爆弾である。この金融緩和と低金利政策はその帰結として、国債やMBSのバブルに止まらず、習性として高利回りを求める投資家達を市場で、デフォルト危険度の高い、信用度の低い証券に走らせる。前任者グリーンズパン氏の轍を踏んでいる。当時、大銀行間融通金利が六・五%から一・七五%に急降下し、リーマンショックを招来したのだ。人為的な低金利は金融危機の引き金要因となり得る。

リーマンショックを経て不動産担保証券起債における信用基準が厳しく改善された。この事は負債市場において、常に高利回り証券を追いかける投資家の心理とは必ずしも一致しない。またバブルが醸成され、どこか見知らぬ場所に潜んでいるかも知れない(四、五年前は住宅市場の担保証券であった)。難しい経済政策においてバーナシキは行動し、その金融政策は創造的な賢策と評される。一方、一般預金者は苦しみ、ウォール街が富む。先の危機の硝煙消え去らぬ中、金融危機の再来に繋がりがねない。負債市場からモルヒネを抜き出すべき時は最早遅すぎるのだ。

いま、日米両国共、莫大な公的負債を抱える財政環境下、大規模金融緩和という極度に人為的なアクションが続く。しかし、この先、日本のシナリオである「インフレの実現から景気回復へ」の道筋が見え難い。両国共、危険な賭けに出ないだろうか。

景観の再生

西川 武彦

高度成長時代、全国の画一化が進んだ。鉄道の駅前の街並みや大中小の町のアプローチ沿いは、ガンリンスタンド、パチンコ屋、ラーメン屋などの飲食店、大型店、ラブホテル等々が統一なく連なり、一様に雑ばくな汚い景観で見苦しい。建物・広告・看板など、形状、サイズ、色彩が滅茶苦茶で、近傍、遠方の景色・風景との調和にお構いなく大きな顔をして並んでいるのだ。

太平洋戦争で敗れたあと、軍国主義に代って民主主義となった。本来は権利と義務の両輪で動くべき後者だが、日本では権利だけが舞い上り、その結果、勝手に放題で景観環境も壊されてしまった。

筆者が定期的に訪れる茅野、諏訪、韭崎、蓑参で春秋訪れる御殿場もそうだ。諏訪湖、日本アルプス、八ヶ岳箱根、富士山といった素晴らしい自然景観が損なわれている。景観条例が少しは普及するようになったが、規制

力に乏しく、既成の「汚染」はそのまま残っている。

富士見高原の友人、英国人男性のJさんとドイツ人女性のAさんは、地元の景観保全に関わってきた仲間だが、母国と比べて、歴史・文化・産業、あるいは経済力で決して引けをとらない日本が、なんで景観の破壊に無関心なのだろうと嘆いている。

片や東京では、下北沢の古い我が家に、ワーキングホリデイ・ヴィザで、小一年間シェアハウスしたフランス人女性Lさんは、商店街と閑静な住宅街が通り一つ挿んで存在するシモキタをいたく気に入っている。

狭い道沿いに所狭しと並ぶ、どちらかといえば若者向けの多様な小さい店は混み合っているし、オープンテラス風カフェテリアも常連で賑わう。なぜか西洋人が多い。訊けば「Cool」なのだから。彼らの母国の町と同じ、あるいはそれ以上の品質の衣食住がある。偏見は少ない。物価は安い。人々は親切だ。危険が少ない。近代西洋化に成功し、かつ独特の味わいがある住み易い成熟国家なのだ。

六本木ヒルズとか表参道、あるいは銀座・丸の内辺りには、一味違う高級感溢れる「Cool」さが漂う。

新宿の歌舞伎町と新大久保を結ぶ怪しげな繁華街は、中韓アジア系、旧ソ連圏系など、非欧米系人種がたむろして各国語が飛び交い、日本とは思えない。飲食店・旅館・商店はほとんどがそれらの系列だ。嗅覚、味覚、聴覚、視覚、ひよっとしたら触覚?も海外気分になりかねない。ここも「Cool」なのだ。街とか景観のあり様とは、単に形状が整っているといえるのがよいというわけではない。夫々の特徴を活かして「Cool」であればよいのだ。

脱原発が叫ばれる成熟国家が低迷を抜け出て求めるのは、高度経済成長の再来ではあるまい。労働人口が漸減するなか、長く続く「そこそこの豊かさ」のある国のすがたを求め、今しばらく紆余曲折して探求せねばなるまいが、四季がある美しい風土と景観は、稀有な立派な資源だ。これを活かさない手はない。

三年前に登場した民主党は「観光立国化」を唱えた。ところが、二〇〇三年に四百万台だった訪日外国人数

は、倍増した二〇〇八年をピークに、二〇〇九年には六百万台に落ち、東日本大震災を挿み回復は遅れている。二〇一三年に千五百万、二〇一六年に二千万という目標値は夢のまた夢? 観光庁は閑古庁になったのだろうか?

師走の終り、復元なった東京駅を見学した。およそ百年前、辰野金吾により芸術的に設計された丸の内駅舎が、戦災の傷跡を直し、復原・復興された。昔の姿を残しながら建て替えられた東京郵便局、丸ビル、日本工業倶楽部、垣間見る皇居とあいまって、丸の内の景観は見事に再生、内外の観光客で賑わう一大拠点になっている。二〇二〇年東京五輪による街創りも期待したいところだ。

三年ぶりに政権に復帰した自民党は、早くも震災、原発汚染を忘れたかのように、原発再開を匂わせる。補正十兆円、国債発行枠も四十四兆円に拘らず、とバラマキ復活の気配である。昔風のバラマキは御免だが、公共事業としては、観光立国を推進するために一兆円を投じて、全国に散らばる醜い街道沿い、駅前などの景観を強制的に毀し、法規制できつく縛りながら、土地柄に相応しい街づくり、景観再生を図ることを提唱したい。

男が元気になる社会

小寺 裕子

オーストラリアに住んでいた頃、新聞記事で印象に残ったものがある。今や小学校の小学級に数人は人工授精で生まれた子がいるが、親はその事実を子に知らせるべきか、というものだった。人工授精の普及度もさることながら、子供の知る権利を尊重する姿勢に驚いた。

日本では人工授精は自己負担だが、この国では手厚い補助が出る。羊の人工授精技術が人口増大にも貢献している、と関係者は胸を張る。

一月十日の夜のNHKニュースは、外国で外人から卵子を提供してもらい、体外受精する日本人夫婦が急増という内容だった。妊娠したい時にはすでに卵子が老化していて、自力で子供が産めないという深刻な事態だ。それこそ、子供の知る権利はどうなるのだろう。

ニュースを聞いた時には、なぜこの話題を取り上げているのか、違和感を覚えた。ご丁寧なことに、ニュース

に続く「クローズアップ現代」までが、このテーマであった。保守政権へのご機嫌取りなのかとも思ったが、番組を見ているうちに、これは社会を襲っている恐ろしい変化だと実感した。

夫婦六組に一組が不妊だというのは、五十代以上の世代にとっては隔世の感がある。

我々の世代では恥であった「できちゃった婚」を自慢する友人には首を傾げてしまうが、これも無理なきことかもしれない。

結婚する勇氣を持った男女が、「次は子供を」と思ったら不妊に悩む。しかも、この悩みは相談しにくい。

しかし、不妊という問題は、日本経済や教育の再生に比べれば解決の糸口は見えている。

人間も動物であるから、自然の摂理を尊重すればよい。我々は、平均寿命が世界一になったことで、結婚が遅くなるのも自然だと慢心していたかもしれない。また、働く女性を持ち上げるマスコミに踊らされていた面もある。でも、卵子の老化が始まる年齢は古来より変わっていない。

ところが、魅力的な女性たちは、元凶は日本男児の不甲斐なさだと言う。

「本当はもつと早く結婚したかったのに、結婚というと躊躇する男が多かったです」

「農村では外人の女性を招いてお見合いをやっていますが、我々が外国に見合いに行きたいです」と憤懣やる方ない。

「僕と結婚してください」

「なんで、あなたと結婚しなくちゃならないの」

「やっぱり、だめですよね」

という話も何回か聞いた。

まず、男が弱いということを、母親も先生も認識すべきだ。肉体的にも男は「出来損ない」（福岡伸一の著書参照）であるし、大人になるのに時間がかかる。言葉が滑らかに出てこない。女の子に口でやつつけられても、きょうび手を出したり、スカート捲りも許されない。

男性を一人前にする解決策に、「徴兵制」を挙げる女性もいる。隣の韓国はそれで成功しているらしい。

たしかに、喧嘩もさせてもらえずに成長した男が大半

だが、隔離したら戦闘本能や生殖本能が目覚めるかもしれない。何よりも団体生活で、良いお手本が見つかるかもしれない。

しかし、徴兵制より現実的な解決案を提案してみる。

家庭では、ガールフレンドができたなら、ほめてあげよう。何事も練習が大事だから、学校も男女交際を奨励したらよい。母親は父親を尊敬している姿を示そう。教育ママも、「一流」大学や企業に入れるよりも、生涯のパートナーを得る能力を息子につけさせるべし。

口べたな子、乱暴者だが人情家、ひょうきん者などがその良さを発揮できるように、おおらかに育てたい。女性性は適応力もあり、異なった集団でも違和感なしに群れることができる。それに引き換え、男性は不器用だ。この不器用さは人類にとって重要だから備わっている。しかし、企業が成果主義や、即戦力を求めるようになり、不器用な男の評価が下がっている。

結局は、不妊も、社会の皆が作りだしている。

私も、「口撃」で多数の男性の自信を喪失させてきたかもしれないと、この駄文を書きながら反省した次第だ。

日本の進路を考える

杉浦 右藏

十二月の衆議院選挙は、自民党が衆議院で再可決できる大勝利だった。理由は選挙の仕組みにある。自民党に対する民主党と野党の多数乱立。負けて当然の結果が出た。半年後の参議院の選挙も、自民以外が纏まって臨まないでマタマタ自民党の大勝利は目に見えている。そうになると自民・公明の独壇場になり、国民の総意だとの理由で思うままに日本国の進路を決められるようになる。今回の衆議院選挙の総投票率は五十九パーセントで過去最低の総選挙である。得票率は、自民四十三、公明一強、民主以下五十六パーセントで、自民党の得票率が特に高かったわけではない。乱立で自民党が勝っただけである。

我が国の人口減少は、先行きの高齢化と働き手のバランスが恐ろしく悪い。韓国・中国・ベトナムも日本型アンバランスに近づいている。色々な格差が生じ、バランスを取るコンパクト化への道程も厳しい。貧者高齢者の

切捨てが起る。不況デフレを膨張させた張本人は自民党だ。安倍首相は三年の野党生活を反省し、新たな決意をしたと述べているが、族議員が言うことを聞かないだろう。この先、日銀を取り込んでグルで円の増刷を続けると、円の暴落・日本沈没を加速することとなる。スバイラルインフレで私達の親が体験した国債紙切れ、円は新円、そんな時代の再来は御免こうむりたい。安倍内閣官房経済担当参与・浜田教授が教え子の白川日銀総裁へ贈る言葉の著書も問題と思う。先般NHKでその浜田氏と反対意見の加藤氏の短い対談放送を見た。浜田思考は過去六十年の自民党施政の惰性的な過去形復活だと感じた。安倍首相の所信表明演説に対する民主党の代表質問は、族議員が跳梁跋扈する利益誘導政治・弱肉強食社会を生む新自由主義的な経済の復活だと追及。朝日新聞短評「素粒子」も、瑞穂の国に公共事業の雨が降り、票田を潤し、利権の芽が出てやがて花咲く。夏には選挙で刈取りの季節が始まると評している。

原発事故の後処理と五十数基ある原発を再稼動・廃棄・使用済み燃料棒処理など早急な方針明示が必要である。

最近NHKで、チェルノブイリ事故後二十八年、ビキニ環礁での原爆実験五十九年の放送をした。セシウムの半減期は三十年、元に戻るには百二十年と言われる。この被害の惨状は改善されていない。日本政府は真実を被害者に伝えず、放射能低下など他人事の説明で、実情は生殺しである。国家施策・民間実行範囲・ふるさと丸ごと移転などの目標方針を早急に示し、風化前に被害者救済をすべきだろう。富士山の宝永噴火のとき、幕府は被害地域を亡地と指定した教訓もある。

悲観論ばかりでなく、日本再生の切り札はあるのか。戦後の日本型ものづくり立国は現在以降に成り立たない。米国のヤフーやグーグルに見られるネット主導型、シスコ・アップル・IBMに見られるようなものづくり工場を持たない大会社の形態。日本もここ近年の変化は顕著で、工場は中国・タイ・ベトナム等に移転し、逆輸入状態になっている。技術の要は日本国内にあっても、日本の雇用創出拡大には結びつかない。戦後四十年のものづくり法は、既にタイ・中国に移行しているのだ。次はミャンマー・インドと言うが、それらの国ではインフ

ラから始めねばならない。そのような旧形態は役に立たない。米欧の先を見つめた新しい形を早急に目指さす必要がある。日本にはゼネコンという良い見本がある。米国のボーイング飛行機など典型だ。ヨーロッパはそれに早く気付き、欧州A型機で対抗して成功している。日本はゼロ戦の三菱がトライしているが、日本政府の国家戦略の援助が得られず、苦戦している。韓国のサムソンは国を挙げての良い手本だ。日本のシャープやパナソニックが何故コケタカ。ここ二十年のものづくりの歴史を見れば、コケテ当然の結果だ。NHKのメイドインジャパンのドラマでもない。私の結論は、総力を挙げて統合・インテグラルの先端技術を創設することだ。安倍政権の利権の復活でなく、本当の世界戦略を厳密に選定し、日本国家戦略として十年不動の姿勢で体勢を作ることが必要なのだ。それには格差不公平が生ずるだろうが、人口減少動静と合わせて肅々と進めるしか、日本の生きる道は無いだろう。日本は国力集中化で、欧米・韓国・台湾に遅れを取っている。まだ間に合う。自民党多勢が日本国再生に一丸となってくれることを願うばかりである。

日本の再生をめざして

山縣 正靖

二十年前に、まさか日本の再生、再建が二十号記念のテーマになるほど日本が悪化するとは思ってもみなかったのではないか。ひどいものである。だが、我々OBは会社の再建、事業部門の再生をなん度か経験している。成功したことも、反省しきりのこともあるだろう。今回は、われわれの経験、知見、アイディアを、愛する日本の再生に向けて語ればよい。「難問解決、OBの底力」が日本再生にむけてのブレインストーミングになることを期待する。かく申す私が反省していることが二つある。

まずこんなに悪くなったのは何が問題か、何が悪化の原因か、何が改善を妨げているのが、なかなか判らなかつた。表面的な観察から判ることもあるが、裏に隠れている真の原因が判るまでに時間がかかつた。もつと現場の声を聞きだす、あるいはそういう情報を持つ人を引き込むべきだつた。

概して社長直轄の企画部門、コンサルタントなどは現場にあまり行かないし、現場の人は参謀肩章を吊っている人を信用していないから、本当のことを話してくれないものである。再生を成功させるには、まず現場に入つて物事の本質を見抜く軍師を集めることである。

次に再生戦略をたてるのだが、戦略には文字通り二つの意味がある。

「戦」…すなわち、如何に戦うか、正しい作戦計画をたてること。

「略」…すなわち、如何に人を動かすか。

―社長はどういう行動をとるか、各役員にはどう行動させるか（妨害する、サボタージュする役員が結構いる）。

―現場の社員が参画するようにどんな働きかけをするか。

―組合や協力会社を協力関係にもつていく。

―競争相手を欺く。妨害勢力を説得し、だめなら排除、沈黙させる。

―国の場合はなんといつても力のある官僚諸侯を動かす。

よくある失敗は、社長が「計画はできた。チェンジ―」と飛び出す、うしろを見ると社員が付いてこない。事

業仕分けを始めたが、官僚がそっぽを向いて、骨抜きにされる、等々。

世に再建の神様と言われる人は、現場に行つて本当の悪化の原因をみぬいて、正しい作戦計画を立て、誠心誠意で人を動かす御方、と見受けられる。

さて、日本再生のブレイクストーミングに、アイデアを一つエントリーしたい。現在の日本の苦境、難問は数多いが、その中でも恐るべき危機が二つある。

——日本の国内産業が韓国、中国などとの価格競争に敗れて衰退、廃業し、大企業は海外に移転して、国内の設備投資が減少している。国内協力会社も廃業に追い込まれている。いずれ国際収支も悪化するだろう。

——働く若者が減少して、働けない老人が増える。じわじわと老人の生活を支えられない社会になる。

この危機に対して、(一)価格競争力の奪回、(二)老人に替わつて働いてくれるパワーを生み出す、一石二鳥の妙手はないか。小生のアイデアは、コストダウンロボットを日本の技術力を結集して開発し、価格競争に敗れつつある産業に、働けなくなる老人の数だけ配備す

る、というものである。一台三百万円の価格競争力奪回ロボットを一千万台配備すると三十兆円かかる。それを十年計画で導入するには、我国の金融資産を中小企業に円滑に振り向ける金融制度を創る必要がある。

そんなこと出来ないよ、と言われるだろうが、それならもっと良い代案を出して欲しいのです。日本の技術力なら必ずできるし、やらねばならないと思っています。

今回の挿絵に、キヤノン、ニコン、オリンパスの懐かしき名カメラと零戦を描きました。いずれも日本の技術力の誇り、戦後復興の旗印でした。



「ミレニアム・ジャパン」の礎石

橋本 政彦

二〇一三年、平成二十五年、巳年の新年を迎えました。元旦からの快晴も、成人の日の朝からは雨が雪へと変わり、一昼夜も降り続けました。翌朝、凍結した道に難渋する新聞配達バイクの音が目が覚めました。その危険な道を通り過ぎていくさまは、「失われた二十年」に呻吟する今の日本の姿に重なって見えたことでした。

一九九一年にバブルが弾けてから、国力のパロメーター、誇りの裏付けでもあった経済力は低迷し、社会の安定は揺らいでいます。コスト・カットは非正規労働者数を増加させ、その比率は今や総労働の三十五%に達し、賃金も長期に低落して経済格差は拡大し、国内消費に回復の兆しは今尚見えません。デフレ経済のトンネルの中で国民からは余裕と明るい展望が失われています。市場経済の自由化、グローバル経済は世界を平和に豊かにするとの信仰もその限界を露呈し疑問符が付き、リーマン・

ショックや欧州の財政危機はそれを実証し、世界はその解決に多大のエネルギーを注ぎ、困難な舵取りを続けています。日本では二〇一一年に東北地方を大震災と大津波が襲って多くの死傷者や犠牲者が生じ、福島原発ではその爆発でわが国三度目の核被害を齎し、多くの人々が苦しんでいます。この自然・人的な大災害はわが国のこれまででの在り方に大きな疑問を投げかけ、その見直しを迫りました。それは新たな日本の姿を新たな価値で作りに直して日本再生を目指すことを意味しています。

巳年の今年は、「百喻経」の「蛇の頭と尾」の寓話を思い出させてくれます。これは一匹の蛇の頭と尾がお互いにどちらがすぐれているかを諍った譬え話です。頭は尾に「われに耳ありてよく聞き、目ありてよく視、口ありてよく食い、行く時には前にあり、この故にわれすぐれたり」と言う。尾は「われ汝を行かしむるをもつて汝は行くを得、われもししかせずんば、汝、はた、いかにがするものぞ」と言いかえし、怒って尾を木の幹に巻きつけて離しません。根負けした頭が尾に「汝すぐれたり。われに先だちてすすむべし」と降参。尾は喜んで前

進しますが、幾歩も進まずに火坑に堕ちて死んでしまうというストーリーです。この話は、お互いがその役割を理解して一致協力する大事さを、あるいは道理が顛倒すれば事の成就是不可能なことを表しています。また、大局を見誤り、その対応に失敗すれば破局に至るとも解釈出来ます。死んで事は始まりません。生き抜いてこそより良き未来を築けます。死に至る非常時を未然に防ぐ手立てを備えることです。非常時と平時の区別が出来、それに臨機応変に対応できるシステムが不可欠です。小さな乱れさえ痛みを生じ、ゆとりを失わせて不安を増幅させ、秩序の乱れや組織崩壊の序曲になります。

昨年末の衆議院議員総選挙では自民党が勝利し、政権が交代しました。十二年前の巳年の二〇〇一年には米国で同時多発テロが勃発、その年末には中国がWTOに正式に加盟し、その存在感は近年益々増大しています。その前の巳年一九八九年にはベルリンの壁が崩れ、東西冷戦が終結、米国の一極支配が叫ばれました。しかしその後、米国のパワーは相対的に低下し、1/4世紀経った現在、世界のパワーバランスは大きく変化しています。

「われわれは今どこにいて、これからどこに向かうのか」その解決が日本のみならず世界でも痛切に求められています。それは将来の世界像をどう構築し、どう維持していくのかもであり、「非常時」と「平時」の再構築をどうするかもあります。自分の足で立てる、身の丈にあった国家を、「国防も含めた非常時への備え」をも除外せずに検証すべき時です。国の安定は民心の余裕、落ち着き、政治、経済の安定です。この両輪のバランスが崩れれば秩序は乱れ、混乱が生じます。とくに民主・自由主義国家は独裁・専制国家に較べそれが顕著で、そこを狙われます。『未完のファシズム』、『国の死に方』の著者・片山杜秀は「国家の総力を結集できないように作られ、現在も引き継がれている日本政治のシステム不備に無知であることの危険性」を強く指摘して、共感を覚えます。

民心の痛みは国のバランスの乱れです。痛みを和らげ、その原因を深く求めてより良い未来へのアイデアを着実に実現することが肝要です。「非常時」へのシステム整備、余裕こそが日本再生への近道です。

日航は再生した―日本も再生できる―

都甲 昌利

「再生」の意味を辞書で引くと「死にかかっていたものが死んでいたものが生き返ること。廃品となったものを再び新しい製品に作り直すこと」とある。

いま日本に充滿している政治への不信、格差の拡大、役人の汚職、理由もない殺人、いじめ、セクハラ、パワハラ、高齢者の孤独死、自殺者の増加。60年も続いた自民党支配の後、民主党政権が誕生したが、国民の生活はますます苦しく、若者は未来に希望を見出せない。日本中に閉塞感が充滿している。救いようのない終末的あるいは絶望的な現在の日本。この状況は死にかかっていると言っている。この日本を蘇らせるにはどうすべきか。今年再び自民政権が復活したが、再生はなるのか。

私が奉職した日本航空は二〇一〇年に倒産した。つまり会社は死んだ。しかし、二〇一二年見事に再生した。

民間会社と国家とは比較にならないが、その再生手法や哲学は、国の場合も同じだと思う。

日航再生の第一は、稲盛和夫氏という有能なリーダーがいたことである。日本再生にも有能なリーダーが必要だ。日本は議院内閣制だから、内閣総理大臣は国会で選ばれる。だが、選挙制度は小選挙区・比例代表制のため、政権がコロコロ変わる。首相の任期も一年か二年だ。これではリーダーシップを発揮できない。国民が直接選ぶことができるように法律を改正することが必要だ。

第二に、稲盛氏が行った日航再生の施策は「経営数字に対する意識」を幹部や社員に徹底させたことだ。コスト意識である。この意識を全員に徹底させるのは至難の業だが、稲盛氏は先ず、リーダー教育と称して、経営幹部を一カ月間徹底して教育した。次にこの幹部が全社員を教育した。国家に関しても、予算が審議され、国会で可決された予算を執行する際、財務大臣や財務省官僚は果たしてコスト意識を持って予算を執行しているだろうか。無駄な公共投資をし、費用対効果という意識がまるでない。彼らにはこの予算は国民の血税だということを

忘れていたような言動が見られる。それもそうだろう、税金では国家運営は賄うことができず、国債を発行しているからだ。会社で言えば借金経営だ。

借金をすれば膨大な利子と共に返さねばならない。JALは膨大な借り入れをして倒産した。国債による財政出動はカンフル剤だ。未来に禍根を残す。

第三に、稲盛氏は社員に「会社としての一体感」の必要性を説いた。経営が苦しくなると、各部門で責任の擦り合いが起こって、日航は空中分解した。稲盛氏は経営の目的を示し、共通の価値観を示した。国家の場合、国会の審議を見てみると、議員たちの言動にまるで一体感がない。選挙を気にして政党間を渡り歩く。自己保身だけが彼らの生き方だ。

第四に、「お客様の視点に立った経営」だ。航空会社は乗客を安全に目的地まで運ぶのは勿論だが、究極のサービス産業である。心のこもったサービスが不可欠だ。政治家や官僚にはこの精神が希薄と言わざるを得ない。国民はお客様なのだ。政治家・官僚は public servant というではないか。ところが、族議員として選挙基盤のあ

る身内に利益誘導をしているようにしか見えない。政治家は全体の奉仕者でなければならない。

最後に、「業績評価」。これは第二の「経営数字」と関連するが、各路線別の売上、経費、採算など経営実績を即座に出さねばならない。企業目的は利益だ。利益を出すには売上げを増やす必要がある。増えない場合はコスト削減だ。稲盛流削減は、機材の部品からコピー用紙一枚に至るまで値段をつけて、社員にコスト意識を徹底させた。ケチ稲盛と言われた。

今までの政権は業績評価をして来たのだろうか。これをやりましたという実績は我々に伝わってこない。議員の故郷に新幹線駅を造ったり、要らない高速道路を結びつけたり、無駄なものだけが目に付く。ソフト面でも、年金制度、医療制度、教育制度なども崩壊の寸前だ。政治家や官僚が稲盛流のコスト意識をもち、国家のプライマリバランスを常に国民に示さなければならない。

日本再生は政治家に任せておいてはいけない。我々一人一人が成すという意識が必要だ。常に政治を監視しよう。日航だって出来た。日本再生もできる。

反省

市川 忠夫

二十一世紀も、十二支が一巡した。ある人が、「今世紀に入ってから日本の政治は、小学校から高校までの学校時代によく似ている」と言った。

彼の学校時代はこうだった。

入学した小学校の校長先生は小泉先生だった。先生の身振り口振りがとても面白く、生徒たちに大人気だった。楽しい雰囲気の中で、あつという間に六年間が過ぎた。中学に入ると生徒会が前面に出てきた。生徒会長は毎年変わったが、その名はよく覚えている。初めは楽しい気分だったが、年ごとに重苦しくなり、勉強した感じはあまりしなかった。高校でも主役は生徒会であり、生徒会長はやはり毎年変わった。小学校や中学校とは雰囲気さがらりと変わり、何か新しいことが出来そうな気がした。しかし、一生忘れられないような大きな出来事は経験したが、何も身につかないうちに、卒業となってしまった。

けれども、彼の体や頭や心は、六三三教育の十二年間に立派に成長した。一緒に過ごした友達も皆、同じように大きく伸びている。

今世紀に入ってからのは日本は、自民小、自民中、民主高の六三三政治であったが、私達はこの十二年間、一向に成長や発展を感じられなかった。なぜだろうか。

六三三教育は、六歳から十八歳の時期である。例えば教育があまりよくなるとも、この時期ならば人間はよく伸びる。日本の国にもこれと同じ時期があった。一九五五年から一九七三年の高度成長期がそれだ。今やこの時期をとくに過ぎているのに、今世紀の日本の六三三政治のやり方は一向に進歩していなかった。

郵政民営化、T P P、原発、社会保障と税の一体改革……等々、個別の問題ばかり議論するのではなく、もっと大事な課題に目を向ける必要があったのだ。「国家の年齢、地球や世界での役割」を自覚し、さらに「それに相応しい人間の幸福とは何か、どう生きるべきか」を深く考えなければならなかった。

ここに二つの大事な課題を挙げたい。

最も大きくかつ時間のかかる課題は、「地球の有限性をどう克服するか」である。現在すでに、空気や水の汚染、地球の温暖化、環境の破壊、資源の枯渇……等々が発生し、自然の持っている自浄能力を大幅に越える負荷を、地球に与えている。原因は、日米欧、いわゆる先進国の人々のライフスタイルにある。困ったことに、新興国の人々まで、先進国の人々のライフスタイルを目ざして、ひたすら経済成長に励んでいる。これは、人類が総力を挙げて、人類絶滅に取り組んでいる姿だ。

もうひとつの大事な課題は、「人間の本来性にどう対処するか」である。世界の科学者や技術者、官庁や企業の幹部は、利便性と効率性を日夜追究している。しかし実態は、利便性や効率性と引き換えに、人々の心に欠くべからざるものの多くを失いつつある。コンピュータやロボットは意図せぬ領域でも威力を発揮し、多くの人々の仕事を奪っている。さらに、これらが大きな経済格差を生み出し、人々の心に不安や不満を沈殿させている。

「地球の有限性」や「人間の本来性」を軽視した結果

を見たければ、世界の大都市を訪ねればよい。GDP世界一位米国のニューヨークでは、人々は心の安らぎを失い、不満を噴出させ、「我々は九十九%（ウォール街を占拠せよ）」デモを行っている。GDP世界二位中国の北京では、人々は毒性を帯びた物質を含む大気汚染に苦しんでいる。GDP世界三位日本の東京は、過密を極め、ミュンヘン再保険会社の評価によると、災害リスク指数がダントツに高い。さらに悪いことに、予測されている首都直下型大地震や富士山大噴火への備えも足りていない。

将来を見据えた重要な課題を議論せず、個別の施策にばかり注力してきた結果が、これらの都市に如実にあらわれている。このような結果に導いてしまった政治家の責任は免れないが、それらの政治家を選んでしまった有権者も同罪だ。二〇一二年末の選挙では、「地球の有限性」や「人間の本来性」を認識している人物に投票しただろうか、と二〇一三年になってから反省している。

いや、まだ諦めるのは早い、次の選挙がある。

日本再生の突破口

野上 浩三

日本経済を誤らせた歴史

日本再生を考えるには、再生の前提となる「日本」と、再生を要する状態に陥れた原因の分析が必要である。

わが国は、プラザ合意直前までは「豊かな国作り」が可能な位置にあった。その実現を阻んだのは、過度の円高と平成バブルの発生・崩壊である。

日本経済が強かった一九八五年の初め、中曽根首相が「強い日本に相応しい円ドル・レートにしたい。二五〇円を先ずは二二二円、次いで二〇二円くらいにしたい」と言い出した。折良く、アメリカのレーガン大統領が「ドルを安くしたいので協力して欲しい」と打診してきた。レーガン大統領も強いドルに固執していたが、ベーカー財務長官とダーマン副長官が懸命に説得して、ドル安志向に切り替えさせたのであった。渡りに船であった。

一九八五年九月、ニューヨークのプラザ・ホテルで五カ国蔵相会議が開かれ、日米の要望を容れた合意が成立し

た（この部分、船橋洋一著「通貨烈烈」）。

一国の首相が円高志向を表明したことは、国際投機筋の恰好の餌食となった。アツと言う間に二〇〇円を突き抜け、八七年十二月には一二三円となり、現在の八十〜九十円に至った。その間、わが国の輸出型企業は塗炭の苦しみに陥った。新潟県燕市の金属洋食器メーカーなどは三分の一しか残っていない。

一ドル二五〇円の時にはアメリカで一〇〇ドルで売れば採算が取れていた製品が、一ドル一〇〇円になった後は二五〇ドルで売らないと採算が取れなくなった。わが国の企業は完全に国際競争力を奪われた。

一方の平成バブル発生・崩壊の遠因は、一九六八年に導入された時価発行制度にある。

時価発行制度は、新株を額面ではなく時価で発行することである。証券業界の長年の願望と自己資本の強化を急務とした産業界の利害が一致して、導入された。代表的な機関投資家の生保業界などは大反対したが、ごまめの歯ぎしりに終わった。

導入に際して十全の法制度の整備が行なわれなかった

ために、一九八〇年代後半の超金融緩和時に、時価発行制度が魔物化した。特筆すべき弊害は、①株価工作が行なわれて発行価格が実力の数倍高く設定されたこと（賈金作り）、②調達された大量の資本が投機に流用されたこと（平成バブルの元凶）、③配当やプレミアムの還元義務が履行されなかったこと（株主軽視）であった。経済の心臓である株式市場が破壊され、日本経済はマヒ状態に陥られた。

日本再生への突破口

以上の歴史から、国際競争力の奪回と株式市場の立直しが突破口となると言い得る。

二〇一二年十二月の衆院選で自民党が圧勝し、安倍政権が誕生した。その後から円高の是正と株式市場の上昇が始まった。円高是正は中曽根路線とは正反対のもの、わが国に根強く存在する「円高信仰」を否定するもの、として評価し得る。

円高信仰の前提となっている米ドルは、もはや基軸通貨ではない。アメリカがプラザ合意で、①国際間で広く

使用される決済通貨、②各国通貨の価値基準となる通貨、③国家によって対外準備資産として保有される準備通貨、という基軸通貨の三つの条件のうちの②を放棄したからである。

今や、国際通貨の世界はハンディキャップ制に変わっている。日本はドル一〇〇円前後のハンディを申請して、輸出型企業の競争力を奪回すべきなのである。

一方の時価発行増資を誤らせた最大の原因は、株価工作であった。株価工作は法人間で市場から株式を買い上げ合う形で行なわれた。その結果、上場株式に対する法人の保有比率がピーク時には七十三％に達した。それがバブル崩壊後に売却を迫られ、今日まで株式市場を圧迫してきた。この保有比率は二十年を経て五十％以下に低下した。株式市場が本来の軌道に戻り、東証ダウが二万円円になる可能性は高い。そうなれば時価総額が二〇〇兆円増加し、大きな経済効果をもたらす。

この二つの流れを恒久的なものにするには、法律・制度の整備が必要である。安倍政権の評価は、そこまでやれるか否かにかかっている。

新嘗祭に再生を願う

森田 晃司

天皇陛下が新穀を皇祖神と共に食されて祝う新嘗祭は勤労感謝の日（十一月二十三日）に、収穫を感謝して行われているのはご既承の通りです。しかし、明治の改暦前までは旧暦の霜月の下の卯の日に行われてきており、冬至の前後に当たる時期です。収穫祭にしては些か遅すぎるタイミングであり、むしろ稲の再生を願い、来る年の豊作を祈念することに重点が置かれていたようです。ところで昨年の旧暦には閏月が入った関係で、新暦に対して例年より十日ほどずれ込み、その結果、昨年の霜月下の卯の日は新暦では何と元日と重なりました。新旧暦をませこぜにして恐縮ですが、何とも縁起の良い年明けです。

折しも頼もしい新政権も誕生しました。今年の元日は日本の再生を願い、その門出を祝う日であったと考えています。

さて新政権は経済の復調を最優先し、大震災からの復興と米国との関係修復を喫緊の課題と位置付けています。確かに、国内外からの信頼を回復するには、先ずは国民が自信を取り戻し元氣よくなる施策が優先されるべきでしょう。

しかし、バブル崩壊後の二十年余りにわたる方向感のない日本の停滞を見れば、中長期的な観点からは日本人が自らの国の歴史と文化に誇りを取り戻すことが何よりも重要な課題ではないでしょうか。日本人は、四囲を海に囲まれた自然の領域の中で、ハンチントンの『文明の衝突』でも独立した文明と認められているように、東洋圏とも一線を画する独自の文化を育んできました。

例えば、その言語は言語学者によれば世界に類語が見つかからない独特のもので、漢字を導入したものの、漢語の受け入れは最小限にとどめつつ、かなを開発するなどの工夫で、日本語を日本語として表記するための文字として漢字を上手に活用してきました。このために言語の連続性が保たれ、現代人でも万葉集が理解できるといふ素晴らしい歴史を生みだしています。

縄文以来の豊かな食環境に恵まれて、食用の家畜をもたなかった唯一つの文明国でもあります。このことは生きとし生けるものを慈しむ山川草木悉皆成仏という日本人の精神の中核をなしてきた思想と深くかかわっています。また、西アジアの最古の土器は約八千年前とされますが、最古の縄文土器は一万七千年前と推定されています。火焰土器の質の高さも群を抜いています。縄文文化は古さも質の高さも世界最高級です。

都市に城壁がないというのも誇るべき日本の歴史です。ユーラシア大陸ではどこもかしこも戦争の連続で、都市は城壁で囲まざるを得ませんでした。日本では二、三世紀の「倭国大乱」の時期と戦国時代を除けば城壁がいらぬ平和国家であり続けました。江戸時代は銃砲の製造を禁止していたほどに平和で、婦人のみでも旅ができるほどに治安のよい自給自足社会を実現していました。皇室が永続していることを始めとして長寿企業が多いことも日本の特徴となっています。古きを尊び、敗者を敬し、滅びゆく者を蔑にしない文化です。

高い精神文化は戦国期に訪れたフロイスなどの宣教師

や維新前後に来日した欧米人を圧倒するほどでした。万物の霊を敬し差別しない心と至誠を重んじる強い倫理観などが日本人の精神を支えてきました。幕末には男子の識字率は五十%を超えて世界一だったと推定されるほど、文化も知識もあまねく普及していました。平安時代には女流文学が早くも花開いていたことも日本の特色です。

個々に例を挙げて行けば枚挙に暇がないほどに特色のある日本の文化が、明治維新以来の行き過ぎた欧米化によってややもすれば蔑にされ、敗戦後の占領軍による言論統制やマルキシズムによって虐げられ、疎んじられてきました。

しかし、近年の閉塞状況を打破するにはかけがえのない日本の文化と歴史を見つめ直しながら、グローバルイズムや中華覇権思想などの大波に対処して行く必要があるのではないのでしょうか。多様性の尊重が叫ばれる現代こそ、私は「日本は日本らしくあり続けること」が日本のなしうる最大の国際貢献であり、それはそのまま日本再生の道へとつながるのではないかと考えています。

ようこそ日本へ 馴染んでね!

稲宮 健一

「何でも書こう会」に向かう途中、代々木公園を通ると「日本初飛行の地」の記念碑が目にとまった。

一九一〇年十二月十九日、ここ代々木練兵場で徳川好敏大尉がおもちちゃんのような複製機で、高度七十m、三km飛んだのが本邦初飛行だった。その時、百年後の飛行機の発達を誰も予想できなかったらう。

これと同様に、誰にも次の百年後の姿を確かな形で予測することはできない。しかし、この世紀に重く押し掛かってくる難題は挙げられる。即ち、世界人口が二〇五〇年には九〇億人に達し、食料危機と環境破壊の発生という悪夢である。

青い地球家族が活動できるために、食料と人の活動を支える力を生み出すエネルギーが必要である。力を起こすエネルギーは産業革命以来、簡単に熱源が得られる昔の太陽光の缶詰、化石燃料を活用した。その大量消費が

環境破壊を引き起こした。

では燦々と降り注ぐ今の太陽光エネルギーを直接使えないか。太陽光の実力は、地球を照射する太陽光エネルギーの〇・五%を人類が取り込めたとするなら、現在我々が使っているエネルギーの六十倍強に相当する力を与えることができる。百年後はこのエネルギーで人類が生きていくことは確実だと思われる。食料を生み出す光合成に使われているエネルギーは〇・二%である。光合成の仕組みの解明も進んでいる。

課題は、社会の全活動源を太陽光エネルギーが賄う社会に至る道筋の途中で、如何に人口爆発と戦いながら百年後の社会を作る妙案を確立できるかである。

この戦いには二面性がある。一つは太陽光を効率よく電力に変換する方策と、取り込んだエネルギーを無駄なく有効利用する方策である。前者の研究開発は各種の方法について着々と進んでいて、ソーラーセル（太陽電池）の場合、現在の変換効率二〇%前後が、研究室レベルでは五〇%超に達している。後者に関しては省エネの工夫である。この点では日本は世界で一番進んだ国である。

現代の高い文化程度を保ちながらエネルギー的に身軽な社会の「売り」に日本再生への道がある。

代表例として、日本の大都市の中枢部では、地域冷暖房が広い範囲で行われ、郊外であっても、燃料電池を活用した発電、蓄熱の高効率の生活空間が順次広まっている。また、郊外と都市の職場を結ぶ、網の目のように発達した省エネの優等生として、鉄道網、あるいは、自動車であっても、燃料効率の優れた移動手段が揃っている。海に目を転ずれば、養殖漁業が発達して、ハマチなどの「囲う養殖」から、鮭のように「大海への放流」で世界の漁業資源の再生に寄与している。もうじき、鮭も、鰻も人工孵化され、この仲間入りをするだろう。

途上国では工業化とともに増大する都市住民が、エネルギー効率の悪い生活環境下で生活している。地球住民として世界の環境保全のため、この状態の改善に寄与したい。

小泉政権時代に、観光客のための「ようこそ日本」のキャンペーンが張られたが、日本式生活を深く実感してもらったためには、滞在型で日本の生活をじっくり味わっ

てもらうことが良いと考え、「ようこそ日本へ 馴染んでね！」を提案したい。

日本社会では核家族が進み、人口は増えないが、医学の進歩か、元気な高齢者が増加している。一間なり二間なり、客人用の部屋の余裕があつて、自由な時間もある高齢者が多いので、この人達が途上国の人達を招き、暫時家族として、日本の日常生活を体験してもらえれば、「ようこそ日本へ 馴染んでね！」が成り立つ。

客人をどのように接待するかは、招く人たちが工夫し、頭を使って企画する。この活動は健康維持に役立つと同時に、優れた民間外交の役割も果たせる。

例えば、観光庁で民間滞在型計画のホームページを立ち上げ、各人が策定した自宅活用の滞在招待計画を応募させ、ホームページで広く公告すると良い。滞在する部屋や、近隣の環境、招待者の経歴等は公開する。費用は経費に計上できると良い。

途上国の仲間を増やし、高効率な日本の生活に馴染んで頂ければ、これから始まる途上国の社会基盤の構築に日本が寄与できる機会が順次増すと思う。

若者と共に

大泉 潤

一、何を再生するのか

私立大学の学長を務めた友人が述懐した。最近の学生にいくつかの特徴がある。授業中も私語が絶えない。日本語がうまくない。一言でくくれば、社会性が無い。それは、若人が将来に期待を持っていない、持てない環境にあるからだ。彼らの親の世代は高度成長期に育ち、日本経済は年率二桁の勢いで成長した。仕事は忙しく、早朝夜間勤務のハードワークも賃金の増加で報われ、資産も同じペースで豊かになった。

ここ十五年、日本の成長は止まり、水平飛行になっていく。巷には東南アジア製の商品が溢れ、就職氷河期、失業率上昇、派遣労働の増加と若人が夢を持ちにくい時代になった。日本再生の原動力のエンジンを若い世代に期待するのは限界がある。高齢者、現役、若人が分担しなければならぬ。

再生すべきものは、若人の意識・行動とそれを支える社会環境、政治・経済の在り方だと思ふ。修身齋家治国平天下の気概を持つことではないだろうか。

日本経済の現状を俯瞰する。日本は、狭い国土、多い人口、豊かで美しい自然、穏やかな気候、穏やかな性格、豊富な歴史、優秀な人材などが特徴と思ふ。

二、日本経済が停滞している事情

戦後しばらくは、日本型加工貿易が成功した。六億トンの資源を輸入して、優秀で低廉な労働力を駆使し、自動車、弱電、繊維製品など八千万トンの製品を輸出することによって巨額の差益を生みだした。高度成長を三十年以上続けた。欧米の先進国に高度技術の日本製品が輸出された。しかし、東アジア諸国が平和になり、秩序が回復すると、人件費が十分の程度に加工貿易の主力は移転した。製品コストで、半分を占める人件費が割高な日本は競争力を失い、日本のコモデティ加工産業の多くは空洞化し、多くの労働者が転職、失職した。加工産業は人口豊富で低廉な賃金の国を求めて、西南へと海を越えて雁行している。まさに学生時代に教えられた国

際経済の理論を目の当たりにする思いだ。

産業・金融政策として低金利、インフレを図っているが、なかなか効果が上がらない。もともと投資による拡大は、迂回生産による乗数効果と流動性選好で説明される。昔のようにダムを建設するためのセメント工場、製鉄、掘削機械は、すでに飽和状態なので乗数は一をほとんど越えない。また法人も資金を潤沢に抱えているため、金利を負担する資金需要が少ない。インフレ・為替操作は一部富裕層の投機の対象である。また国債増発は、将来世代の負担を増すばかりだ。

三、日本の国民性

一方、日本国民は健康で文化的な最低限度の生活を保証され、国は社会福祉、社会保障、公衆衛生の向上、増進に努める義務を負っている。不景気による税収不足、高齢化による国家予算の増大で、ついに国家財政は破綻し、今や政府債務は一千兆円に至った。国富（国の資産から負債を引いた正味資産の額）は三千兆円を超えているから心配無用との説もある。しかし現在の資金の流れは、次のようになっていいる。庶民は銀行に預金する。銀

行は健全な貸出先があまりない。企業は財務の健全性のため、節約して貯金を残す。従って投資も自己資金で賄う。故に銀行は資金の運用先を国債に求める。銀行は本来の産業資金供給の使命を求めず、安全な国債でささやかな金利収入を追っている。今や銀行は本来の産業資金供給から、国債手数料収入、遺言・相続斡旋に墮してしまっている。「自分は銀行に預金しているのであって、収入の二十倍の借金を持つ国に貸しているわけでは無い」との銀行預金者の声も理解できる。

平穩に見える日本は、再生に向けて早くスタートしなければならぬ。一億以上の民が、あまねくこの状況を理解し、再生の気持ちを持共有し、これから活躍する若人が将来を背負って立つ元気が第一と思う。右肩上がりを経験した中年以上の世代は、停滞社会を具体的に理解することは難しい。若者が明るい未来を信じて元気を出してくれるのが一番だ。そのために何をしなければならぬか。それが問題だ。「名を挙げ、身を立て、やよ励めよ」の気持ちを伝えたい。

ザ・デイ・ビフォー・トゥモロー

細谷 博

「水は低きに流れる」という万有引力の法則が働かなくなったのに気がついたのは、いつ頃のことだったか。

最初は会社の近くのラーメン屋で日本人のおねーちゃんが見んな消えたことから始まった。まずタイ人、ブラジル人、中国人が取って代わり、やがて店長まで中国人となった。

ついで、バーやクラブから日本人のホステスが居なくなり、そのうちに外人ホステスを「売り」に結構流行っていたはずのそれらの店までが、次から次へと閉店となった。訊いてみると、外国人従業員の入国ビザ問題や彼ら相互の犯罪行為が相次いで、ママ達はおちおち眠っていられない、かといって日本女性はもう働きに来てくれないし、とてもやってられないとのこと。

長年続いていたジョギング経路に在った中小の機械屋さんや次々と消えて行くので、知り合いの親父さんに訊

いたところ「注文はあるが人手不足でね。六十代、七十代の爺だけでは工場は維持できない」と。テレビの特集番組で見ると、伝統的な工芸などで後継ぎが居なくなって、その技術と店とがなくなっていた話が、町の真ん中でも起こっていたのである。

その傾向は年々強まる一方で、若い働き手を求める中小企業に、特に大戦後の日本の産業躍進の底辺を支えてきた高度な技術を持った職人たちが働いているような職場に、若い人たちが見向きもしないので、企業側が集団説明会を開くなどの前代未聞の事態となってきた。つまり、働き手という需要があるところに、そこに適した人達が自然に流れて行き、労働賃金つまり給与もそれに見合っ上がる、というのが市場の常識であったのに、その論理が働かなくなったのである。

もっと深刻な例では、欧米先進国で実用に供せられている新薬や新技術に基づく医療装置の薬事法上の認可が遅れる、いわゆるドラッグラグやデバイスラグが発生する最大の原因は、厚生労働省の審査委員の処理能力不足が大きな一因であって、みすみす助かる命が失われて

いるとか、懸命に働く労働者の最低賃金より二百三十万人の生活保護者の手当の方が高く、さらに不法支給を摘発できないのは担当係員の不足のためとか、大震災の復興の遅れの大きな理由は、現地行政組織自体が震災の被害を受け、その穴埋めが応援の不足で追いつかないためとか、T P P参加の是非で最も大きな障害となっている問題の農家は、今のままでも減反が続く上に、近い将来高齢化で消滅すると判っているのに、選挙での票稼ぎと農協の生き残りのために、首を絞める真綿に予算をつぎ込むとか、病院の収入確保のために意識もない病人を胃ろうと生命維持装置で無駄な延命措置を施して、なげなしの医療予算を食い潰すとか、子供が減り独居老人が増えているため面倒を見る人もいない自宅介護に予算をシフトする医療政策とか、特別養護老人ホームの空きベッドは十分あるのに入居待機者が四十万人も居るのは、今最も求められる介護ヘルパーが低待遇のため規定の人員が確保できないためとか、超多忙で労働条件が悪化のため産婦人科医と小児科医を中心に医師と看護師の絶対数が不足し、地方の中核病院が相次いで破たんすると

か、その看護師不足対策で東南ア諸国から志望者を集めておきながら、日本人でも難しい漢字専門用語一杯の国家試験で大部分をふるい落とす厚労省とか、自分の意見を堂々と主張できる国際的な人材を企業が求めているのに、海外留学は就職に不利だと、せっかく国際的に活躍するチャンスを自ら捨てる大学生とか、どこもかしこも人材不足で困っているのに自ら失業の道を選ぶ若者が溢れている、という「珍現象」の数々。

さらに四十年後には絶滅の可能性が高い人類のために、目の前の子供や孫の生活を犠牲にする原子力規制委員会も何とも不思議な存在である。阪神淡路大震災で俄かに存在が知れわたった活断層は二本以上あると確認されているが、現在の委員会の調査の仕方では活断層は無数に出てくることになる。

何年前かに「ザ・デイ・アフター・トゥモロー（明後日）」という近未来の恐怖を描いたSF映画があったが、今の日本は「明日の前の日」即ち「今日」の火の粉を払わねばなりません。水が低きに流れるように、なんとしても万有引力を取り戻すことに全力を注ぎましょう。

悪夢のサイクル

大野 ただし

昨年暮れから新春にかけて、安倍新内閣の発足をはやして、株式市場は異常な熱気に包まれています。

新政権の狙いが、金融の一層の緩和と円安誘導にあることが歓迎されています。

正直のところ、私はこの方針に疑問を感じています。

理由はデフレ対策、円高対策というのですが、果してデフレ、円高は存在しているのか、という疑問です。

物価が上がらない原因はデフレにあるのでしょうか。

敢えて答えるなら、マーケットのグローバル化が原因ではないでしょうか。日本とアジア各国の賃金格差を利

用した安い製品が日本の国内マーケットに溢れています。

円高についても同様で、ドル紙幣を刷るたびにドルの市場価値は下落しています。

円安になれば勿論物価は上がるでしょう。それはインフレの結果だということを肝に銘ずべきでしょう。

それは我々消費者にとっては不幸なことです。

今、我が国は失われた十年を通り越して、平成に入っ

て以降の長い経済低迷を経験しています。その原因につ

いて内橋克人さんは『悪夢のサイクル』という著書で、

一、規制緩和

二、累進課税の廃止

三、貿易の自由化

という三つの理由を挙げています。

この結果、格差社会がスタートしました。困ったことに、この政策を米国に見習って進めたのが小泉内閣で、そのメンバーが再登場したのが今回の安倍内閣です。

そういえば、「格差社会の解消」というスローガンも、今の内閣ではいつの間にか消えてしまいました。「弱肉強食」の世界になるのでしょうか。

ここで安倍内閣の目指すいわゆる「アベノミックス」

について考えて見ましょう。重要なテーマは、

一、脱円高（円安メリット）

二、金融緩和（インフレ・ターゲット）

三、脱デフレ（景気敏感・含み資産）

括弧の中は、株屋さんがアベノミックスに対応してどんな株を買ったらいかのコメントと理解してください。皆さんもご承知のように、昨年十一月に野田前首相が衆議院の解散を決定して以降、一月十八日まで大幅な株価上昇が続いています。証券界は円安誘導とデフレ対策としてのインフレ・ターゲットを歓迎しています。

しかし、このアベノミックスについては生産者（供給者側）の大歓迎の意向に対して、中立的な立場にある学者やマスコミからは疑問が呈されています。

例えば政府の公共投資への大盤振舞について、バブル崩壊後に政府は公共投資や減税などで経済再生を何度も図ってきたが、その施策は実を結んでいません。

一方、その間、経営者は財政支出や規制に頼り、新しい市場や技術の開発に挑戦しなくなり、金融機関はリスクをとって企業の成長を助けることをやめ、金融緩和に伴う国際価格の上昇に収益を依存しているのです。つまり長期停滞の主因はこのような経営者や金融機関の萎縮で、これが改められなければ、何をやっても経営者や金融機関を儲けさせる政策に堕してしまつていうことです。

日本のように「インフレ・ターゲット」を政府の政策に組み込んだ国は世界の何処にもありません。今までのターゲットは、どこの国でもインフレ抑制のための目標の設定でした。一月十九日の朝日新聞にはあちこちにそういった意見を見ることができました。

安倍内閣の政策で一番問題なのは成長戦略です。統計的に見てわが国は人口減少段階に入っています。その背景があるのに、設備投資を考えることはアナクロニズムという他ありません。企業（供給者側）はマイナス成長を前提に長期計画を立てるべきなのです。

「供給者側の論理から消費者側の論理へ」というのが今一番大事なことでないでしょうか。それに逆行しているのが現内閣の政策です。安倍首相は「金融はこれ以上緩和する」と言っても、労働者の給与を上げるとは一言も言っていない。それでどうして消費が伸び、庶民の暮らしがよくなるのですか。「格差拡大内閣」というレッテルが自公連立に貼られないことを祈るばかりです。国債の金利上昇を避けるには、参議院選挙でこの内閣に「ノー」という以外に道は開けないのです。

究極の企業統治を創造する

上原 利夫

企業統治とは、コーポレート・ガバナンスの訳語です。一九七〇年代のアメリカ企業の業績悪と不祥事に対処するための会社法制度の通称です。上場会社が対象になりますが、大株主や役員の不正が原因です。

日本でも明治五年施行の国立銀行条例により設立された第一国立銀行で起きた不祥事は、大株主派遣の役員が出身企業に便宜を図り、銀行の営業資金を焦げ付かせました。定款に定める取締役監査委員は有名無実でした。銀行業に欠かせない内部検査を怠っていたので、大蔵省から下野した総監役渋沢栄一が頭取になり、英国人から銀行簿記の知識と技術を学び、外部から大蔵省が検査する体制になりました。明治二十三年に会社法が出来て、株主総会で株主の中から監査役が選ばれる制度に変わりましたが、大蔵省の検査制度は残りました。

この第一国立銀行は第一銀行になり、現在の「みずほ

グループ」に引き継がれています。渋沢栄一はこの銀行で四十年間頭取を勤め、五百に及ぶ株式会社設立に関与しました。日本資本主義の父といわれるゆえんです。その間に築かれた渋沢の信用は絶大でした。みずほに統合された第一勧業、富士、日本興業の三銀行は、いずれも渋沢栄一との関わりがあります。

明治期からの財界の流れを辿ると、現在の三大金融グループ「みずほ」「三菱UFJ」「三井住友」の成り立ちが理解でき、日本の将来が展望できます。これらグループ内の企業には、「論語と算盤」の思想を築いた渋沢栄一、渋沢と意見を異にした岩崎弥太郎の三菱、江戸期からの信用を重んじる三井家・住友家の事業精神が浸み込んでいます。いわば日本の企業文化を代表するものです。

この三グループは、戦後の銀行系列を育てた第一、安田、三井、三菱、住友、三和の六大銀行が主役をつとめ、それを補足したのが大手商社で、商取引を介して銀行の信用供与を支援し、株式の持合いにより結束を固めました。この仕組みは間接金融機能の副次的メリットです。

経済の自由化が世界に広がり、間接金融から直接金融

に移ると、銀行系列の統制力が弱まります。同時に自由に伴う経営責任に疎い企業の倒産が増え、直接金融の主役である証券会社も無茶をしました。パブルは銀行の積極融資を促進させ、証券も銀行も倒産しました。

金融構造の変動によりカオスが齎され、失われた二十年を経て、企業の再編成や統合が始まりました。新しい徴候として、大手商社は組織改造を行って総合商社になり、資源開発、川上、川下の分野で、リスクを取る主体的活動を行うようになっていきます。三メガグループには、六大商社がうまい具合に二社ずつ分散し、バランスよく得意分野でグループ内の結びつきを促進しています。そこには、人間性とか社会性に通じる意識が流れています。これを親和というなら、親和力が株式持ち合いとは異なる基盤を醸しています。

総合商社は他の国になく、日本にだけ存在しています。韓国や中国が真似をしても続かなかつたのは、日本が世界にない独特のものを持っているからです。これを世界の人が納得するように、説明できていません。

企業統治の面でも、日本独特の制度があります。その

一つは監査役です。日米の合弁会社を日本に作ると、日本法により監査役を置き、アメリカ人は、その効能を理解できないまま、形は従いますが、逆に日本人はアメリカの社外取締役を必ずしも必要と思っていません。会社を投資対象と考える社外取締役は株価・配当を重視し、会社を事業体と考える日本人経営者とは趣を異にします。総合商社が外国人の社外取締役に門戸を開放すると、アメリカのMBAが押しかけて来て、日本人は追いやられ、総合商社は消滅しかねません。

従業員主体の日本の大企業では、経営者は社内で育ちます。グローバル時代の敵対的買収を防衛するように、日本企業のための社外取締役の特性を研究開発し、企業を防衛すべきです。日本文化が浸透している三大事業グループを対象に、グループ内外の競争と親和が融合する条件を見出すべきです。これは企業を取り巻く利害関係者をうまく機能させる仕組みであろうと思います。

従業員から執行役員を、ステークホルダーから調整役員を選ぶ二つの役員会が協調する運営機構です。いわば法人における「論語と算盤」による企業統治です。

自動車社会を改めるアクティブ・ウエア

池田 隆

二十年前になるが、長崎から小倉までの旧長崎街道を十日間かけて歩いたことがある。随所で古い時代の面影に接した。その一方、歩道もない国道で肩の脇を疾走するトラックに身を縮め、狭い旧道へ我がもの顔で入ってくる自動車に憤ることも度々だった。

そこで飯塚から直方までは河沿いのサイクリング道路を歩くことにした。のんびり歩き始めると、頭のなかの思考活動が活性化してくる。

この自動車社会はいつまで続くのか。広大な平原を国土にもつアメリカ社会では自動車が必須だろう。しかし起伏の多い日本の狭い風土にはもつと適切な近距離輸送法がありそうだ。多くの人が自動車の麻薬的な便利さに惑わされ、数キロ先へ行くにも車を用いている。

よし！歩きながら自動車に替わる手段を考えてみよう。

安全性や排気ガス、騒音など自動車の問題点がつぎつぎと頭に浮かぶ。つけても自動車は輸送という本来の役割に対しエネルギーとスペースの効率が悪すぎる。

車体は乗る人や運ぶ物資の数倍以上の重量だ。大きな車体を動かすために貴重な燃料の大半を浪費している。

車一台が数平方メートルの面積を道路上に占有する。走り出すと車間距離のためにその数十倍を必要とする。

駐車スペースも問題だ。街の中や家庭の狭い敷地が車で溢れている。日本で用いるにはスペースを食いすぎる。

歩くのならば旧街道のように数メートル幅の道で十分である。幅広い道路などもない。

問題の元凶は車輪という回転運動の機構にある。明治期に鉄道が広まるまで、車輪をもつ乗り物は日本風土に合わず、普及しなかった。

いかなる動物も車輪のような連続回転機構を持っていない。でも移動に不自由はない。人間もマラソン選手は四十キロを二時間で走る。都会では自動車の平均速度も信号待ちや渋滞でこれと同程度である。

それなら身体を動かす骨格筋の支援機能を衣服に持た

せてみては如何だろう。奇抜だが、よいアイディアだ。

誰もがその衣服を着てマラソン選手のように走れたら、近距離移動に自動車を使わないだろう。

発熱したり脱臭したり、いろいろな機能を備えた繊維製品が來回っている。外からの信号を受けて伸縮する繊維も考えれば出来るだろう。指令信号には骨格筋を司る脳からの神経信号を使えばよい。

くわえて衣服にマラソン選手の理想的な手足の動かし方を記憶させ、それに合うように衣服を制御すれば走行中のエネルギー効率も改善するはずだ。

ただ筋肉のように常温で化学エネルギーを伸縮の動力に変換するのは難しすぎる。最近売り出された電動アシスト自転車のように動力源は高性能の電池になるだろう。改めてこの衣服を「アクティブ・ウェア」と名付けよう。動力の主体は人力、電池は補助、を原則として。

空想に耽りながら歩いていると、突然、「こんにちは！」と向うから来た小学生たちの大きな声。彼らが将来、私が描いているこの夢をきっと実現してくれる。

二十一世紀も半ばになれば自動車は都市間の長距離移

動や多量の物資運搬にのみ用いられ、日常生活では皆がアクティブ・ウェアを着て出かける社会になるだろう。

爾来、社会交通に関する私なりの未来像が固まった。私はそれに必要な要素・基盤技術に注目してきた。

腿から脛脛にかけての骨格筋を助けるジョギング用タイツがスポーツマンにいま人気である。

カーボン・ナノチューブという人工筋肉の素材や種々のアクチュエーター、脳からの微弱な電気信号を感知して人工手足を動かす技術も進歩してきた。電池の高性能化も進んだ。確実にその実現に向けて近づいている。

あの時元気な声を掛けてくれた小学生の世代が働き盛りになり、頑張っているのだろう。アクティブ・ウェア社会を私自身が見届けるのは無理だろうが楽しみだ。

この二十年間を「失われた二十年」と言い、経済再生を声高らかに叫んでいる年配者も多いが、彼らはバブル期の旨味が忘れがたく、その再現を強く夢見ているのだ。未来をつくる底辺の新技術は着実に進歩している。

「日本の未来に、心配ご無用！」

凜として立つ

富岡 喜久雄

昨年末の選挙で、日本国民は「生活が第一」から「成長が第一」を選択したようだ。日本経済はここ二十年でフレ続きで停滞し、中国の台頭と円高もあって、世界第二の経済大国の地位を中国に明け渡した。

新政権は経済が第一、国土強靱化を旗印に公共投資復活を図り、嘗ての経済諮問会議も復活し、骨太の方針なる経済指針も再登場するらしい。巷では日本再生とか、再起動とかが謳われ、平成維新の掛け声もある。経済学は心理学でもあろうかとの説を裏付けるように、株価は騰がり、円安は進んだ。これで心理的に先行き楽観論が先行して、民間投資が回復してくれば、一銭も遣わない口先介入だけで経済成長が達成されるから、こんな安上がりな手段はない。「ペンは通貨よりも強し」が現実となるならば、我がペンクラブの活動の意義も挙がろうというものである。果たして如何に。相場用語に「噂で

買い」「事実で売れ」の格言があると聞く。財源問題から国債発行、債務残高への危惧へと進まないかと気になる。これからの実体経済の動きを注視せねばなるまい。そこから日本再起動の方向が見えてこよう。どうも旧ヴァージョンが復活してくるような感じがしないでもない。しかし単なる再起動では意味がない。

そこで昭和史が気になり、半藤一利の語る「昭和史」から虚構の国「満州国」や「それでも戦争を選んだ」や、はては兎玉誉士夫著作集、「大国の興亡」その他、半読や未読を含め蔵書を拾い読みしてみた。盧溝橋の砲声一発が誕生の契機だったので、わが身に照らして日本を見直してみたからである。

でも敗戦の焼け跡と食糧不足、さらに現在の飽食の時代までの軌跡には、トラウマとなる事柄が多すぎて思いが乱れる。追いつけ追い越せと、経済成長一本やりだった時代に懐かしさは覚えるが、日本の現状、地球環境を考慮すれば、もはやこれ以上の量的成長の意味があるかと疑問が湧く。時代は変わり日本は変わったのである。

地勢的には主として四つの島で構成される国土を持ち、その七割近くが森林山地であることに変わりはない。だが日本国を構成する人々、社会、取り巻く環境は変わった。高度に発展して飢えの恐れを克服した社会は飽食気味で、男子は草食化し、若者は晩婚化。それによる少子化と続き、一億二千万の国民の人口構成は逆三角形に近い高齢者社会となった。そして近未来の人口減少は確実に予測されている。

日本は従来と異なつた価値観を持つた人々の国になつてきているのだ。さらに近隣諸国はひたひたと経済、軍事両面から迫つてきている。こうした状況に合つた新しい国のかたちを考えねばなるまい。

徒に、税収が足りないからとりやすい消費税で補填しようとか、津波が来たから長大防波堤を作り、国土強化を図ろう、軍事力も高めようとする考え方は、かつての道にも似て、国民を貧窮に追い込むかもしれない。

では、どうするか。成長の限界を理解し、身の丈にあつた国造りをするべきだと思う。防衛力整備にしても、単量的対抗力でない、即ち戦わずして相手に畏怖の念を

抱かせる効率的且つ効果的な専守防衛戦力を保持すべきだろう。それには隙を見せず、一旦ことを起こせば相手も致命的な損傷を受けるであらうと思わせる武器と「凜とした捨て身の気迫」を漂わせねばならない。

経済は、生産面でハードにのみ頼らない高質且つ高付加価値でソフトな省資源産業を構築し、消費面では浪費を避け、無駄を省いた清廉な生活システムを作り上げるべきである。だからと言って質実剛健とか清貧で表現されるようなレトロとは違う、簡素だが高質で美しい社会を目指すべきと思う。知を尊び、技術を磨き、量を誇らず、質を高め、よつて世界から羨望と尊敬を克ちうるような国でありたい。そして大日本でもなく、小日本でもない普通の国として、きらりとした存在を示す。それには国土のみならず将来を担う若者の強靱化が必要で、教育の再可動こそが必須である。

我々も自尊自律の精神で凜として立とうではないか。いざとなれば、「蕨野」なる未開地に自立の民となる覚悟をもつて。

さてさて、日本は困ったものじゃ

陸沈老人 門屋信行

これからの話は、老人の独り言とお聞き下され。

日本の停滞が始まって二十年が経った。バブル崩壊直後は、いずれは元の経済体制が復活できると期待して、ひたすら耐え忍んで復活の日々を待ち望んでおった。しかし待っていても、元の日本には戻らなかつた。経済は益々縮小し、政治は自民党政権が自己崩壊し、民主党との政権交代があつても一向に改革が進まず、若い民主党も自滅していった。アーという失望感だけが残つた。

その原因はどこにあつたのじゃろうか？ 儂はその原因の一つは日本人のDNAに染みついた農耕民族の特殊性にあるように思う。農業、漁業、林業など自然とともに営みを図る職業は、専ら自然に大きく依存する。またこれらの仕事は集団性が保たれなければ成り立たない。村落や集落などの互助組織が無ければ機能しない。田植え・稲刈り等の農作業は短期・集中的に行わなければ達

成できない。更にこれらの集団は天候などの自然の変化に対しては鋭く反応するが、社会的変化に対する反応は鈍い。何故なら農耕経済は政治形態や社会制度とは関連性が薄いからである。例えば百姓は、時代が鎌倉幕府であるのが室町幕府であるのが徳川幕府であるのが、職種を変えなくても継続出来た。漁業、林業も然り。彼らにとっては、自然との共存と集団の維持こそが生存の基盤だからである。したがって社会経済体制への変革や順応の必要性は無かつたのだ。ここで農耕民族の基本的気質を整理すると、自然（天候）順応主義、集団主義、変革への保守主義とまとめて置こう。

しかるに現在の日本の状況はどうであろうか？

かつて日本の主流を占めていた第一次産業の労働人口は一九五〇年には約五十%であつた。それが二〇〇五年には五%にまで減つてしまつた。産業構造が大幅に変化した。欧米型産業社会にドツブリと浸かつた「近代産業国家」になつていたのじゃ。しかし気分は農耕民族の基本的気質が抜けきらなかつた。その結果、世界の変革、経済のグローバル化、国際政治の広域化に対応できず、相も変

わらず従来の農耕民族的生き方に拠り所を求めてきたのじゃ。それが日本人の気質に合った楽な道だからじゃ。近代産業国家は変革に対応していかなければならないことは明白なのじゃ。

では日本が何故この激変に対応出来ていないのだろうか？ それは法律等（法律・政令・省令・条例など）の硬直性に起因している、と僕は思っているのじゃ。これらの規則はすべて官僚（役人）任せで制定されている。彼らは法令などの作成課程のなかに、自分たちの利益（例えば天下り先）が達成できるような仕組みを巧みに織り込んでいる。その法令等を変えようと思っても、これまた官僚（役人）の力を借りなければならぬ。この仕組みを変えない限り日本の再生は無理じゃ、というのが僕の考えじゃ。

さて、僕も日本のために策を練ってみた。しばし老人の戯言と思ってお聞き下され。

むかし観ていたアメリカのTVドラマ「スパイ大作戦」で、「本部」からの指令はテープ録音されており、指令の伝達が終わると「このテープは自動的に消滅する」と

いう自動消滅機能がセットされていたのを思い出したのじゃ。そうだ！この農耕民族の変革対応不適應民族には自動変革装置をセットする必要がある、と思いついたのじゃ。官僚や政治家などが制定した法令等が時勢に合わなくなつたときには「自動的に廃止できる制度」を導入して置くべきだ。これを僕は「時限装置付き法令」と呼んでいる。すべての法令に有効期限を入れて置くのじゃ。そうすれば官僚の介入なしに廃止できる。今の日本は言わば官僚独裁国家であり、彼らの判断なしには法律も変えられない。官僚の強さはこの法律作威力に起因していることに皆が気付かぬやいかん。近代社会はルールがすべてじゃ。そのルール作りは官僚が握っている。これを解決する方策として官僚から法令等の改変権限を取り上げれば、その強大な権限を「自動的に」取り上げられるのじゃ。すべての法令に「時限装置」を付けるのじゃ。これが日本再生計画じゃ。

注…「陸沈」は中国の言葉で日本語の「横町のご隠居」という意味。

人こそ命

鳥海 博

当節のホット・イッシュューは「デフレ脱却」と「物価上昇目標」です。アベノミクスの目指すのも将にこれです。しかしながら、デフレの根本原因を調べもせず、ただこれを直そうという、対症療法に過ぎないように思えてなりません。また、モノの値段が上がって、何がいいんでしょうか？ 誰が喜ぶんでしょうか？ デフレとは、作ったものが売れない、或いは安い値段でなければ売れない、つまり、需要と供給のバランスを欠いている状態（供給過多・需要不足）です。需要に注目するならば、需要者（消費者）の数と質が変容したことにデフレの根本原因があるのです。言う所の人口問題に帰着します。

ご存知のように、日本は一億人以上という人口大国として、人類史上初めての長寿国になりました。これはこれで大変に喜ばしきことですが、どういう因果か、今までのようには子供が産まれない国になってしまいました。

いわゆる少子高齢化社会の到来です。これでは政府が鐘と太鼓を幾ら叩いても、需要（消費）は増えません。日本国全体のGDPに着目するならば、経済が成長しない、いやそれどころか、経済が縮小していつてる訳です。これを以てデフレというなら、その対策は明らかです。人口増を図ることに尽きます。若者にドンドン結婚してもらうこと、そして子供を最低二人は産んでもらうことです。「子供がいてはメシが食えない」、「子供は金が掛かる（ウソかホントか、子供を成人させるのに一億円掛かると言われています）」などと声が増えて来ますが、子育てを経済問題に落とさないように、子供を教育する必要があります。社会全体にそういう風潮があるならば、これは直さないといけません。迂遠な策のようですが、これをデフレ脱却の基本政策に置くべきです。「移民を増やす」とか「国際的養子縁組がし易い制度を設ける」という対外政策も考えられますが、それはそれでまた別の大きな問題を引き起こしますから、「明後日の課題」です。

人口問題と隣り合わせに、もう一つ人間に絡む重要問題があります。それは「人材の育成」です。日本人が色々

な面での国際競争に勝てるように、頭の中心に確りとしたインフラを作らないといけません。人材育成の一環として「読み書きソロバン」（小学生の国語と算数）は最重要科目ですが、同時に外国語（英語）も必須ですね。その逆の「ガイジンさんに日本語を学んで貰う」、これもまた外せません。国際化は今後益々進展します。国の安全と繁栄は言語の双方向取得にあります。

日本は昔も今も、「少資源国」です。頭を使って世界の他の国にある資源を活用・加工し、いい製品を作り出して、貿易で生きているのが明治以降の国策です。言う所の「貿易立国」です。ここ数十年はこれに加えて、ノウハウを使って对外投资で国富を増やすという「投資立国」も国策になりました。日本は経常収支黒字国です。ただこのところ貿易収支が赤字ですが、これを大きな所得収支の黒字で支えている状態（直近で言えば、貿易赤字が七兆円で、所得収支の黒字が十四兆円、経常収支の黒字は四兆円弱）です。

日本人はこのところ自嘲気味に「失われた十年、十五年」と称していますが、何も失ってはいません。失って

いると見られるのは、GDPが減っている事を指すようですが、GDPの大きさだけで国の消長を論ずるべきではありません。人口が減れば、或いは高齢化すれば、自ずと消費が減り、連れて投資も減り、GDPは小さくなって当たり前です。この十年、十五年、日本人は不幸せになったのでしょうか？ いや、そんなことはないと思います。寒い冬でも凍死者が出る訳じゃなし、食べ物が無くて餓死する人がいる訳じゃなし、街に乞食がウロウロしても居ません。物を忘れても戻って来る社会です。治安はいいし、国民は礼儀正しいし、社会福祉は充実しているし、ある意味では、今の日本は人類史上初めて見るユートピアかも知れません。

国民の豊かさをGDPで計るのはいい加減にして、別の概念——ブータン国の真似をする訳じゃありませんが——GNW (Gross National Welfare・国民総福祉量) とかGNH (Gross National Happiness・国民総幸福量) で計るべきです。物質面での豊かさに加えて、精神面での豊かさも、国の評価・比較・位置づけに使うべきです。将に「全ての価値の価値転換」、パラダイムの変換です。

何でも書こう会

緊張・充実感・そして楽しい交流

企業OBベンクラブが設立されたのが一九八九年、最初の頃は会員が書いた文章をベテラン新聞記者だった会員が指導するという文章教室的な活動でしたが、一九九五年からは、思ったことを八百字の文章にまとめ、批評し合う「何でも書こう会」になって続けています。

出席者が増えたため、一昨年からは勉強会の回数を増やし、毎月原則二回、オリンピックセンターの会議室に作品を持って集まり、午後の四時間、作品をめぐって意見や感想を述べ合い、活発な議論が行われています。

昨年一年間で合宿研修を含めて二十三回の勉強会が開催され、二五九篇の作品が発表されました。作品の多くは企業OBベンクラブのホームページ「800字文学館」に掲載されています。

テーマが多岐にわたっているのが特色です。

自分史、内外の旅行、企業戦士だったころのエピソード、

ド、隠れた人物の発掘紹介、宗教、歴史、科学技術、スポーツ、経済、社会、創作など何でもあります。

昨年は原発問題についての作品が多く、活発な議論が行われました。技術的、政治経済的な観点から勉強した上での議論なので、妥協のない意見や主張が飛び交い、クラブの他の勉強会にも持ち込まれるほどヒートアップしました。もっと広く世に発信したい内容でした。

大庭定男さんの三十八回続いた自分史「八十九年の生涯より」は、商社員やコンサルタントとして駐在したロンドンの生活、その間の研究成果「大日本帝国に背を向けた日本人たち」や学徒動員で出征したジャワ島での軍隊生活など貴重な記録です。米寿を過ぎた大庭さんの存在は、会員の励みになっています。

文章を作り、発表し、他人の意見や感想を聞く。この過程から適度な緊張と充実感が得られ、さらには会員との交流も大きな楽しみになっています。

(プロマネ 大月、大越、志村)

特集・くされ縁



不思議な縁

岩崎 洋一郎

一九五九年九月、ニューヨーク（NY）の空港に降り立った。会社の代表として、技術提携相手の米社が主催する繊維加工に関する国際会議に出席するためである。

最終目的地は南部のアラバマ州であるが、当時は日本から一挙に飛ぶのは難しく、国際空港羽田からまずパンナム機に乗り、ハワイで給油してロスに赴いた。そこで国内線TWAに乗り換えてNYに飛んだ。その頃はアメリカでは国際線と国内線は峻別されていたので、乗り換えが必須であった。最終目的地アラバマ州の都市には、東海岸から南下するしかなかった。また、十一時間もあつた時差を解消するためにも、NYで一泊するのが常道だった。

NY空港は超近代的デザインのTWAターミナルに着いたのだが、降り立った瞬間から、耳に入る音声、肌で感ずる乾燥気味の空気、加えて鼻から入ってくる匂いは

全て、なんとも懐かしいものであつた。これぞ、デジャ・ヴュそのもの。九歳で離れて、二十一年ぶりに帰ってきたい出のNY。頭脳というよりも全身の感覚細胞が、一斉に昔の記憶を体の奥底から呼び起こされたような感じであつた。

その晩は、提携会社の近くのミッドタウンのホテルに泊まり、翌日の午前はその会社を訪ねて挨拶し、午後は日本商社Mに挨拶に赴くことになった。この商社のオフィスはマンハッタン区南部のウォール街に所在しており、私は躊躇わずに地下鉄で赴いた。

お会いした商社の方は腰を抜かさんばかりに驚愕した。その方は「この街に住んでいる私だって、地下鉄によう乗らないのに、なんで乗れたのですか？」と。説明のしようがない。複雑に入り組み、急行と鈍行とがあるこの大都会の地下鉄網に戸惑うことなく、すんなりと目的地に行けた。迷う心配などは、全く念頭になく目的地に直行した。因みに、嘗て私が小学校の低学年生時代に住んでいたのはマンハッタンからは電車で三十分かかる郊外のクイーンズ区で、マンハッタンには母と一緒に買い物

のために月に一回来るかどうかの頻度であった。それでも、なんとなく馴染みがあり、迷うことはなかった。全線単一料金ということも何となく覚えていたし、路線も大凡は頭の中にくり広がっていた。目的地への道順は、何ものかに導かれるような安心感があった。何故かと聞かれても、理屈では到底説明できるものではない。以来、涉外という仕事の性格上、米国には百回ぐらいは出張した。

しかし、NYとの不思議な縁の決定打は、息子の誕生である。東京で結婚して十年以上もの長い期間、子供に恵まれなかった。妻も私も諦めきれず、慶応病院の専門医に見ていただいたが、精子カウントは多少低めであっても受胎は可能な範囲と診断された。色々と指導を受けたが、成果が得られなかった。夫婦で涙したこともあった。一九七二年に、私の担当の仕事が変わり、NYに駐在することになった。妻も当然一緒であった。すると、摩訶不思議なことに、特別なことは何もしなかったのに、すぐに受胎した。なんとも説明がつかないが、この事実にも妻も、同行していた私の母も、そしてもちろん私も狂

喜した。生まれてきてくれたのは男の子で、十ポンド(四キロ半)もあるビッグベビーであった。NYよ、ありがとう。自由の女神の恩寵か知らないが、とにかく、結婚十三年目で、NY駐在の初年度で、子宝を授かったことに間違いはない。これ以上の摩訶不思議な縁はないと言いつける。アイ・ラヴ・ニューヨーク!



百年の響き

二 春

イギリスのロックバンド「クイーン」のヒット曲『ボヘミアン・ラプソディー』は、十年ほど前の国民投票で「二十世紀の英国で最も心に残る歌」に選ばれた。あのイマジンやイエスタデイを制し、この百年間のベストソングになったのだ。

ビートルズ解散後は、奇抜さだけのビジュアル系や耳ざわりな電子音楽のバンドが多くて、ロックバンドへの興味は失せた。だが友人によれば、クイーンは中性的外観と技巧派の両方の良さを併せ持ち、しかもプロモーションビデオの元祖だという。そこで試みに聴いてみた。

まずは、「Is this the real life? Is this just fantasy?」(これは現実か、それともただの幻か)とアカペラが暗示し、次いでバラードで「*Mama, just killed a man*」と衝撃的な告白。中ほどはガラリと変わってオペラ調、ガリレオ

やフィガロまで登場する。続いてハードロック「*So you think you can stone me and spit in my eye. So you think you can love me and leave me to die*」(僕に石を投げ、顔に唾を吐こうと思ってるんだな。僕を見殺しにして、それでも僕を愛していると言うつもりか)。最後はまたバラードに戻って「*Nothing really matters to me. Anyway the wind blows*」(何もたいしたことじゃない。どっちみち風は吹くのさ)。奇想天外でドラマチックな展開だ。

曲調が複雑なだけではない。謎めいた歌詞は人間の葛藤や、抑圧された感情の解放を訴えているようにも受け取れるが、作者フレディ・マーキュリー自身のボヘミアンぶりを映しているとも思える。暗くてエキセントリックだが、多様な文化と歴史を背景とし、独創的で自由なアイデアに溢れ、ミステリアスかつセクシーだ。

たった四人が出す声や音が、多重録音を何度も繰り返すことよって数百人の声となり、複雑にミックスされた壮大な楽曲に仕立てあげられた。だからステージでの生演奏が不可能な部分もある。そこで彼らが思いついたのがビデオ映像だ。音だけでなく、視覚的な効果をも生

み出した。TVで最初にこの映像が流れたときには、街中の話題をさらったそうだ。

バンド名はクイーンでも、メンバーは男ばかり四人。しかも超インテリぞろいだ。リードギターは赤外線天文学を専攻した中学教師、ベースギターはロンドン大学の電子工学を首席で卒業した名誉学位の持ち主、ドラムスは菌学と生物学を専攻。そしてこの曲を作ったヴォーカルとピアノ担当のフレディは、美術大学でデザインとイラストを学んだ。フレディが生まれたのは当時の英国領ザンジバル（現タンザニア）。家庭はペルシャ系のゾロアスター教徒だ。インドの英国式寄宿学校で少年期を過ごし、後にイギリスに移住。よそ者扱いや差別は日常茶飯事だっただろう。内気でもの静かな少年は、斬新で独特な美学を持つ反骨精神たっぷりの若者に成長した。四十五歳にしてエイズで没するまで、四オクターヴという桁外れな声域と、タイト姿や露出など「脱皮と変態の繰り返し」が、世間で取りざたされた。

この特異な曲が生まれたのは一九七五年、英国がBlack Britain in 70s（イギリス病）と呼ばれる長い不況にあえ

いでいた頃だ。オイルショック、灯油の供給制、電力の供給制限、長期インフレ、ストライキとデモの日々。週三日は停電し、失業率がはねあがり、爆弾テロや暴動が相次ぐ。音楽も妙に明るいだけの単純で退屈で中身のないうものばかり。無気力と無関心が人々を支配し、さまざま価値が崩壊した。出口のない暗闇の時代である。

そこに冷たい水を浴びせて、目を覚まさせたのがこの曲だ。これで英国が立ち直ったとまでは言わないが、国民に自信と誇りを取り戻させ、エネルギーを充填したことは間違いないさそうだ。

音楽と人とは一心同体。悲喜こもごもどんな場面とも繋がり、歓喜や悲哀、追憶や慰めや勇気を紡ぎ出す。

それにしても、国民性の違いだろうか。幕末には「ええじゃないか」で踊り狂い、終戦直後は「東京ブギウギ」でウキウキ、高度成長期には「上を向いて歩」いた日本がちよっとカッコワルク見える。

すると、さつきから泡盛で目をトロンとさせた友が、「なあに、ハハハには『千年の響き』があるから」

切れた鎖

志村 良知

「俺、マンシヨンに変わろうと思うが、どうかなあ」

駅を隔てた反対側の丘の上に住むKから、聞き慣れた口調の電話が掛ってきたのは去年の春先だった。

お嬢さん二人の結婚が決まり、夫婦だけになるのを機にマンシヨン住まいを考えているとの話だった。既にマンシヨン住まいの私はその優位性を大いに薦め、具体化したら会って話そうということで電話を切った。

Kとは新入社員研修で席が隣り合ったのが最初で、そこで誕生日が同じであることを知った。門司出身で、酒を飲むと「九州」を連呼する彼に、当初は苦手意識を持った。

新入社員研修が終わり、化成品製造の沼津工場で一年間実習をする化学専攻十人余りの中に、精密機械を専攻したKがいた。これは何かの間違いで、俺はすぐしかる

べき場所に移る、と彼は言い続けたが、結局設備設計や導入などでそこに二十年居座った。

一九八七年、私が試験管レベルからの開発に従事していた熱転写リボンに本格投資がされ、新規事業として立ち上げるプロジェクト・チームが組まれた。私は、販売促進担当としてチーム中枢に配属された。そこに計数感覺鋭い経営参謀に変身したKが待っていた。

プロジェクトはスタートしていきなり本社事務機器部門の方針変更で自社需要が消え、もう一つの柱と頼んだ米国郵便向けも消えて、肝心の売上計画が総崩れとなった。顧客開拓にKと私は国内外を東奔西走した。

二年後、人事異動で私は事業本部スタッフとなつて熱転写リボンを離れた。残ったKはそれから三年かけて売上高で当初計画をキヤッチアップ、更に固定費を回収するには事業規模の拡大が必須で、そのため追加投資をする、という超強気案を事業本部に持ち込んだ。

私は、この投資計画策定の事務局としてKと組むことになった。事業本部の総力を挙げた計画は本社取締役会

議で決済され、一年後に新工場が稼働した。

それを追って、フランスのアルザスにある子会社の一部に二次加工設備を導入、現地セールスも雇って欧州市場への販売の拠点を拡大整備することになった。私は熱転写リボンに戻り、そこへの赴任を命じられた。

Kは出張ベースでアルザスに先乗りし、設備導入、顧客挨拶回りなどをやって私を迎えてくれた。

痛風持ちの彼は外食せず、会社借上げのアパートで自炊していた。赴任直後、家族を呼び寄せる前の私もよく料理をご馳走になった。得意は餃子で、極意はとにかく材料を細かく刻むこと、と左手に包丁を持って休日には他の駐在員の家族分まで作って配っていた。

「黒字だ。九月期の本社決算で、熱転写リボンが連結黒字になった―」

一九九七年秋、パリでの展示会会場に日本のKからの電話だった。黒字になるのは事前に分かっていたが、本社発表で黒字となると格別だった。「今夜はパリでも乾杯してくれ。日本が奢らんといいかなあ」。十年間赤字

事業で矢面に立ち続けた彼の声は心なしか震えていた。

Kはその後、私と入れ違うようにアルザスに赴任、七年後、私と同じく新横浜に戻った。赴任中に彼の父が亡くなり、私は会社関係の葬儀委員を務めた。

お互いの定年退職後は、役所などの諸手続きの窓口が全て同じで、頻繁に情報交換した。散歩のコースや日々出入りする店もかなり重なっていた。

「Kの奥さんから喪中はがきが来たが、何だ？ あれは」
共通の友人から来た突然の電話は、近所に住む私を怠慢だと責めているようだった。年賀状のやりとりがなかった私は仰天し、慌ててK宅を訪問した。ご家族によると、Kはあの電話から半年後の十月初めに亡くなり、五日後に納骨ということであった。

十一月末、横浜郊外の墓苑での送りの日は雨だった。

雨に踏まふ銀杏落葉や友送り

「掌編小説勉強会」この一年

二〇一二年は私たちにとって実り多い年でした。

まず、この勉強会の成果を作品集に編んで上梓したい、という積年の念願が叶いました。

氷河期にも譬えられる出版不況の中で紆余曲折もありましたが、当クラブ編著の「卒サラびとの文芸館」に七編の掌編小説が収録され、この一月に青蛙房から発行、発売されました。是非、ご購入いただき、ご親戚やお友達にもPRしてくださいませよう、お願いいたします。

この本は、好評の「卒サラ川柳シリーズ」の第三弾として編集され、川柳、小話（エッセイ）に卒サラノベル（掌編小説）を新たに加えて、「文芸館」に進展しました。

出来上がった本を見ると、企業OBペンクラブで育てられた私たちに相応しい出版デビューだと思われませう。ご関係の方々のお力添えに改めて感謝いたします。

この勉強会では、「掌編」を原稿用紙換算で十から三十枚の短い小説と定めていますが、その作品を膨らませて短編小説にしたり、一部を切り出してショート

ショートを創ったりすることも可能です。

昨年は、合評会に載せた作品をベースにした短編小説やショートショートが、文学賞に入選したり、文芸誌や機関誌に掲載されるなど、コンテストへの応募活動でもかなりの成果を挙げることができました。

今年は、これらの対外活動をさらにパワーアップしたいと考えています。

メンバーは女性二名を含む十名で変わらず。昨年は隔月六回の合評会を開き、四十一編の作品を仕上げました。勉強会発足以来六年間の累計は二百五十編に上ります。

創作活動も順調ですが、先のことを思うと、もっと新しい人に加わってもらって新風を吹き込み、活性化を図ることが喫緊の課題と考えます。

今年は勉強会を活性化させるための方策を打ち出していく積りですので、ご支援のほどよろしく申し上げます。

（プロマネ 濱田、西川、廣澤）

自由テーマ



折り紙ボランティア一年生

松谷 隆

昨年四月、メンバー八名の「折り紙ボランティアサークル・にこにこ会」を結成、その代表に立候補した形で活動を始めた。他のメンバーは全員女性。そのうちの一人は別のボランティアグループの共同代表なので、彼女に副代表兼会計担当を依頼し、快諾を得た。

最初に知ったのは、ボランティア活動支援のため、助成金が交付されるということであった。当初、近所の地域ケアプラザがベテラン講師により実施していた、同系列の地域活動ホームでの、高齢者および障害者を対象とする「出張折り紙サロン」への参加・支援が目的だった。しかし、自主事業でない限り、助成金が出ないとわかり、このサロンをケアプラザから継承することにした。これで地元の社会福祉協議会から「一般および障害者を対象として活動する団体」との認定を受け、平成二十四年度の助成金申請の資格を得た。

初申請の団体への助成金は「最大三万円」である。ただし、自己負担額は予算総額の二十パーセントが条件であり、またボランティアグループの年会費は年千円が相場というのも初めて知った。

ではと、会費八千円と助成金三万円、合計三万八千円のビジネスプランで申請書を作成、三月初めに提出した。例年四月初めには助成金の決定額が通知されると聞いていたのに、無しの礫。担当者に打診しても「申請額の六十暫位かな」との答え。結局、助成金は一万五千円に決定との通知があったのが、四月十五日。後日談で、助成総額が予想以上に減額されたため、初申請団体には六千円しか交付できない状況だったとのこと。福祉協議会の運営費を見直して、一万五千円に増額の原資をねん出できたと聞いた。ボランティア活動維持のため、協議会もなかなか味なことをすると感心した。

さて、本格的な活動をするためには、会員全員の折り紙技術の向上が不可欠である。そのため、ケアプラザが主催する、月二回の折り紙サロンに積極的に参加するこ

と、さらにサロン終了後、一時間半打ち合わせを兼ねて、復習または各自が得意とする折り紙を紹介、指導することになっている。これにより、会員の技術は飛躍的に向上した。個人的には、折り紙関係の図書は比較的高価なので、図書館を活用するようになった。貸出期間が二週間なので、足しげく通っている。この成果も大きい。

さて、出張サロンは従来通りの毎月第四木曜日に開催継続となった。最初の活動日、四月二十六日。まず、がつくりきたのは、期待していたベテラン講師が参加しなかったことである。彼女はケアプラザに対してのボランティアだったと考えることにして、未練を断ち切った。幸い、障害者六名、高齢者八名が参加してくれて盛会になった。前者とは奴さん、鶴、風船、こまなど比較的に簡単なもの、後者とは季節の花、チューリップを折った。それぞれ、満足してくれたようである。この日ケアプラザの前担当者二名も参加した。我々新米がきちんとサロンをやれるかどうかのチェックが目的だったようだ。翌日、「心配なので見に行った。きちんとしてもらえて安

心した」と言われ、こちらも一安心。

この活動がもつとも盛り上がったのは十二月のクリスマスお楽しみ会である。年末たすけあい募金からの助成があり、総勢二十八名の盛会。参加者にはサンタクロースを折り、好きな顔を書いてもらい、クリスマスツリーに飾ることにした。お土産に、羽根がつながった鶴、妹背山、小さな飾り傘と和紙で四角形の箱を作った。

障害者の一人は絵がうまく、十数種類の顔を書いてくれた。彼は一躍ヒーローになり、満足気な顔をしていた。他の障害者たちも、会員に打ち解けてくれるようになった。「家に帰ってから、母と一緒に折ります」という人もいる。四月からの努力が実りつつあると実感できたのは望外の喜びである。

地域活動ホームの施設長も我々の活動を評価し、喜んでくれている。というのも、我々が数少ない交流相手になっていくからである。折り紙ができたときの障害者の大喜びする様子をずっと見られるよう努力していこう。

パムツカレで腰湯に浸る

濱田

優ゆたか

家族に伴われて新宿駅に来たときのゴローさんは確かに病人だった。だが、成田エクスプレスが動き出すと、まるでスイッチが入ったように元気が出はじめる。

五年前の十二月、昔の会社仲間男女四人でトルコを巡る旅をしたことである。ゴローさんは一番の年上なのにこの中では威厳のカケラもなく、一回りも年下の女性二人に全く頭が上がらない。

成田に着いたとき、ゴローさんはいつもの彼に戻っていた。自分でスーツケースを運び、美人の添乗員さんにくすぐり寄る。荷物持ちを覚悟していたばかりは大歓迎だが、女性陣は顔をしかめた。

トルコに到着した日はイスタンブールに泊まり、翌朝から世界遺産を中心に人気の観光スポットをバスで巡る。最初のトロイの遺跡では生憎雨に降られたが、次の日は晴れ渡り、ターコイズブルー(*)の空の下でエフェソ

スの古代都市遺跡を心ゆくまで堪能した。世界遺産に未登録ながら、その規模の大きさ、遺跡の多さ、美しさ、そして整備・保存の良さは驚くばかり。知的好奇心の旺盛なゴローさんは目を輝かせて長い時間歩き回った。

見学三日目、この旅のハイライトの一つ、パムツカレを訪れる。以前、観光ポスターで、幾重にも積み重なった白い石灰棚の上を淡青色の温泉が伝い流れる写真を見て、ぼくは憧れた。彼の地の人はこの幻想的な自然の造形を見上げて、パムツカレ(綿の城)と称したと聞く。

ところが、現状は景観保護のため立入りが制限され、湯量も少なく、思い描いていたイメージと違っていた。それでも一部の石灰棚の上を歩き、足湯を使ってわずかに温泉気分を味わったが、期待外れの感は免れない。

ならばここは印象が薄いか、というところではない。ゴローさんがとんだハプニングをやらかして、強烈な思い出を作ってくれたのだ。彼は足湯場で足を滑らせ、尻餅をついてしまった。幸い怪我はなかったものの、その後が大変。トルコの気温は東京と大差ない。十二月に腰から下を濡らしては冷たくて堪らない。「腰湯に浸った」

と強がりという彼の唇は紫色に変わり、震えていた。

この後始末は女性に頼めない。彼のスーツケースを出してもらい、料金所の後ろの建屋を借りて上着も下着もそっくり着替えさせた。

この後、バスは次の宿泊地コンヤまで数時間のロングドライブ。ゴローさんはその間しっかり眠り、風邪も引かず元気を取り戻してくれてホッとした。彼はバスで移動中に睡眠を取って体力を保つ術まづを会得していたのだ。

旅の後半は、奇岩群で有名なカッパドキアを見て、飛行機でイスタンブールに戻り、歴史地域の数々の世界遺産を見物。オプシヨンのクルーズにも参加した。

旅の間、ゴローさんはバムツカレの一件だけでなく、服を忘れたり、はしゃぎ過ぎたりして仲間を心配させたが、病氣のことで世話を掛けることはなく、彼が病人だということをはくらは忘れるくらいだった。

しかし実は、ゴローさんはたちの悪いがんに取りつかれ、悪戦苦闘していた。試行錯誤を重ねて、彼のがんに効く薬を見つけたものの、この薬は強い副作用を伴うので一度に長くは続けられない。

かねてより地中海諸国巡りを続けている彼は、発症した後もトルコだけはどうしても行きたいと願い、治療の間を縫って用意をした。この旅の前に、奥さんと四国を巡るバスツアーに出掛けたのは、生まれ故郷を訪ねるかたわ傍ら、移動がバスのトルコ旅行に備えるためである。

それで自信を得た彼は、計画的に抗がん剤の治療を中断し、体調を整えてこの旅を決行したのだ。はじめは彼の体がつのか不安だったほくらは、旅の後半に入り、何とか完走できそうだと確信を持ったときは喜んだ。

ただ「最後の旅路」の後を考えると気持ちが悪くなる。しかしまた、尻上がりに元気を増す彼を見て新たな期待が生まれた。最後の最後もありではないか。彼もその気になった。トルコの次はクロアチアに行かないとね。帰国したら、辛くてもまた治療をして、来年気候のいい時期に……。

しかし、私の顔も三度。今度は、いつもの治療をはじめても、辛い副作用は律儀に発するのにな、一向にがんは退散せず、一年後にゴローさんはあの世に旅立った。

* ターコイズブルー トルコ石のような明るい青緑色

小諸吟行

猪股 重子

先日偶然に「俳縁」という言葉を見つけました。病気の「肺炎」ではありませんよ。俳句の取り持つ縁、まさに今の私にピッタリの言葉です。

今回もペン俳句への思いを書きます。

紅葉真っ盛りの信濃路。懐古園への吟行。体調不良の人や天候の心配など、幹事の中村雅道さんには大変なお骨折りを頂いた吟行でした。

当日は天候にも恵まれ、美しいたすまいの懐古園は、見事なもみじの世界。

あまりの美しさに、カメラのシャッターを押すことに夢中で本末転倒、肝心な俳句はさっぱり出来ず、夕方からの句会が心配でした。

定刻通りに始まった句会は、皆さん思い思いの切り口で詠んだ句がそろいました。

私も、深いお濠に迫り出した大木、太い走り根、そこ

にきらきらと舞い散る黄葉、遠くに光る千曲川などいくつかの句を詠みました。

太き根の古き石抱く谷紅葉

黄落の木漏れ日の中千曲川

ひと風呂浴びてお楽しみ夕食タイム、アルコールも入り、腹ごなしにとカラオケルームへ。さすが皆さん、世界を、日本を引つ張って来たビジネスマン。各地の思い出を込めて、一曲、二曲と盛り上がりました。

次は恒例の袋まわしの苦行。初めてと言いなながらも一回の説明で、どんどん名句を作る仲間にびっくり。

互いに出し合った漢字一文字を詠みこんで、間髪いれずに次々と袋を回して一句。

後の月信濃の宿にくつろげり

湯の宿に昭和の歌や秋夜長

部屋から見上げた信濃の月の美しかったことなど心に刻み、一日が終わりました。

翌日は早朝に帰る人達を見送り、さてどこへ行こうかと地図を広げて思案。地元に詳しい文明さんの提案で、「無言館」へ行くことに決まり、私も知世先生も大喜び。

でも、道順が分からず、首をひねっていたら、私用のため車で参加されていた志村良知さんが忙しい時間を割いて、遠回りをして送って下さるとのこと。私たちは深く感謝し、美しい晩秋の田園風景に大満足。

「無言館」は、美しい黄落の林の中に、ひっそりと建っていました。

「戦没画学生慰霊美術館」では、名前の通り、夢半ばで故郷や父母・愛する人々との血を吐くような別れや思ひ出を残した作品、戦地からの便りなどの色あせた遺品に、ただただ胸が締め付けられ、自分の幼い疎開の日々が重なり、心に深く感じたひと時でした。

作品と見紛う窓の蔦紅葉

無言館出て秋空の蒼哀し

近くの「デザイン館」にも寄り、ミニバスに揺られて上田に回り、安楽寺の見事な木造国宝八角三重塔や愛染神社のかつらの黄葉を見たり、のんびりと町を散策し、仕上げはやはり名物のおそばを食べなくてはという事に決まり、急ぎ近くの蕎麦屋へ走り込み、

余生など言わずもがなや走り蕎麦

の一句を最後に、帰途に着きました。

新幹線（あさま）の時間を待つ間や、車中でもまた袋まわし五句との課題。疲れきって居眠りする人、俳句どころではないと言いながらも、皆さん必至で、指を折っていました。

信濃路の駅の小さき柿たわわ

白壁に淡き影置き柿簾

アツと言う間の大宮・東京と、それぞれ家路に着きました。楽しく思い出いっぱい吟行でした。

これからも元気に、代々木の句会でみなさまと学べる縁を大切にしたい、と思っています。



日本語を教えて

原田 信

定年退職後しばらくして、学生時代の友人の誘いでインドネシアのバンドンに一週間滞在した。大学教授だった友人は地元大学の旧知に会うので忙しい。ことばも地理も分からないが、ホテルにひとりでも仕方ないから向かいのその大学構内を散歩してみた。「日本人の方ですか」と男子学生から日本語で声をかけられた。日本語学科の学生だった。その晩、ホテルに数人の男女学生がやってきた。それがきっかけで、帰国してからメールで彼らの学習をサポートすることになった。教えた経験も資格もなかったが、ジャーナリストだったので苦にはならなかった。それから約十年、メールはほとんどがスカイプに替わり、学生の国籍も広がった。たまに出かける外国旅行も彼らの案内に委ねる。これは当初思いつきもしなかった余録だ。

彼らのほとんどが、日本が世界で行う「日本語能力試

験」1、2級（今はN1、N2）の合格を目指す。はじめは一年単位。試験が年二回になってからは半年単位にしたが継続も多い。各時期の学生は十人前後。スカイプは同時に複数を手元に行けるが、ネットの回線事情が国や地域によって違うので現実には無理だ。それで二対一のレッスンになる。週八コマのレッスンも珍しくない。しかも教材は試験の問題集や模擬試験問題ばかり。まるで予備校じゃないかと苦笑しているが、日本語能力試験の資格は彼らにとって就職や昇給の決め手にもなるのでままならない。

中国やインドの回線事情は格段によくなった。こんなことでもその国の経済成長を感じる。僅か二年前には、インドネシアの学生とのレッスンで五分毎に回線の断が続き続いた。毎回のよう「切れたらつなぐ」を二十回も繰り返す始末。それも今では、比較的質のいい回線が彼らの手に届く料金になってきたようだ。

教材の準備は簡単ではない。インドネシアでは大学の授業のテキストもコピーの学生が多い。試験勉強はどうしても問題集に頼るのでこちら持ちになる。一冊千

数百円から高いものは三千円を超える。送料もかかる。

しかし、総じて質のいいテキストは極めて少ない。誤字脱字も散見されるし、文法的な誤りすらある。それになぜか飲酒のシーンやその失敗談が多い。インドネシアは国民の九十%がイスラム教徒で、酒はまず飲まない。国内的に誤解されないかと心配にもなる。知り合いどうしの学生の場合、一冊送ってコピーして賄う。問題集からいい問題だけ選んでコピーして郵送する。同じボランティアをしている友人と、と言っても今のところ一人だけだが、問題集の購入を分担し、ネットで見つけた教材を融通し合う。だからいつも鶴の目鷹の目で材料を探している。本試験にも問題点が多いと思う。詳しく論じるのはやめるが、公的試験で受験者も多い（世界中で数十万人）のに、問題の公表をなぜやめたのか。説得力のある理由は説明されないままだ。実に理解に苦しむ。

彼らの多くは大学を卒業すると、日系企業に就職するか、高校の先生などになる。中には大学院に進学したり、日本の大学院に留学するケースもある。最近そういう人たちから、レッスンを再開してほしいと言ってきた。教

材は本やネットから自由に選べるし、レッスンの仕方でも工夫できるから愉しみだ。千文字の文章でも、能力試験のように大体理解できれば合格点というのではなく、想像力も交えてトータルに理解することを目指す。会話にも、シャドーイングという方法を使う。CDのネイティブの音声をすぐ追いかけて自分で発音し、その場の会話をつかみ、発音を磨く。こうしたレッスンでは「日本人と話して双方が安心できるコミュニケーション」の習得が目標だ。

学生の質問は時に実に鋭い。彼らはそれを意識しているわけではないが、結果としては、ふだん何気なく使っている語義の曖昧さを突かれたり、学者間の論争がある文法事項に及んだりする。そこまででなくても「教えることは学ぶことだ」と思い至ることは多い。

でも、ここに書いた話は学生が個人でPCを持てる層に限られたことだ。PCも回線も手が届かない学生はもとより、大学に進学できない層においても、日本への関心や日本語学習熱はまだまだ高いのである。

隠れ棲む人たち―菅江真澄遊覧記から

大月 和彦

生涯の大半を旅で過ごした菅江真澄は、各地の寺社や医師、商人、素封家などの援助を受けながら、陸奥・蝦夷を歩き、旅の途中で出会った遊女、旅僧、山人などのほか、珍しい経歴を持つ人たちを見聞きしている。庶民の旅が制限されていた時代であっても、想像を絶する波瀾万丈の人生を送った人たちがいた。

対馬の通辞 雛川清歳

天明年間に真澄が故郷三河を出てまもなく、信州善光寺に詣でる途中、姥捨山で月見をした後、更級八幡の宿で気安く話し合える男に会う。雛川清歳と名乗り、対馬から来たという。幼いころ朝鮮に渡り、その国の言葉を学んで通訳を業としていたが、いささかの罪を犯して、このような漂泊の旅をしているという。

道端で休んだ時など朝鮮文字で何か書き、朝鮮語では

こうなどと説明してくれる。

万葉集に詳しい真澄は、遣新羅使の歌に出てくる対馬の名所、浅茅山や竹敷の浦のことなど話し合った。

半島との交流が盛んだった対馬では、十八世紀後半に藩が朝鮮通詞養成所を開設し、九〜十七歳の若者を入学させ、朝鮮語を習得させたという。雛川もそのうちの人だったのだろうか。

川内川の船頭利八郎

寛政の頃、下北半島を歩いていた真澄は、むつ湾に面した川内村で乗った渡し舟の船頭から身の上話を聞く。

自分は東廻り船のかじ取りだった。江戸へ向かう途中、船が難破して中国に漂着した。近年に帰ってきたが、海外渡航の罪に問われている間は大きな船に乗ることが許されず、こんな川舟の船頭をしていると嘆いていた。

『江戸漂流記総集』よれば、この船は、天明八年（一七八八）に松前から江戸に向かった松栄丸で、八戸沖で暴風に遭い、百六十日間の漂流の後、中国広東省の海岸に漂着した。一年後に乗組員十一人が長崎に送り返された海

難事故。真澄が出会った船頭は、このうちの一人、南部領田名部郡川内村の水主の利八郎だった。

赤穂浪士の離脱者

文化元年（一八〇四）の夏、男鹿半島の南、舟越の八龍社に参拝した時、赤穂浪士の離脱者の噂を聞く。

浅野内匠頭切腹の後、大石良雄から仇討の刀を買い集めるための金二百両を与えられた赤穂藩士小山田莊左衛門が、変心して行く方をくらし、元禄の末ごろ八郎潟沿いの飯村（男鹿市）に住み着く。討ち入りを果たした横川勘平から「大臆病者」と非難された江戸給人百石取りだった人物。その子孫が貧窮し、今もここに住んでいる。

また、浅野家の家老の一人で、早い時期に離脱した大野九郎右衛門の縁者の子孫小田島某もこの付近にいる、と土地の人が語っていた。

八森の漁師吉太郎

文化四年（一八〇七）羽後の八森で道連れになった旅僧から、新屋敷村の漁師吉太郎の話聞く。

吉太郎は寛政七年（一七九五）冬、松前に渡ろうとして遭難、漂流し、翌年五月に中国の澳州という見知らぬ地に流れ着き、五年後に故郷に送り返された。

持ち帰った土産に中国の役人がくれた詩の書いてある扇子があり、詩文の終わりに「・・時在小春二十有三日 姑蘇 徐陸源」とあった。

吉太郎は中国の土地の人たちから何か書いてくれと申しきりに頼まれたので、子どもの頃手習いに書いて天満宮に奉納した唐詩「楓橋夜泊」（月落ち烏啼いて・）の語句「姑蘇城外寒山寺」を書いてあちこちに書いてやった。

付き添いの人がそれを見て、お前の書く姑蘇城とはこのことだよと教えてくれたという。

真澄は吉太郎を訪ね、持ち帰ったその詩文を写しとって、日記に掲げている。

この海難事故は、『日本漂流漂着史料』によると、奥州土佐郡（十三湊か？筆者）の船、徳永丸が松前出航後暴風に遭い、広東省の澳州に漂着した。生き残った漂流三人が長崎に帰国。長崎で取り調べを受けた後、佐竹と津軽両藩に引渡され、故郷に帰ったとある。

私とフォト句との出会い

矢澤 正二

私は二〇一一年一月、フォト句と出会いました。

その前年の二〇一〇年一月脳卒中で倒れ、その後、入院とリハビリ。五月、まだ混濁した頭でいた私を、白馬山麓の山荘へ誘ってくれたのが、学生時代のゼミ仲間と同時に、企業OBペンクラブのO氏とその奥さんでした。奥さんは同じゼミ仲間で、当時可憐なその姿に恋慕した男子学生も数多くいました（私もその一人でした）。

白馬の清涼な空気が、どれほど私を心身ともに癒し、回復させてくれたか計り知れません。それに何と云っても滋養となったのは、夫婦ともに作ってくれた料理でした。クミンなどスパイスの効いたカレーライス、岩魚の燻製その他白馬に自生する山菜の料理。それと奥さん指導によるヨガを取り入れた体操です。そのどれもが私の身も心も蘇生するものでした。

今思うと夢を見ているような一週間でした。

その年の暮れのある日、O氏が「フォト句というのがあがやってみないか」と誘いがありました。「フォトク？ いったい、何だそれは」ということになり「それは写真と俳句を付けたもので、俳句や川柳のような決まりごとやルールはない。お前のリハビリにもってこいだ」とのことでした。

写真はともかく、俳句の心得はなく、この頑迷で脳に穴のあいた頭脳では荷が重いと、一度は断りました。「いから一回見学に来い」とのこと、一月のある日のこと、参宮橋の青少年センターの一室へ行きました。

そこには、軽妙洒脱な話芸の持ち主のプロマネと、言葉の真髄を極めた先輩達がおりました。

そんな中で、私のような浅学非才の者が仲間に入っているか心配でした。

そこでプロマネの褒めることの上手さでした。「よいところに気がついた」「私と考えが同じだ」云々と褒めて褒めぬく。こうして私はいつの間にかフォト句会の会員になっていました。

先輩達が、句会の出がけにエイとばかり詠んだものはほど遠く、句会の一週間前からパソコンを前にうんうんと唸り、「あーでもない」「コーデモナイ」と七転八倒して句を捻り出すといった按配です。おまけに、句会の三日ほど前になると家人から「フォト句は出来たんですか」「あと三日ですよ」と、まるで小学生が夏休みの宿題を催促されるような有様です。

そしてフォト句をやるようになって、いつもカメラを持ち歩き、シャッターチャンスはないかと気をつけたり、ノートを携えて面白いフレーズを書き留めるよう心掛けるようになりました。それまではただブーツと歩いていたのが、歩き甲斐が出てきました。気がつけば、句会には一度も休むことなく参加していました。

句会の後の蕎麦屋での楽しいひととき、フォト句談義にとどまらず、政治のこと、世界の食文化のことなど、無口な私でも話に引き込まれ、ただ聞いているだけで脳が活性化する気がします。

ともあれ写真は、訴えるものがなくてはならない。句は写真の説明ではなく、その向こうにある（裏にある）

ものを表現しなくてはならない。その中に何らかの主張がほしい。それと何といっても遊びの心が必要です。これが私の二年間で学んだことです。

そして心優しい人達に囲まれて、ますます精進して先輩達の域に達したいものです。

次に掲げたのは、二〇一〇年二月フォト句会で、私の第一回目の作品です。



「定年だ これでもいいのだ このままで」
プロマネ添削後 ⇒
「気苦労で 少し白髪が 増えたかな」

開聞岳

阿部 典文

薩摩富士と呼ばれる薩摩半島最南端の開聞岳（標高

九二二米）は、江戸時代の旅行家・橋南谿の『東遊記・名山論』に、立山、白山、鳥海山などと共に、古くから知られる日本の名山として記されている。

深田久弥も、高さ千メートルにも満たない山ではあるが、ユニークな点ではこの山に類するものは無いとして、躊躇なく「日本百名山」の末席にその名を加えている。

私がこの山に初めて接したのは大学三年生の夏休み、九州一周無銭旅行を企画し、雲仙、霧島の山々を巡った後、鹿児島に到着した時であった。計画では九州の最高峰である宮之浦岳へ向かう予定であったが、台風の接近で屋久島への連絡船は欠航となり、その代案として選んだのが開聞岳登山であった。

この開聞岳は、仁和元年（八八五年）以後噴火の記録は残されていないが、周辺には開聞岳の姿を逆さまに美しく写すカルデラの池田湖（周囲十五キロメートル、九州最大）や、巨大な鰻が棲むと伝えられる鰻池など火山噴火の痕跡が多く残されている。

その山麓の一角に鎮座する杖聞神社ひじききは和銅元年（七〇八年）創設と伝えられ、九世紀の度重なる開聞岳の噴火に、平安時代の朝廷は神の怒りを鎮めるため、薩摩国の一の宮の官位を与えている。又このお宮には、古くから南海を航海した薩摩隼人や、琉球、唐人等の手になる航海安全を祈願する扁額や旗が奉納されており、また浦島太郎の玉手箱が宝物として伝わっている。

神社より真正面に仰ぎ見る開聞岳へは、一直線に伸びた田舎道を辿り、麓からは山体を螺旋状に回りながら登る道が設けられていた。

高度五百メートルまではクスノキ等の常緑樹が茂りあう密林の中を登る単調な急坂であった。

やがて強い風の影響を受けた背の低いツゲやハゼ等の

灌木帯に入ると、眺望が一気に開けた。

南方の洋上には、後白河法皇の近習であった僧俊寛が罪を得て流された硫黄島や九州最南端の佐多岬、北には噴煙をたなびかせる桜島、そして西側眼下には「遣唐使が往来した南島航路」の寄港地の一つであった「坊津港」の景観が、三百六十度のパノラマとして展開していた。

この様に山は三方を海に取り囲まれ、標高は低いが海面より直接聳え立ち、ほぼ完全な三角錐の山容を持つ秀麗な姿は、「観天望氣」の航海術に頼っていた古代の海洋民にとって、掛け替えのない航路標識であった。

そのため開聞岳はかつて「海門岳」と書かれたこともあり、黒潮に乗りこの海域を航海した南海の民にとっては、日本列島への「開かれた門」であったのだろう。

因みに数度の渡航の失敗の後、第十次遣唐副使大伴古麻呂帰国に同行して来日を果たした僧鑑真も、天平勝宝五年（七五三年）、薩摩国秋妻屋浦（坊津）に入港しているが、洋上遙かにこの山の姿を望み、難渋した渡航の試みが成就した喜びを味わったこと、想像に難くない。

下山道の途中から東へ向かう道が分岐しているが、私もこの道を一気に降り、漁村の川尻部落から「長崎の鼻」に向かい、登山の汗を流すため、開聞温泉に宿泊した。

当時この温泉の波打際には露天風呂があった。

潮騒のみが聞こえる静寂の夜の帳の中で、天頂近くに北斗七星を仰ぎ、満天の星空に浮かび上がるコニーデ型の開聞岳の秀麗な山容を眺めながらの湯浴みは、正に仙境にいる思いであった。

因みにこの地方には、秦の始皇帝の時代、不老長寿の秘薬を求め東方の海上に浮かぶ「蓬莱山を目指した徐福」一行が渡来したとの伝説も残され、浦島伝説と合わせ、温泉に浸かりながら時を忘れ、古代のロマンに身を委ねた想い出が今でも鮮やかに蘇ってくる。

幻想から覚めると、夜空には「天の川」が流れ、妖艶な赤い光を放つ「さそり座のアンタレス」が輝いていた。

オクラホマの悪夢

平尾 富男

どのくらい眠ったであろうか。ふと体の上に重いものが覆い被さっているような苦しさを覚えて、深い眠りから目覚めさせられた。

ニューヨークに駐在していた一九七〇年代の話である。当時の主な任務は、毎週のようにアメリカ南部に出張しては代理店周りをし、南部十三州の市場開拓をすることだった。その週は代理店をオクラホマに集めて、展示会を開催していた。

真夜中のホテルの一室、身を横たえたベッドの上で少しずつ意識が戻ってくる。この何とも言えない重苦しさの原因は何なのだろう。体の上には誰も乗っていないが、たし、人の気配は全くなかった。

当時、ヘビー・スモーカーであったから、その晩のタバコの吸い過ぎが胸の苦しさの原因かと思った。ふと、消し忘れのタバコが部屋の絨毯を焦らしているのかとの

思いがよぎり、慌ててベッドから飛び降りた。

真つ暗な部屋の中には煙の様なものも充満している。

ベッドサイドのランプのスイッチを探し当てて電気を点けようとしても全く反応がない。手探りで部屋を歩き回り、電気スイッチを探し当てても無駄だった。

パニックに陥りながら窓際に行つてカーテンを引き、窓を押し開いた。すると、激しい勢いで黒煙が外から入り込んで来る。十七階のその部屋の窓の下からは、大勢の人の声が上がってきた。慌てて窓を閉め、部屋のドアを開けて廊下に出ようとすると、暗闇の中でもそれと分かる真つ黒な煙がそこにも充満している。

一瞬死を覚悟した。停電の闇の中で、パジャマの上からズボンを通き、上着をはおった。とっさに、自分の死体がだらしなないパジャマ姿で焼け跡の中に晒されることを避けたかったに違いない。

息苦しさが増す。喉が苦しい。ああ、もう駄目だ！

そのとき、廊下の外に人の気配がした。ドアを叩く音が聞こえて来る。一目散にドアに駆け寄ると、黒煙の塊と共に数人の消防夫の巨体が飛び込んできた。一人の消

消防夫に手を引かれ、消防夫たちの照らす懐中電灯を頼りに、暗く狭い非常階段を駆け落ちるように降りていった。それは、長く果てしない下降の道程であった。

終に最後の一段を降り、街灯に照らされた通りに出たとき、大勢の人の歓声が上がった。地獄から奇跡的にも帰還できたことを実感させられた。

市当局が手配してくれた近くの簡易施設に身を落ち着け、何が起こったかを周りの顔見知りの集団から聞かされる。由緒ある築五十年のそのホテルの地下で起こった火事の煙が、エレベーターシャフト（昇降路）を伝って建物全体に充満したというのだ。

煙の勢いは上の階ほどひどい。少々酒を飲み過ぎ、疲労困憊で熟睡し、ただ一人最上階のスイートルームに取り残されてしまったことが災いしたのだ。幸いにして、火は貯蔵されていた重油を燃やしただけで、建造物への大きな火災被害を伴わなかった。

難を逃れて建物の外へ避難していた他のホテルの客人たちは、まだ中に一人の日本人が残っていることを思い出し、大騒ぎをして消防夫たちに救出を促してくれた。

お陰で九死に一生を得たのである。

もし煙に巻かれたまま眠りから目を覚まさずにいて、消防士の救助が遅れていたら、アメリカ南部の州都で起こったホテル火災の唯一人の犠牲者となつたであろう。地方新聞の片隅には、小さく「日本人の死」として無情に報道されるだけだったはずだ。

ニューヨーク・ロングアイランドのアパートで、幼い子供を抱えて、その「事件」を知らされるであろう妻の顔を思い起こした。現実の妻は、翌日の夕刻に出張から帰った夫を、何事もなかったかのように笑顔で迎えたのだが。この悪夢の吸煙経験を期に、暫く喫煙の悪習から遠ざかることができたのだから皮肉である。

中学生の頃に、今はない新宿コマ劇場の巨大スクリーンで見た映画『OKLAHOMA』の中の風景は、古き良き時代のアメリカの象徴であったが、その頃のオクラホマは既に石油開発と近代化の波に洗われていた。

かつて憧れた「美しい朝『Oh, what a beautiful morning!』」を迎えるために、アメリカ南部のこの州にその後戻るとは二度となかった。

池袋の下宿

寺井 融

昭和四十一年春、十八歳のとき、受験で上京した。初住居は池袋本町である。築二十年は優に超えている木造の二階建てで、台所と便所は共同であった。三畳間に坐り机と本棚を置き、布団を敷くと、残るスペースはほとんどなかった。それでも家賃は三千円でなかったか。

友が泊まっていくと、二階に住む大家がやってきて、「契約は一人なのよ。困るわね」とクレームである。「すみません」と平謝り。それでも、友人が持ってきたお土産の甘いものを、おすそ分けすると顔がほころんだ。

あるとき、刑事がやってきた。

「二昨日の夜半、入り口の部屋から、大きな音や叫び声が、聞こえませんでしたか」

そう言われたって、白河夜船。寝つきのいい私には、覚えがない。

「何か、あったんですか？」

「女性から訴えがあったので」

強姦事件らしかった。目つきのよくない男たちが、よく出入りする部屋ではあったが…。

また、夜十時過ぎにノックされ、「学生さん、いらつしやいますか」と、黄色い声がかかったこともある。

廊下をはさんだ向かいの三十代になったかならないかの豊満で妙齢の女性が、ネグリジエ姿で立っていた。

「こんな姿で、夜分にすみませんね。お醤油、貸していただけますか？」

台所で一、二度話したことはある。やわらかい感じの色白の、男が（男を？）好みそうなタイプだった。

そんなことがあって、何日か経ってから、今度はご主人に、「学生さん」と戸をたたかれた。

「家内、知りませんか」

血相が変わっている。

「どうしたんですか？」

「家財道具を売り払って、出て行ったんで…」

逃げられたようだった。彼は寿司の職人である。彼女は、某新興宗教の信者。よくお題目が聞こえてきたから、

間違いはあるまい。当時、「肉弾布教」も話題となっていた。少々惜しい気もした。

一年経って、不動産屋から「出て行ってほしい」と通告される。理由は大家のキンさんが北朝鮮に帰るため、会社の寮になるとのこと。映画「キューポラのある町」を思い出した。大家に「なんでも北の生活は大変らしいですよ」と忠告した。「学生さん、お世話になったわね。もう決めたことだから」と決意は固かった。

次に住んだのは、同じ池袋西口方面でも、要町通りから一本入った民家である。二階に三つの小部屋があり、部屋代は四千円である。台所はついていない。近所の定食屋で肉豆腐定食を食べるのが楽しみとなった。

わが部屋に女の子が遊びに来た。掃除をしてくれ、持ってきた一輪指しにバラの花を活けて帰って行った。

それから、何日か経った。隣の男の美容士の部屋から、二、三人の若い女性の話し声が聞こえる。それはいい。ものの三分も、経ったであろうか、シンナーの匂いがしてきた。こちらも、頭がくらくらする。

翌日、下の大家に抗議した。

「そうですか、嚴重に注意しておきます。寺井さんは真面目ですからねえ。女性が来られても、すぐ帰られますし」と言われた。どうやら拙宅を訪れた女性が、いつ帰るか、二階は揺れるのか、観察をしていたらしい。

後日談がある。二年後、その大家から、「子供が大きくなって、勉強部屋が必要になったから」と追い出された。

しばらく経って、新聞の社会面を見て驚いた。「池袋の民家売春宿、手入れ」とのベタ記事。住所といい、Hという名前といい、まぎれもなく当方の下宿だった。三部屋をふる回転させて、荒稼ぎしていたらしい。



二つの『姫街道』

清水 勝

仲間と街道歩きをしており、『悠遊』十六号に「旧東海道を歩く」を書き、十八号には「中山道を選んだ和宮の降嫁」を書いた。その後「旧東海道は五十七次が正しいんだゾ」と言われ、四次を足して大阪高麗橋まで歩いた。

更に「東海道も中山道も姫街道を歩かなくては本物ではないな」と言われ、またもやチャレンジ！

そこで、まずは東海道の姫街道から。三月十三日、スタートは磐田市にある「遠州見附宿これより姫街道三州御油宿まで」の道標だ。しかし旧道の面影はなく交通量の激しい県道261号の歩道歩きが続く。途中見るべきものもなく、ひたすら二十数キロを歩く。ようやく姫街道の醍醐味の味わえる気賀関所に到着した。

浜松駅の観光案内所の方が言ったことを思い出した。彼はこの気賀関所のある細江町出身で、定年退職した私たちの同輩であるが、娘が姫街道中のお姫様に選ばれた

かったことをすごく悔しがっていたという。駕籠に乗る関係で小柄でないとねと言って慰めたそうだ。優しいな。

細江町には地震除けの細江神社がある。何でも五百年以上前の地震の際に湖西市にあった角避比古神社のご神体が津波で流され、浜名湖の北端のこの地に流れ着き、細江神社のご神体になったという。二度と東日本大地震のようなことが起こらぬよう心からお参りをした。

実は地震と姫街道の関係は深く、一七〇七年の宝永の地震により浜名湖南部は壊滅的な被害を受け、東海道が通行できず迂回路として利用された。

さて、気賀↓三ヶ日↓本坂峠↓高山^{すせ}までの道中は山道で旧街道らしい石畳もあり、浜名湖の湖面が見え隠れする。だが、姫様が楽しんで通ったヤワな道だと考えると酷い目に逢う。比佐峠、本坂峠は難所で、急坂が続き、途中には象鳴き坂といわれる坂がある。ここは、八代將軍吉宗への献上品の象が巨体であるため、新居の^{あつがい}今^{いま}ぎれ船で通す事が出来ず迂回した際に、険しい坂に象が鳴いたとのことでこの名があるそうだ。

そうそう、この東海道の浜名湖を渡る「今切の渡し」

の名が、縁が切れることを連想させるので、女性はそのを避けて急坂であつても姫街道を通つた。もちろん新居の関所の取り調べが厳しかったことも理由の一つである。

何はともあれ東海道姫街道六十キロを歩き終え、次は中山道の姫街道だ。この街道は中山道が浅間山の噴火で不通になったために開削された。碓氷峠の険しい道を選けてはいるものの、和峠も侮れない。そこで今回は京側から江戸へ文字通り下る道を選んで、信濃追分からスタートした。途中には珍しいおうけつ甌穴（浸食によつて河床の岩盤にできる円形の穴）を見ながら、通行量の少ない県道を気持ちよく歩く。

『あさま山荘の事件顕彰碑』があり、あれから四十年も経つたことに一同感慨深い。暫し休憩をし、事件を知つた時の自分たちの様子を話し合つた。和美峠を越えようと群馬県の本宿に着くが、ここの旅館は閉鎖されてしまい、町営の通学バスに乗り下仁田駅近くの宿に入る。

もちろん、翌日は本宿までバスで戻り、昨日の地点から歩き出す。途中には中小坂鉄山製鉄所跡がある。江戸時代に溶鉱炉が設置された産業遺産だ。その先は天狗

党と高崎藩との壮烈な下仁田戦争の舞台である。

歴史を感じながらも、下仁田こんにやくセンターのこんにやくアイスで暫し休憩。富岡まではまだ遠いと、重たい腰を上げて向かうは小坂坂峠。峠を越えようと真っ暗なトンネルを通るが、この辺りは通る人もいない。なほほど火葬場と清掃センターがある訳だ。やがて上信電鉄と並行に歩いて、上州一之宮貫前神社にたどり着く。

この神社は少々変わつており、歩き疲れた我らに大鳥居まで登れと石段に迎えられる。お参りをしようと大鳥居から本殿を見ると、今度は下つて来いよとまた石段である。これを往復したので疲労困憊。やつとの思いで富岡製糸場近くの宿に入る。製糸場の前は観光客用のお店が並んでおり、重要文化財の見学者の多いことが判る。

翌日は藤岡宿まで、これで七十二キロの踏破となる。途中の風情豊かな小幡藩に寄りたいところだが、街道から外れるので断念して、『三途川』に架かる「三途橋」を注意深く渡る。吉井藩陣屋の表門や馬庭念流道場を経て藤岡駅前の食堂でビールにあり着いた。

二つの姫街道を歩き終えた達成感が嬉しい！

微生物燃料電池の夢

吉 寄 清 己

燃料電池は、白金やパラジウムなどを触媒に、高温下、水素やメタノールを燃料に発電する。水素の場合、理論電圧は1.23Vが得られ、反応後の生成物は無害の水である。しかし、水素を製造するとき、メタンの水蒸気改質は $\text{C H}_4 + \text{H}_2\text{O} \rightarrow \text{C O} + 3\text{H}_2$ 、 $\text{C O} + \text{H}_2\text{O} \rightarrow \text{C O}_2 + \text{H}_2$ のように炭酸ガスが排出される。水素を用いた燃料電池であっても、炭酸ガスの温室効果はゼロとは言えない。

しかし、太陽光発電の電気を用い、水を電気分解して、水素を製造した場合、炭酸ガスを排出することはなく、 C O_2 フリーの燃料電池用水素を製造できる。また、水素をつくる別の方法として、植物が行う光合成の初期の明反応から水素を取り出すアイデアがある。光合成微生物シアノバクテリアを遺伝子工学的に改良し、水素発生効率を高める研究が行われている。

一方、メタノールは液体だから、気体の水素より取扱いやすいが、アルコールを燃料に用いると、酸化によって炭酸ガスを生じる欠点がある。

燃料電池の燃料を水素やメタノールの何れを使うにしても、電子を抜き出す反応は、触媒と熱が必要である。触媒は高価な貴金属であるため、燃料電池のコストは高い。また、低温型の燃料電池であっても摂氏100度前後の熱をかけ続ける必要がある。燃料電池を普及するには低温で高効率、低価格な触媒の開発が必要である。

微生物燃料電池は水素やメタノールの他、いろいろな有機物から電子を取り出し、電気に変換する。微生物そのものが触媒となるから、常温、常圧の反応であり、高価な貴金属と熱はいらない。微生物は有機物を酸化し、電子を直接電極に流し込むことで電気が生じる。その欠点は、微生物による有機物の分解は、多段階の逐次反応であるため、反応が遅く、加えて、微生物の増殖に伴い、燃料電池内の内部抵抗が増加し、発電効率を落とすことである。装置、電極、膜の改良、遺伝子組み換え体、自然変異株の探索など、微生物の創出が発展の鍵となる。

バイオエタノールは、ブラジルはサトウキビを、アメリカはトウモロコシを原料に製造し、自動車用ガソリンに混合している。最近では、食糧にならないトウモロコシの茎や葉、サトウキビの搾りかすも原料にするようになった。森林の間伐材は木質チップにして、火力発電所の石炭に混合している。一方、チップになりにくい木の残りかすや、工場で加工する際にできる木くずなどはバイオエタノールの原料になっている。バイオエタノールをガソリンに混ぜ、燃焼燃料に用いるには水分を極力除去する高度な精製が必要である。この蒸留工程はコスト高の原因となっている。微生物反応は、水があっても支障がなく、蒸留して水を除去する必要がない。この利点を生かしバイオエタノール微生物燃料電池はぜひ開発したい研究テーマである。

畜産糞尿は悪臭と水質汚濁の厄介物である。京都府八木町の日当たり糞尿排出量は、牛と豚から54トン、加えて、豆腐工場からおから5トンが出る。この廃棄物にメタン発酵を行ない、生成したメタンはコジェネレーションの燃料に使っている。発電量は2500KWH、

熱は装置の保温、暖房、浴室に使う。畜糞の発酵は酵素や微生物によって、水素と炭酸ガスに分解し、これにメタン発酵菌が作用してメタンを生成する。 $4H_2 + CO_2 \rightarrow CH_4 + 2H_2O$ 。反応式から分かるように、火力発電所や工場の煙突から、化石燃料を燃やして排出される炭酸ガスを畜糞発酵槽に取り入れると、メタンに転換できる。実用化できれば、炭酸ガス除去の環境対策として申し分がない。

電気自動車について、充電式が普及しない理由は、各地に充電設備をつくる必要があること、自動車の走行距離が短いことである。これに反して、燃料電池車は車内で発電できるから、燃料の補給をすれば長距離を走行できる。燃料は水素や都市ガス（主な成分はメタン）の場合と、メタノールやバイオエタノールのような液体とがある。気体より液体の方が取扱い易い。高価な触媒の金属を用いないバイオエタノール微生物燃料電池なんてできたら面白い。夢はいろいろある。

心に残る歌

浜口 須美子

中学校を卒業してから四十年の月日が経った。

同窓会開催にあたって、「四十年後のラブレター」と題して、あの時に言えなかったことを今伝えよう、青春を再び思い出そうとの企画を幹事が考えた。五十路半ばの私達は、ドキドキの恋愛の世代は過ぎ、かといって愛や恋の感情を封印してしまうほど枯れてもおらず、若い頃を懐かしく思い出しながら、心電図に映らない胸キュンを味わってみたい年頃なのである。

幹事の私は、ハガキを読み上げるときのバックに流す音楽を決める役になり、私達の青春の歌の数々を思い浮かべた。

私には忘れられない歌がある。トワ・エ・モアの「ある日突然」。

♪ある日突然 二人黙るの

あんなにおしゃべりしていたけれど♪

教室で、机を並べて勉強をして、消しゴム貸したり、テストの結果を見せ合ったり、ひとつの教科書を二人で見つめて、ふと横を見ると、意外に近い二人の距離に胸がドキドキしたっけ。意識したら、本を持つ手が震えたっけ。それだけの思い出。そのまま、消えてしまった大切な私の思い出。絶対この曲を探そうと思った。

なにしろレコードの時代の話。CDショップには見当たらないし、数件の店を探した挙句、一九六〇年代後半の曲を集めたカセットテープを見つけた。みんなの同窓会で、みんなの思い出を盛り上げるために考えた企画だが、途中からは私自身の思い出を辿ることに力が入り、同窓会が楽しみでワクワクした。

そして当日、受付で回収した「四十年後のラブレター」は数枚あった。何枚かは、相手の名前がはっきり書いてあり、差出人はニックネームが書いてある。そんな中で、相手の名前も差出人名もないハガキがあった。

内容は、「僕の思い出の曲はトワ・エ・モアの『ある日突然』です。この曲を聴くと四十年前の幼かった自分、可愛かった君が思い出されます。あの時に言えなかった

けど、四十年たって、今あらためて言います。君が好きでした。君の名前を子供につけました」。

『ある日突然』の音楽が流れ、ハガキに書かれたラブレターが読み上げられて、会場の雰囲気も最高に盛り上がる。「誰が書いたの?」「相手は誰やる?」会場のあちこちでささやく声。私は『ある日突然』のカセットを操作しながら、胸がいっぱいになった。彼は私と同じ気持ちやったんや。彼は、自分の子供に私の名前をつけたんや。トワ・エ・モアの透명한歌声が心に沁みる。音楽がさびの部分になった時、どこからか啜り泣く声が聞こえてきた。「どうしたん?」みんなが声をかける。みんなが口々に言う。「きつとあの子がこのラブレターの中の彼女やわ」泣いている子は何も語らず、ただ泣くだけ。すっかり主人公気分になっていた私は、なんだかトンビに油揚げをさらわれたような気分。「エーこれって私やん」と思うが、今更に乗るものははかれて、同窓会は終了した。会場のみんなは、あのハガキを書いた人も、相手の彼女も、とうとう誰だかわからなかったけれど、密かにすすり泣く彼女は、同窓会の主人公になった。

帰りに、私の思い出の『ある日突然』の相手役が私に言った。「四十年後のラブレターの話、書いた奴って誰やろう? バックの音楽ともバッチリ合ってたし、ドラマみたいやったな」私は心の中で叫んだ。「あのハガキはあんたが私に宛てて書いたのではなかったの?」わかったことは、『ある日突然』を思い出として心の歌と思っている人が世の中に複数存在すること。昭和三十年代生まれの青春ど真ん中の曲、それこそ『ある日突然』なのである。



大阪 淀川堤防

「お札」の有難さ

野瀬 隆平

タイトルの「お札」を何と読まれましたか。「おさつ」とも「おふだ」とも読めます。

この二つ、共に「札」という字が使われるほかにも、多くの共通点があります。おさつ（紙幣）も、おふだ（神仏の守り札）も、紙が薄い木片でできていて、それ自身の「物」としての価値はたいしてありません。ちなみに、一万円札の原価はおよそ20円だと聞いたことがあります。おふだも、罰当りな言い方ですが、原価は同じようなものです。

しかし、それは共に大きな力を持っています。おふだ（御札）は人の心を安定させるうえで、おさつ（紙幣）は経済生活を営むのに、絶大な力を發揮します。また、どちらも発行する神や仏、あるいは国や銀行を信ずることで始めて成り立つものです。いずれも、いざという時の神頼みとか、まさかの時の蓄えとして、特に将来への

備えとして大きな役割を果たします。

日本の経済が停滞している要因の一つは、人々が将来の不安に備え、できるだけお金を使わないようにしているからだといえます。お金に余裕のある人でも、万一に備えて贅沢を控え、貯金しているのは確かでしょう。しかし、本当にお金がなくて、日々の生活にも困っている人が大勢いることも否定できない事実です。

また、消費者が欲しいものをすべて手に入れ、魅力的な商品が新たに開発されないから需要が伸びないのだ、と言う評論家もいます。その一面は否定しませんが、街の中には人々の欲望をそそるもので満ち溢れています。実は、買いたいものがいっぱいあるのです。よく、若者の車離れが言われますが、とても自分の経済力では買えないと、端からあきらめているだけではないでしょうか。高望みはしないという自己規制がかかっているのです。もしも、将来の不安に備えてお金を使わないでいると言うのであれば、その人たちにお金（おさつ）を御札として配ったらどうでしょう。原価はそんなにかからないの

ですから。そのことで、将来への不安が無くなり、今持っているお金を安心して使い、実は欲しいと思っていたものを買うようになる筈です。御札として配られたお金が、将来に備えて大切にしまわれておかれるのであれば、極端なインフレを引き起こすこともないでしょう。事実、経済学者の中には、不思議なことに、お金の流通量を増やしてもインフレにはならないと主張している人が多くいます。

お金を持っている人から税金として取り立てたり、どこかにある金をかき集めても駄目です。お金が移動するだけで、量は増えません。取り上げたり借りたりするのではなく、返す必要のないお金を創り出すしかありません。貨幣の発行権を持っている国にはこれが出来ます。

生み出されたお金もこれまでの様に、銀行を通して貸すというのではないけません。みんなお金は欲しいのですが、返す当てもないのに銀行から借金出来ないのは当然です。サラ金地獄が待っています。お金を直ぐにでも使いたい人に届ける方法は必ずある筈です。

話は変わりますが、いつも不思議に思うのは、宝くじ売り場のことです。当たりくじが多く出るという評判の売り場には長蛇の列ができています。一方、そのすぐ横で同じ宝くじが売られているのに、ほとんどの人はその売り場を無視しています。少し冷静に考えれば、当たる確率は同じなのだから、空いた売り場で買えばよさそうなのに、そうはしません。ことほど左様に、みんな喉から手が出るほどお金が欲しいのです。買いたいものがあるのです。将来の安心を得る為だけとは、とても思えません。

「おさつ」を「おふだ」として配るなどという考えは、ほけ老人の妄想として一顧だにされないでしょう。しかしひよっとしたら、「コロナプスの卵」かも知れません。いずれにしても、実現しそうにありませんから、神社で「おふだ」をもらい、よく当たると評判の宝くじ売り場でくじを買って「おさつ」の夢でも見ましょうか。

『東京家族』

松浦 武弘

山田洋次監督は、往年の名作である『東京物語』の現代版を描くつもりで、脚本構成の最終段階で、東日本大震災に遭遇し、推敲を重ねた末に、昨年『東京家族』の撮影を終了した。

小津安二郎監督のえがいた『東京物語』では、広島県の尾道に住む老夫婦が二十年振りに上京し、成人した子供達の家を訪ねる。はじめは歓迎した子供達も、両親を熱海に行かせて厄介払いをするが、戦死した次男のアパート住まいの未亡人だけが親身に面倒を見てくれる。

戦後変わりつつある家族関係をテーマに、人間の生と死までも見つけた深刻なドラマとなっている。

笠智衆と東山千栄子の演じる老夫婦や原節子の演じる未亡人などの俳優達の演技に加え、脇役全員の絶妙な演技がひかり、魅了された。

私は小・中学校時代、大崎上島東野村の矢弓港から巡航船で何度も尾道を訪れていただけに、土地勘もあり、懐かしさを感じつつ、映画を見ることが出来た。

車社会となり、本州・四国と瀬戸内海の島々との輸送は、人・物ともに巡航船から大型フェリーに変わった。更に本四架橋の竣工後は、本州・四国と瀬戸内海の島々間の物流関係も大きく変わった。橋によって本州や四国とつながった瀬戸内海の島々が増えた中で、大崎上島は取り残され、急激に過疎化が進んだ。

私の生まれ育った瀬戸内海の大崎上島が、『東京家族』での老夫婦の住む舞台となっている。

大崎上島は船でしか渡ることのできない島で、現在も未開発な部分が沢山あり、それに目をつけた山田監督が実際にこの地に足を運び、「美しい日本の故郷の原風景みたいなもので、見飽きない美しさがある」として、東京家族のロケ地に大崎上島を選んだ、と言われている。小・中学校時代の島の総人口は六万人を超えており、造船所が数多くあり、文化的水準も高かった。

大崎上島と大三島の間の海峡は、古代より船舶の往来する交通の要所で、潮待ちの港町が島の随所に発達した。明治になり、回船業で成功した東野村の望月家は、現在も大望月として矢弓に旧邸を残している。

望月圭介氏は浜口雄幸内閣の通信大臣等を歴任し、島一番の出世頭として崇められ、東野小学校の玄関の入り口に、大きな油絵の肖像画が礼服姿で飾られていた。

所得倍増を唱えた内閣総理大臣池田勇人は、島の選挙区である広島二区選出だったが、彼の初婚相手の広沢伯爵令嬢との結婚式の仲人は、望月圭介氏であった。

宏池会広島副支部長を務めた本家の大叔父は、「武弘君、就職は池田先生にお願ひしてやるから心配するな」と言っていた。勿論、頼みはしなかったが……

昔から島々の往来は伝馬船や帆船に依存しており、木造の伝馬船等の製造技術が、戦前・戦後の造船業の発展の基礎となった。日本経済の高度成長の波に乗り、島の造船業は活況を呈し最盛時には大型タンカーまで建造した。東野村・鮎崎めばるさきの松浦鉄工所は三井造船の下請けとし

て、伊藤忠商事經由の船舶を受注していた。

オイルショックと賃金の高騰により、造船業の国際競争力は低下衰退し廃業が続いた。

過疎化した現在は、小学校、中学校が一枚ずつに減少し、国立の商船高等専門学校と普通科の高等学校は残っているものの、島の人口は七千四百名に減少しており、今後増々過疎化が進むと思われる。島を歩くと廃屋が目立ち、人影はまばらで、しかも老人ばかりである。

造船所も、旧木江町の天満港と鮎崎の松浦鉄工所が、修繕を主体に細々と生き延びている状況である。

斯様な「デザート」化した大崎上島が、山田監督には、「船」でしか渡ることの出来ない「自然の温存された」美しき島と映ったのではなからうか？

『東京家族』の撮影現場は、全て私の熟知した場所であり、何十回と利用した「天満港」、何回か訪れて法要を行った「円妙寺」、歩きながら何度も見上げた「主人公夫婦の家」等は、今も忘れられない場所である。

すずめの涙

西田 昭良

子どもが

子すずめ

つかまえた

その子の

かあさん

わらってた

すずめのかあさん

それ見てた

お屋根で

鳴かずに

それ見てた

テレビでよく見かける或る企業のコマーシャルであ

る。詩の朗読をバックに、ふつくらとしたのどかな田園風景が静かに流れる。

「人、物への思いやりの心…」とナレーションは続く。いいコマーシャルだ。

すずめのかあさんは、人間の子どもがすぐに子すずめを巣に戻してくれるだろう、と信じきっている。

このCMを見る度に、平和で素晴らしい今日の日本に酔いしれるのだが、同時に私には六十数年前の戦時中の一齣がどうしても重なってくる。

もし同じ作者がその場にいたら、さぞこう綴っていただろう。

子どもが

子すずめ

つかまえた

その子の

かあさん

おどろいた

すずめのかあさん

それ見てた

お屋根で

涙をながして

それ見てた

子どもは、東京をはるかに離れた鄙の里山に集団疎開をしてきた小学生。栄養失調で骸骨のように痩せ細った腕がすずめの巣をまさぐっている。指先に子すずめの体温を感じると、一羽ずつ頭をつまんで取り出し、ポケットにしまい込む。

すずめは、神社などの朽ちた壁板の隙間によく巣を作る。一つの巣から少なくとも二、三羽、多い時には五、六羽の雛が誕生する。

少年はポケットの中で身を寄せている雛に手を添えながら、風呂場へと急ぐ。そこで湯を沸かしている当番に一、二羽はピンはねされるが、残りは自分のものだ。

少年らは急いで長火箸や針金に子すずめを刺すと、燃えしきる焚き木の中へとくべる。

五分もすると、香ばしい匂いが焚き口から風呂場全体へと充滿する。

やがて少年たちは口の中の火傷も何のその、舌鼓を打ちながら子すずめにむさぼりつく。他の仲間たちに感づかれたら大変だ。

「すずめの涙」はごく少量を意味する譬だが、その時のかあさんすずめの涙は瀧のようであつたらう。

疎開っ子の少年たちにとっては、子すずめの焼き鳥という、自然の神様が贈ってくれた貴い恵みによって、毎日苦しめられている空腹がいつとき遠退くのだった。



ベトナム戦争の枯葉剤

田原 敬

フォトジャーナリスト中村梧郎氏の写真展を見に行つた。ベトナム戦争に関係した記録と映画である。

戦争は一九六一年に開始、七一年に終わるまで十年に亘つたが、日本の降伏からベトナム終結後も含めて三十年間の記録であつた。

枯葉剤が使用され、この影響のあまりの凄さには愕きのほかはなく、非人道的な戦争の悪を遺憾なく追及し、国際的な道義性を世間に問う、ジャーナリストの信念が滲むものであつた。

アメリカは、ジャングルに潜む敵軍を殲滅させるために世界で初めて枯葉剤を大量に使用し、人間だけでなく、あらゆる生物に甚大な被害を与えた。

戦争に勝利する為なら何をして良いのか、第二次世界戦争に原子爆弾を日本へ投下してから既に六七年、日本ではいまだ放射能障害を患っている。ヒロシマ・ナガ

サキへの原爆投下は、その破壊力だけではなく、ヒトに対する放射能障害を、アメリカは充分に承知をした上で投下したのであつた。相手がアジア人だから使つたといふのは既に定説であり、戦場がもしヨーロッパであつたなら、こうした攻撃はしなかつたと言われている。

敗戦以前から、米軍は、爆弾や焼夷弾爆撃で、日本中に大変な被害を与え、一般市民を何百万人も殺し、国際法違反行為を堂々とやつてのけた。戦後の占領政策では、日本の教育制度にまで強行に介入し、彼等のやり方を押しつけた。

枯葉剤とは猛毒なダイオキシシンであり、青酸カリなどの比ではない。その結果、激しいガン性と奇形性が発生し、後々までも悪影響を遺した。アメリカ政府と軍の中樞は、その毒性を熟知しながら、味方の兵には「人畜無害の対植物兵器」、「人間には無害」と偽つた。ダイオキシシンの毒性は、数十年という時を経てヒトを蝕み、汚染はすでに地下水系にも達している。その害悪は、出産異常、原因不明の難病、合指症、心的障害、ストレス障害、

腕の欠損、胎内死亡、流産、全盲、機能マヒなど書ききれない。ベトナムは、「ヒトと環境の絶滅の実験場」となったようだ。悲惨な戦争を遂行する米国のやりかたに、参戦したアメリカの軍人達さえも、裁判に訴えてアメリカ政府の不当性を追求した。人類は昔から人が殺しあい、闘う歴史を繰り返してきた、然し、科学技術の進歩につれて、陰惨な大量殺戮の闘いはエスカレートする。理由をつけて一方的な殺戮をする状況は、最早、赦せぬ事態にある。

結局、ベトナム戦争はアメリカの敗北に終わったが、アメリカ本土には被害がなく、戦闘に参加した将兵の子供に障害のある子供が生まれ、のみならずベトナム戦争に参加して復員した帰還兵を採用する会社がなく、就職できなかつたのが実態である。

枯葉剤を大量に撒かれた地域では、マングローブの森林も再生には数十年もかかるらしい。あの手この手で繰り返されてきた米軍の掃討作戦や砲撃は、生々しい惨劇を人々に見せつけ、治療をしたくも薬品もなく、手当てのしようもない状況が続いた。

ダイオキシンの劇毒性は、政府と軍の中核、企業だけによく知っていたが、これはトップシークレットとされ、「人体への影響は報告されていない」と口裏を合わせ、官民の連携プレーによる知らん顔は八三年まで続いたそうだ。全米科学アカデミー(NAS)による枯葉剤調査報告は、六一年から八九年までを比較し、「異常は増えていない」と結論しようとした。

ベトナムの大衆紙が毒薬散布を記事にすると、米軍は発刊停止の弾圧をし、まさにベトナムは史上空前の生体実験とされた。

アメリカの退役軍人にはそれでも、補償金が与えられ、治療費は無料で手厚い補償がされている一方、ベトナム人には人体影響を認めず、訴えをすべて却下した。

グック(gook)はアメリカの兵隊俗語のひとつだった。「グックは人間じゃない。それを殺すのにためらうことはない」——海兵隊員たちはそうたたくこまれた。

それはベトナム人や日本人、中国人などをさす蔑称で、「人間より劣った生き物」を意味している。

音のない世界で ―続編―

古川 さちお

『悠遊』第十号で、重度難聴の主婦・大林恵美のことを書いた。この第二十号が出る頃、彼女は五十歳を越えている。依然として政府系研究所で活躍する夫を支えながら、二人の娘の世話をする母親でもある。長女は上智大学一年生、次女はまだ小学校五年生だ。

身内といわず他人といわず、まわりの人々には物心ともに助けられて生活、一見一般人と同じレベルの生き様を保っているように見える。が、そこには言うに言われぬ苦勞があるに違いない。日常の食事、買い物、生活に必要なアルバイトのこと、子供の教育のことなど、健聴者とは比較にならない苦勞があるのだ。

父親の隼人も老人性難聴となり、種々苦勞の連続。抗生物質による恵美の難聴とことなり、大したことはないだろうと踏んでいたのだが、年ごとに進行し、今では限りなく聾者に近くなっている。口話や手話ができない分

だけ余計に不便を感じる。

一方、恵美の方はその口話も手話も洗練され、筑波大学では英米語手話の講義を担当している。わずか一こまながら、毎週月曜日に筑波エクспレスで通勤しているようだ。また、難聴者相手に手話を用いて英語を教えるというボランティア活動も引き受けているらしい。いずれも低報酬なので、あまり生活の足しにはならないという。

恵美は明るい性格の上に、周りが努めて明るく振舞うので、困難に襲われても苦しみを決して顔に表さない。そのたび毎に極めて明るく乗り切ってきた。克服した苦しみの体験を記してみよう。

大学卒業を一年後に控えた年、胆嚢周辺に無数の胆石をかかえた激痛に見舞われ、公立病院で十一時間にわたる大手術を受けた。卒業論文執筆中のことだ。性格に似合わず「蒲柳の質」である彼女は、手術に耐えられるかどうか懸念されたが、笑顔をもって「わたし頑張るから大丈夫よ。心配しないで」の一点張り。その精神力た

るや驚くべし。胸部から腹部にいたる一直線三十センチほどの開腹にもかかわらず、執刀後三日にして院内を歩きまわるといふ離れ業を見せた。

結婚後、夫の留学に付き添い、米国ロチェスター市に居住中に妊娠、手術時の執刀医の了承を得た上、現地でも無事長女を出産した。

親子三人で帰国後、当初は夫の実家・港区赤坂に同居二カ月、世田谷・千歳烏山の都営住宅に四カ月ほど住まった。収入に見合わぬ家賃のため、半年後には笹塚の借家に移る。

ここでマンション探しとなるが、恵美の希望だった母親や妹の家に近い市川市内に、義父の知人のついでで王子製紙系新築マンションが見つかる。分不相応の価格ながら、なげなしの預金で前金を支払い、購入に踏み切る。役所・銀行からの借入金も大きく、月賦返済額は苦しいが、将来の収入増を見込むほかに手だてではない。

その収入増だが、夫誠也の昇給だけでは足りない。誠也は仕事柄多くの論文などを書き、一部出版もしている

のに大した収入にならないのが現状である。必然、障害者ながら恵美も働かざるを得ないのだ。

働き口といえば、役所などが主催する聾教育や手話の講習会講師、手話通訳、難聴に関する英語文献の翻訳などである。何れも高収入の見込める仕事ではないが、生活のこともあり、頼まれれば次々に引き受けている。

長女が二歳半になった頃、胆汁が逆流するという現象で、またまた腹痛に襲われた。「総胆管拡張症」という難病で、完治は生涯見込めないという。大手術で世話になった医師の治療を再び受けることとなる。三カ月にわたる入院の後は二カ月ごとの通院で、現在に至るも一応の健康を維持し、その間に次女も無事出産したし、日常生活も以前と変わらない。

入院治療や生活維持については、行政の福祉政策や一般社会の援助を受けている。それにしても、大林恵美の人生を強く支えているものは何だろう。それは、一貫した楽天的とも言える彼女の明るい性格であろう、と父親の隼人は思うのである。

昭和の思い出

中村 爽

昭和から平成に変わったのはついこの間のように思われるのに、早いものでもう二十五年目に入った。しかし、昭和八年に生まれ、これまでの人生の七割もの年月を昭和時代に過ごしてきた私は、平成の今になっても昭和に生きている気持ちから抜け出せず、愛着を持って昔を懐かしんでいる。特に少年時代の戦争と戦後のころの様々な思い出はいつまでも鮮明で、忘れることがない。

幼少のころ、私は東京の芝白金で両親、祖父母と兄との六人家族で穏やかに暮らしていた。昭和十六年、八歳の時に太平洋戦争が始まる。長引くにつれて戦況が悪くなり、内地でも食料や生活物資の不足は深刻で、日常の生活が次第に苦しくなった。優しかった近所のお兄さんやおじさんたちが次々に出征して行くうちに、敵機の空襲が始まり、庭に掘った防空壕にもぐり込む日も増えて

きた。国民学校六年生の夏には児童全員が栃木県の川治に集団疎開をさせられる。親元を離れた心細さもあって、団体生活には随分辛い思いもした。卒業前に帰京はしたが、運悪く東京大空襲に出くわす。あの夜、高台から見た真つ赤に燃え盛る大火災の恐ろしさを、今でもはつきり覚えている。

家族と離れ、親戚を頼って郊外の中学校に入った私は、一学期を終えたところで、ますます激化する空襲を避けて、今度は父の会社の避難先だった宮城県岩出山に疎開する。まるで流転の旅のようだった。そしてそこで、広島、長崎への原爆投下の報道におののくうちに、ついに終戦が告げられた。昭和二十年八月十五日だった。あの暑い夏の日ラジオの玉音放送は雑音が多く、良く聞き取れずに終わった。

東京に戻り、その翌年に一年遅れで中学に入り直すと、驚くほど速く世の中が変わり出していた。占領軍の進駐、極東国際軍事裁判があり、続いて財閥解体、学制改革、そして憲法改定などが実施に向け検討されていた。あのころに吹いてきた自由、民主主義の風は若い中学生にとつ

ては新鮮で心地よく思えた。「言論の自由」の旗の下で、新設の生徒会などでは自由、活発な発言、討議がなされ、学内が活気に満ちていた。その一方で、戦争の傷跡は依然各所に残っていたし、日本全体が貧しい時期だった。学校にも下駄履きで通学する生徒も多く、校内では、はだしが珍しくなかったが、誰もが明るく元気だった。

そして、しばらく後の学制改革で、私の通学していた都立中学は三年制の新制高校となり、下級生のわれわれはそのまま高校の「併設中学校」の生徒となった。やがて高校二年生になった春、男女共学制が取り入れられ、新入生の半数が女子となる。男子生たちにとっては当惑する状況だった。男女平等という言葉を知ったのもこのころで、なにもかも新しい経験だった。

戦争を挟み六十四年に亘った昭和は、波乱万丈の時代だったと思う。それを引き継いだ平成はこれからのような時代になって行くのか。その中で日本はどこに向かっているのか。それほど長くは見ていられないかも知れないが、わが昭和っ子たちは希望を持って平成っ子たちの活躍を期待している。



大仏開眼とヴェトナム

浜田 道雄

企業OBベンクラブの二〇一二年最後の例会は、電気通信大学に留学し、ロボット科学を勉強しているヴェトナム留学生のトゥンさんをお招きして、お話を聞いた。

そこで、トゥンさんは彼の研究するロボット科学の現状を紹介するとともに、十六世紀末から十七世紀はじめにかけてヴェトナムのホイアンにあった日本人町や、そこにいまも残る「日本橋」にふれて、ヴェトナムと日本との交流の長い歴史をも強調された。

私はその話を聞きながら、さらに昔にあった日本とヴェトナムとの交流を思い出していた。それは奈良東大寺の大仏開眼供養会で演奏されたという林邑楽りんゆがくのことである。林邑とは、二世紀ごろから十九世紀はじめまでヴェトナム中部で栄えたチャム人の国、チャンパ王国の中国での呼び名である。

天平十五（西暦七四三）年、聖武天皇は全国総国分寺である東大寺に大仏（盧遮那仏ろしゃなぶつ）像を建立することを発願した。大仏の鑄造は天平十九（七四七）年九月にはじまり、天平勝宝元（七四九）年十月に終了したが、それで完成したのではなく、なお鑄加いくわえや表面の仕上げ、鍍金などの作業が続けられて、最終的に完成したのは宝龜二（七七二）年であったという。

しかし、開眼供養会は、大仏がまだ完成したとはいえない、天平勝宝四（七五二）年に行われた。それは、この年が「日本書記」にいう佛教伝来から数えて二〇〇年目にあたったからだ、といわれている。

「続日本記」はこの日のことを、「夏四月乙酉きのとり、盧遮那佛の像成りて、はじめて開眼す。是の日、東大寺に行幸したまふ。天皇、親ら文武の百官を率いて、設齋大会さざいしたまふ」と述べ、また「仏法東帰してより齋会さざいの儀、未だ嘗て此の如き盛んなるはあらず」と、それが盛会さうかいであったことを記している。

この日、聖武太上天皇、孝謙天皇、光明皇后は文武百官を率いて東大寺に行幸した。供養会は、太上天皇はじ

め随行した五位以上の貴族は礼服を、それ以下の官人は朝服を着て、鑄造なつた大仏の前に並ぶなか（大仏殿の建築はまだはじまつていなかった）ではじめられ、開眼導師である菩提僊那が筆を執り、仏の眼に墨を入れた。その筆には沢山の縄が結び付けられて、すべての参列者がその先を握り、ともに開眼に参加したという。

その後、導師と読師の法華経講が続き、ついで舞樂が奉納された。このとき林邑樂が和樂、唐樂、高麗樂とともに奏されたという。これらの舞樂は雅樂のレパートリーとして、宮内庁の雅樂部に今日まで傳承されている。

チャンパの舞樂である林邑樂は、いつ、誰が、どのようにしてわが国に伝えたのか。その答は意外に容易である。

開眼導師を務めた菩提僊那は、婆羅門僧正とも呼ばれるようにインドの婆羅門として生まれ、仏教、特に密教を学んだあと唐にわたり、天平八（七三六）年、唐僧道璿とともに来日して、奈良の大安寺に住したが、この菩提僊那の弟子で、ともに来日した僧にチャンパ生まれの仏哲がいた。

仏哲はチャンパ王国のフエに生まれ、インドに渡って

菩提僊那のもとで密教を学び、やがて師に従って唐、日本へと渡ってきた。彼もまた大安寺に住して、そこで朝廷の樂人に「菩薩」、「拔頭」などの林邑樂と舞を教えたという。大仏開眼会で演奏された林邑樂も、この仏哲が樂人に伝えたものの一部であつたのだろう。

彼の生まれたチャンパ王国は十九世紀はじめまで存続したが、その後ヴェトナムに滅ぼされた。チャム人は十三世紀頃イスラームに改宗して、今では少数民族としてヴェトナム中部に住んでいる。

もう一つ、天平時代にあつた日本とヴェトナムにかかわるエピソードをあげておこう。

百人一首の歌人としても知られる阿倍仲麻呂は、遣唐留学生として唐に渡り、学業終了後帰国を試みるが、嵐に阻まれて果たせず、唐朝に仕官して、ついにその地で亡くなったが、彼の最後の官歴は安南節度使であつた。

彼が長官として務めた安南節度府は日南郡に置かれていたが、その地は今日のハノイまたはフエに比定されている。

母の万歳！

新井 良侑

八年前、元気に過ごしていた母が九十三才で脳内出血を起こし入院した。右半身に麻痺が残ったが、頭は惚けることがなかった。幸いにも三カ月ほどで退院し、自宅近くの老人介護施設に入所した。

平穩に三年ほど過ぎたある日、母が朝食中に意識を失い、市民病院に緊急搬送した、と自宅に連絡が入った。病院に駆けつけると、心電図、血圧、脈をモニターする機械がセットされたベッドの上で静かに寝息を立てていた。

お昼過ぎに、何気なく心電図のモニターを見ると波形がない。「あれ、故障かな」と思った瞬間、主治医が二人の看護師を連れて飛び込んできた。母がすやすや眠っていたので、不思議そうな顔で慌てて出ていった。

その晩が山場というので、私が徹夜で付き添うことにした。十一時頃まで特に変わった様子が出なかった。

そろそろ仮眠を取ろうかなと思いい、しばらくモニターを見ていた。

急に、脈拍表示が0、心電図の波形が消えた。「あつ！臨終か」と思ったが、母を見ると変わりなく寝ていたので、少し様子を見た。三分ほどで、脈も心電図も正常に戻った。横になることもできず、寝ずに番をすることにした。十二時過ぎに、また脈拍表示が0、心電図の波形も消えたが、また三分ほどで正常に戻った。それから、ほぼ一時間毎にこのような状態が繰り返された。朝方になると、起こる間隔が三十分間ほどに、また波形が消えている時間も十分を越えるほどになっていた。

早朝に家族の者と交替し、自宅に戻って横になった。九時頃、電話の音で起こされた。「心臓にペースメーカーを入れるかどうかを親族で相談して欲しいと主治医から言われた。ここではペースメーカーが入られないので、転院が必要」という内容だった。もう高齢だし、本人も延命治療を望んでいないことが分っていたので、ここでできる限りのことをしてもらうことにした。

昼頃に、遠隔地にいる兄夫婦も到着したが、母が讒言

を言い出したのに驚いた様子で、私と家人に母のそばで祈ってくれと任し、病室を出て行ってしまった。二人で祈りながら見守っていると、不思議なことにその後は脈拍も心電図も正常なまま、母の様子も変わりがなかった。

午後二時頃、眠ったままの母が急に大声でしゃべり出した。「ああ、いい人生だったな。最高の人生だった。

満足だ。これから、わしはみんなの所に行くんだから、誰も引き留めないでくれ。いいか、邪魔をするなよ、分かったか。いい人生だった。満足、大満足」と言っただけで、「万歳！万歳！万歳！」と、麻痺して動かなかったはずの右手も挙げて、万歳を三唱した後に深い眠りに落ちた。一時間ほどして意識が戻り、目を覚まして、「あれ、ここはどこだ」と周りを見回した。「ここは市民病院だよ。昨日の朝、食事中に意識を失い、緊急入院をしたんだよ。覚えてない？」と聞くと、「分からぬ」と母。どうも、気を失ったからの記憶が一切ないようだった。

主治医に母親の状況を報告すると、いぶかしそうな顔をしてベッドのそばに飛んできた。主治医が母に話しかけると、母ははっきりと応じた。主治医は本当に驚いた

ように、「奇蹟だね。信じられないな、何も特別な処置はしなかったのに。ペースメーカーを入れなくて良かったね。あなたたちは賭けに勝ちましたね」と言って、うれしそうに病室を出て行かれた。

母は一週間ほどで元気になり、介護施設に戻ることができた。施設で、「これまで東の方（病院）に向かって救急車で運ばれた人で、西に向かって帰ってきた初めての人だ」と評判になった。施設関係者も、これが最後だと思つて、市立病院に搬送しようだ。

それから二年ほど平穏な日々を過ごし、周りの人たちに「ありがとう」と言いながら、九十八年の波乱の生涯を閉じた。明治に生まれ、大正、昭和と激動の時代を爾々と生き、平成の世まで生きた母は、自然の中で多くを学び、多くの人と出会い、そして働き抜いた人生だった。

「人を見て、法を説け」という母の口癖を思い出すたびに、「愚かな者にその愚かさにしたがって答えをするな、自分も彼と同じようにならないためだ」（箴言二六章四節）が心に語られる。母は、いわゆる学知はなかったが、智慧に満ちあふれた人生の達人であった。

米長邦雄前名人から頂いた金星の話

鵜飼 直哉

将棋の米長邦雄永世棋聖が亡くなられた。昨年（二〇一二年）の暮、十二月十八日のことだ。

テレビのニュースで知った。日本将棋連盟会長として将棋界のスポークスマンであった米長先生は、二〇〇四年の園遊会で天皇陛下に国旗国歌問題をもち込んだのが国会で取り上げられたり、「三人の兄貴はみんな頭が悪いから東大に行った。俺は頭が良いから将棋指しになった」などの名言を残したりして、話題が多い。

二〇一二年一月、自らコンピュータ将棋に挑戦して負かされ、「コンピュータがついにプロ棋士を負かした」として新聞でも話題になった。この経緯は先生の遺作「われ破れたり」に判りやすく書いてある。だから将棋を全く知らなくても米長先生のことなら知っている人は多い。

米長先生は一九九三年、第五十一期名人戦で、念願の

名人位を獲得された。「五十歳名人」は史上最年長記録だ。三十歳台の若手棋士が活躍する将棋の世界で、この記録が破られる可能性は低い。文字通り「中年の星」である。先生が名人位に就いて一年後、若手のホープ羽生善治四冠（当時・以下同）に名人位をあげわたした。

自慢話になるが、私は米長先生から二枚落ち（注）指導対局で大金星を頂いた。私にとって忘れることのできない一局である。

富士通明石工場将棋部の機関紙『棋の趣』一九九五年六月号に「米長前名人から頂いた金星」と題して一文を掲載した。

「一九九五年五月四日

この日は興奮と感激の日であった。将棋を趣味にしてから四年間で最良の日であった。米長前名人から二枚落ちで勝ち星を頂いたのだ。女流プロとは通算十局の対戦経験があるが、やはり憧れはトップクラスの棋士である。その機会が、しかも米長前名人に直接指導して頂くことになろうとは思ってもいなかった」

との書き出しで、以下三ページの得意満面の報告がある。

「場所は赤坂プリンスホテル。そこで羽生善治名人に森下八段が挑戦する第五十三期名人戦第三局の大盤解説会があり、プロの先生方による指導対局があると聞いて出かけた。会場で待つっていると、突然名前を呼ばれた。貰った対局カードには、指導棋士・米長邦雄と書いてある。心臓がドキンとする。目の前におられるのが前名人の米長先生だ」

この先、勝った経過を实况中継風に綴っている。

この自慢話には、まだ続きがある。

金星の棋譜を自分で再現し、ひとり悦に入る。

そこで図々しく先生にサインをお願いした。なんと「恐れ入りました 米長邦雄」と書いて頂いた。

これ以上の宝物はない。有頂天の時計はここで止まった。だから、私には先生は「前名人」であって、「元名人」でも「旧名人」でもない。

本稿、「米長邦雄先生を悼む」として書き始めたが、自慢話で一杯になってしまったので題名を変更した。

「さわやか流」と言われた米長先生のことだから、お許し頂けるものと思う。

改めて米長前名人のご冥福をお祈りする。

注 上手が飛車と角を落としたハンデイキャップ戦

恐れ入りました

米長邦雄

二枚流し指碁対局 (上手) 米長邦雄前名人、(下手) 藤原義典
(日時：1995年5月4日、場所：赤坂プリンスホテル)

【初手から図1まで】
 ○5二歩、○7六歩、○5四歩、▲4六歩、○5三歩、▲4五歩、○6二飛、○6六歩、○3二飛、▲3五歩、○5二歩、▲4八飛、○6四歩、▲4七飛、○2二飛、▲3八飛、○7四歩、▲3五歩、○9四歩、▲4五歩、○2三歩、▲3六飛、○7三歩、▲7六歩、▲4三飛、▲6八歩、○8五歩、▲6八飛、○9四歩、▲4六飛、○9四歩、▲5二歩、○4三歩、▲9九歩、○7五歩、▲同歩、○同飛、▲9六歩、○8五歩、▲3七飛、○1二歩、▲3五飛、○3一飛、▲3四歩

【図1から図2まで】
 ○5六歩、▲同歩、○3四歩、▲7六飛、○4二飛五、▲6七飛、○8六歩、▲同歩、○3二飛、▲2五歩

【図2から図3まで】
 ○4四歩、▲7六歩、○7四歩、▲5五飛、○4二飛五、▲4四歩、○同飛、▲4五歩、○5三飛引、▲6五歩、○3三歩、▲同飛、○同飛、▲同歩、▲7五飛、○5二歩、▲3五歩、○同歩、▲同飛、○7七歩

【図3から図4まで】
 ▲2五飛、○同飛、▲同歩、○4二歩、▲3四歩、○2二飛、▲4四歩、○5一飛、▲4六飛、○4三歩、▲同飛、○7七歩

【図4から図5 (図7) まで】
 ▲5三歩、○同飛、▲4三歩引、○同飛、▲4四飛、○8二歩、▲6三歩、○7一歩、▲5三飛引、○4五飛、▲6七二歩、○7一歩、▲7二歩、○3二歩、▲7四飛引

【図5から図6まで】
 ▲5三歩、▲同飛

さて七月参議院選挙 国民の選択やいかに

大越 浩平

四年前、オバマのチェンジ風が日本にも届いたのか、民主党の鳩山氏は衆院選で自民党を破った。戦後初の大きな政権交代だ。しかし昨年末、民主党は衆院選で大敗し、自民党安倍氏に政権を渡した。この四年を振り返る。

初めて沖縄を訪れた人は、美ら海ちゅらうみに感動し、片や、操縦士が見える程の低さで飛ぶ飛行機とヘリの轟音、そして基地に囲まれる居住環境に驚く。沖縄の島々は先の戦争最後の地上の激戦地だ。女性や子供達、多数の民間人が自決した。至る所の悲惨な戦跡に、戦争の愚かさを再認識する。ヤマトンチュ（本土人）は、ウチナンチュ（琉球人）と沖縄に、戦中戦後と過大な負担をかけ続けている事に負い目を感じる。いや感じなければいけない。

民主党鳩山総理は、普天間基地移設に「少なくとも県外移設」を打ち出した。ウチナンチュもヤマトンチュも期待した。「腹案」が漏れるや否や猛反対が起こり、結局、

実行は不可能で内閣は潰れた。沖縄の基地負担軽減策はヤマトンチュに拒まれた。もはやウチナンチュはヤマトンチュの言いなりにはならないだろう。鳩山内閣では事業仕分けが目された。一旦ついた事業予算を、国民の視点によって見直す試みは評価できる。だが、「廃止や見直し」した事業は安倍政権になり次々に復活した。

菅氏に総理の座が回った。党内事情だ。小泉政権の米国追従、竹中規制緩和で、非正規雇用、派遣労働者が増え、「年越し派遣村」が生まれた。菅氏は、村長だった湯浅誠氏を内閣府参与に任命し、貧困問題に取り組ませる。

菅氏は参院選で財政再建を優先し、唐突に消費税の増税を打ち出して惨敗。ねじれ国会となり、混迷した。

中国は国民の内政不満を覇権主義に転化し、尖閣周辺の日本領海で漁船が故意に巡視艇にぶつかる。自民党はその対応を「弱腰外交」と徹底的に非難した。党内では小沢シンパの菅降ろしが激化し、政権が危機に陥る。

三月十一日東日本大震災が発生した。地震、津波による広範囲な被災と、加えて深刻な東電福島第一原発の水素爆発、原子炉溶融（メルトダウン）。放射能汚染に日

本中が怯えた。現場の危機的状況は極限に達していたが、その情報は東電の隠蔽体質が働き、官邸にはスムーズに伝わらなかった。東電社長は原発作業員の退避を政府に伝えた。原発放棄だ。首相、経産大臣、官房長官は、東電が現場から全面撤退すると認識した。菅氏は東電に乗り込み、「撤退した時には、東電は百パーセント潰れます」と激怒した。五月六日、菅氏は中部電力に浜岡原発の全面停止を要請した。その時から、脱原発、発送電分離に踏み込まれるのを嫌った原発推進派による、菅氏への攻撃は激しさを増す。経団連の米倉会長は菅氏を辞めさせようと繰り返し発言し、新聞をはじめとするマスコミは「辞めろ、辞めろ」と躍起になっていた。それは殆んど感情的な罵声だった。原発事故説明過程で、国民に知らされない意図的な原発推進施策が次々に発覚した。電力会社、経産省、原子力村、地方自治体等のやらせや不都合な事実の隠蔽、偏向報道等、政産官学一体の原発推進政策が明らかになる。菅氏は脱原発路線を敷いて退陣。

野田総理が誕生する。野田氏は大飯原発の再稼働を認め、TPP参加、財政再建、税と社会保障の一体改革の

推進と消費税引き上げ、そして普天間基地の辺野古移転を打ち出す。原発事故説明には積極的ではなかった。

鳩山氏は所信表明演説で「いのちを守る政治」を訴え、菅氏は就任記者会見で「最小不幸の社会」を作ると言った。野田氏に民主党らしい言葉は無く、自民党がしたくて出来なかった政策を進めているようにも見えた。

復興予算は三党合意で、被災地対策から全国対策に拡大。財務省と族議員の利権に化ける。野田氏は衆院選で惨敗、安倍総理が誕生。安倍氏は借金（国債）を五十二兆円に増やし、「財政再建」より「成長重視」を掲げた。

消費税増税のため「名目三％、実質二％」の経済成長を確保すべく、景気にすぐ効く公共事業のばらまき利権政治に針を戻し、原発推進路線に舵を切り、憲法改正、自衛隊を国防軍に変えるという。これから参院選迄は本音を封印するだろう。増税前の駆け込み需要後にやってくる消費停滞、追い討ちをかける消費増税、不況とインフレ、家計と財政破綻が見える。被曝労働者、放射性廃棄物、借金は増え続ける。全部が次世代への付け回しだ。

さて七月の参議院選挙、国民の選択やいかに。

国民健康保険制度の赤字

玉山 和夫

日本国の財政は大赤字で、このままで行けばギリシヤのような羽目におちいるのではないかと懸念される。

そのため、赤字のもとになっている制度を改革して財政の立て直しをはかる必要がある。その赤字の原因の一つが健康保険である。

医学が進歩して新しい費用のかかる治療法が次々と開発されているのに、保険ですべてを賄おうとすれば赤字が増えるのは当然で、今の制度では赤字解消は望めない。それに今の制度は無駄を誘発している。

ところが英国の健康保険では、医者にかかってもお金を払う必要がなく、しかも個人が払う保険料は日本より安いのに、保険財政は赤字ではない。これは何故かというところ、英国の医者は「健康保険制度が赤字になり維持できなくなれば国民が困るから、なるべく費用のかからない方法で治療するように努めている」からである。

ところが、日本では個人が多額の保険料を取られている上に、医者に行くたびに三割か一割の一部負担金を払わなければならないので、大違いである。

なぜこのような差があるかというと、日本では出来高払い制度なので、多くの医者が高価な薬を処方するからである。というのは、製薬会社が莫大な人件費を払って医薬情報提供者と称する多数のセールスマンを雇い、医者を訪問させ利益率の高い高価な新薬を処方するように、あの手この手を使わせているからである。多くの患者は単価の安い在来薬でも治るのに、医者にとって高い薬を使った方が無難に治療できるし、製薬会社からいろいろなサービスを受けられるという利点もある。

日本の大病院には大きい製薬会社なら五人以上のセールスマンが常駐して医者を絶えず訪問しており、その総数は英国の二〇倍以上といわれている。

そこで、英国に少し近づける健康保険制度の改革案を考えてみた。

まず被保険者は、月一回は医者の診察をただで受けられるようにする。医者には保険から診察料として三千元

から六千円が支払われる。二回目からは医者がきめる診察料を自費で払う。

月一回は無料なので、気軽に医者に行けるから、病気の早期発見につながり、医療費の削減になりうる。

医者での処置料、検査費用と薬代などは診察料と合わせて月に六千円を限度として無料とする。それを超過する分は全額個人負担とする。

かなり多くの病気は一日分百円の薬代で治療できるので、これは厳しい条件ではない。

毎月の治療代が入院手術などで高額になる時は、現在の制度にあるように、収入によりたとえば月五万円を超える分の五%のみを自己負担とする。その上毎月の診察料を使わなかった分はためておき、こういう時に使えるようにする。

この制度は歯科も含めて適用する。

保険証は個人別のカードとし、記録は中央にクラウドする。医師は面倒な診療報酬請求業務をしなくてすむ。

この試案では保険診療は月六千円を超えないので、保険財政の赤字は避けられるし、国民はただで月一回診察

を受けられるのが利点であり、大多数の人は今までより医療費の負担が減る。

この試案は今までの保険診療にくらべれば不自由な点もあるが、アメリカで多くの人が加入している民間業者の保険でも色々と制限がある。日本の保険でも色々と制限があり、自由な診療ではない。例えば多くの感染症の治療には初回に抗生物質を多量に使うと早く治るのに、保険では限定された量の投与しか出来ない。

しかも保険でまだ認められていない新薬や処置手術を使おうとすると、「混合診療の禁止」というすべての治療に保険が適用されない規則があり、患者は入院代や全部の医療費を自費で払わなければならない。それでは患者の負担が増えて困るので、もっと良い薬や処置法があるのが判っているのに、保険制度のために使えず、治療がみすみす長引くこともある。

この試案では、医師は患者の負担を考えて高価薬の使用をひかえるなどで製薬会社の利益が大幅に減る。各社は厚労省から天下りした役員を大動員して反対するので、強い政治力がなければ実現できないものである。

エジプト旅行顛末記

中村 晃也

「エジプトが一番印象的だな。ただ行程がハードだから、体力に自信のあるうちに行つたほうがいいよ」とツアーで知り合つた知人のアドバイスに、その気になつた。

韓国航空の格安の十日間のツアーでは、成田から仁川、ドバイ経由でカイロまで、乗り換えの休憩をはさんで実質十八時間のフライトである。韓国航空も馬鹿にしたものではない。乗務員も綺麗だし、トーパンジャン入りのビビンバ機内食は美味かつた（平成十八年当時）。

カイロの一般家屋は、日干し煉瓦を積んだ外壁と、棟木に枯れ草を乗せただけの屋根からなる。年間降雨量は三ミリだからそれで十分だが、埃と排気ガスのため滞在三日で咽喉が痛くなる。街中のビルは黒ずみ、衣服は薄汚れていて、読んで字の如く「埃及」と呼ばれる所以だ。

カイロから郊外に出ると、ナイル川の両岸に沿つて狭い緑地が続き、ラクダやロバが放牧されている。その外

縁は果てしない砂漠で、そこには未だ三百以上の未調査の遺跡が埋まっているという。

ルクソールでは、当時の貴族の墓の上にバラックを建て、床下から盗掘した埋蔵品で生計を立てる者が多いとかで、問題を重視した政府は彼らを強制移住させたが、新たに失業問題が発生して困っているようだ。

ハトシエプト葬祭殿で機関銃の乱射事件があつて以来、警戒は嚴格で、カイロの市内の交差点は常時三名の警官が詰め、空港は勿論、観光客用のホテルやレストラの入り口には漏れなく金属探知機が設置されている。

観光地間の移動は単独では出来ない。毎朝各ホテルからのバスが集結し、そこでコンボイ（護送船団）を組む。車列の前後に配備された、マシンガンを装備したパトカーに守られながら移動する。道中のサービスエリアはバリケードで囲まれ、目立たぬところにトーチカが配置され、機関銃の銃口が見える。

旅行の楽しみのひとつに現地料理があるが、イスラム教国なので豚肉はなく、牛肉はあるにはあるが、硬く筋張っている。専ら鶏肉料理が主体である。ナイル川の魚

は大味で味付けもなにもあったものではない。美味だったのは柔らかく調理した野鳩料理。果物はスイカ、ウリなどがあるが、味は日本ものに数段劣る。初めて食べたナツメヤシは、里芋のような食感だ。

ある日、「今日の夕食はホテルではなく町に出て焼き鳥屋での食事です」との添乗員のアナウンスに、全員が「エジプトに来て焼き鳥で一杯か」と大いに期待した。

薄味の野菜スープの次にお目当ての焼き鳥が出てきた。日本式の串刺しのそれかと思いきや、内臓を抜いた鶏の丸ごと一羽分を、両手の甲を揃えた形に平らに叩いて、二本の金串に刺して炙ったものがそれであった。

生憎その店はアルコール類の販売はしないので、水を飲みながら焼き鳥を食う情けない事態となった。

「ナンダコレハー」という怒声に、ウエイターはタイミング良く主食のナンをテーブルに配った。「これがナンだ」と言わんばかりに。

エジプトでの典型的な飲み物は紅茶である。といって砂糖をいれた容器に数滴の紅茶を垂らすといった案配で、全国民の十パーセントが糖尿病のお国柄である。

ダムで有名なアスワンでは、アガサクリステイが「ナイル殺人事件」を執筆したというカタラクト（急流の意）ホテルに泊まった。このホテルのバーでスコッチを舐めながら、ナイルに沈む夕日を眺める気分は最高だ。エジプト奥地のナイル川畔の景勝の地に、豪華なホテルを建てたイギリス人の感覚は流石だと感心した。

エジプト人は非常に親日的で子供は勿論、一般人も軍人も我々のバスに手を振り、積極的に話しかけてくる。

観光地の土産屋を通りかかると「コンニチワ」「ヤマモトヤマ」「ドウデッカ」「ボチボチデンナ」と知っている限りの日本語を連発する。何も買わずに店を出る際にも、「サラバジャ」と言われ、苦笑を禁じえなかった。

砂漠があつたから遺跡が残った。砂漠があるから工業が育たない。所詮この国は観光でしか生き残る方法がないのか？

せめてもの記念にとサハラ砂漠の砂を一握り持ち帰り、仏壇の香炉の灰代わりに使っている。ご先祖様はどう思うか知らないが、我が家の仏壇はどこよりも国際的だと自負している。

雪の京都

保坂 令子

年に一度、春か秋に京都から奈良へと旅をし、歴史の重みや仏達との出会いを楽しみに訪ねていた。冬の寒さに戸惑いがあったが、節分会に合わせて二月一日より三日にかけて、妹と京都に行った。

蒼天に映える冠雪の富士を新幹線の車窓から眺め、その美しい姿に感動する。

米原あたりから雲行き怪しくなり、京都駅に着くと雪が吹雪いているのにびっくり！

ひと先ず二泊お世話になる都ホテルに旅装を解く。小降りになるのを待って、予定通りに父母の永代供養をしてある東本願寺に参詣し、その足で京都駅に。予約しておいた祇園の懐石料理に、舞妓さんの踊り、花魁の華やぐ情緒に浸る。

二日目から雪の幽玄な古都の寺巡りをする。雪の京都は始めて訪れたが、どこの寺も観光客が少なく、ひっそ

りと私達を迎えてくれ、夢のような寺巡りが出来、幸せいっぱい感謝する旅となった。

新幹線にて

二月富士車窓の視野を展げゆく
天の雪舞ふ夢の古都姉妹旅

東本願寺

ちちははを祀る墓雪の本願寺

祇園にて

雪はたる舞へば祇園の灯がもえて
梅にも春踊る舞妓の白き指

南禅寺

京訛やさしくひびく冬の寺
山門に凭れし木々や雪の華

仏塔の風鐸鳴らす凍る風
襖絵の虎飛び出んと寒の寺

高台寺

贅つくすねねの夢とも寺は雪
高台寺ねねを偲びし浄め雪

八坂神社

芸妓まく福豆ひろふ人となり

永観堂

音絶えし雪の寺苑に息をのむ
悲田梅やみ仏の過去纏ひおり
愛しさのみかえり阿弥陀雪明り
立春や秘仏を拝し豊かなり

詩仙堂

細雪幻の夢堂の庭
春動く音とも響くししおどし

壬生寺

奉納の鬼の鈴なる節分会

知恩院

雪やみて堂の静寂に燭ゆらぐ
暮れぎわの念仏松に雪の花



カーナビ

廣澤 重穂

昨年夏、鳥海山の麓に暮らす知人宅で夏休みを過ごすこととなり、女性一人を含む我々三人は車で出掛けた。なお、女性が一緒とはいえ、艶っぽい話は出てこない。

出発直前、友人が運転席に座るや、何の迷いもなくカーナビに手を伸ばした。「えーと、行き先は山形の遊佐町と——」、そう呟きながらボタンをピピッと押すと、走行ルートがパパッと表示された。表示スピードといい、画面の綺麗さといい、その格段の進歩に驚くばかりだ。最近ではお店を探したり、渋滞を避けて道案内してくれるものもあるという。

そんなカーナビに導かれ、我々は出発したのであった。首都高速を抜けて東北自動車道に入り、やがて栃木を過ぎる頃、後部座席から声がかかる。

「途中、福島を通るんでしょう？ せっかくだから猪苗代湖で遊覧船に乗って行きましょよよ」

彼女の思考は、福島といえば猪苗代湖らしい。

「少し距離があるけど、時間は大丈夫か？」

「でも、近くなんでしょう」

「ちょっと微妙な距離だな」

運転手の友人は曖昧な返事をするが、無駄な寄り道はしたくない。かといって、杓子定規なドライブも芸がない。地図帳があればそれを見せて、その距離の微妙さを加減を説明できるのだが……。

結局、男たちは強く反論もできず、彼女の提案に押し切られる格好になってしまった。

郡山インターで降りる。むろんカーナビは叫ぶ。

「ルートを外れました、ルートを外れました」

運転手の友人は会津街道に入るとすぐさま路肩に停車し、ナビの目的地を変更する。

徐々に猪苗代湖が近づいてきた。

やがて一般道がやたらと交差し、左折や右折が多くなる。しかしナビ画面は矢印を上にしたまま、地図をぐるぐる回転して的確に進行方向を示している。

昔は助手席の人間が地図帳を回しながらナビゲーショ

ンしたものだ、などと思ひ出す。

と、右手前方にチラッと湖が見えてきた。

「あれ？ 猪苗代湖は左じゃなかったっけ」

私は思わず呟いてしまった。

確認のためにナビ画面を見ると、前方右手に湖がある。

何度か左折と右折を繰り返して、たまたまそのとき、車の方向が南西を向いていたからだ。

地図帳をイメージしていた私は自分の誤解を認めつつも、何かしらカーナビに居心地の悪さを感じた。

「カーナビって物足りない気分にならないか？」

その気持ちを運転手の友人にぶつけてみる。

「別に——」

「地図帳なら見比べて、左側に猪苗代湖が、右側に磐梯山が見えるはず、とイメージできる。そして自分の判断が正しければ、ホラやっぱり、って」

「そんな必要ないだろ。ちゃんと向かってるんだから」
「地図を見て自分の位置はどこか、距離はあとどのくらいかわかれば、安心できるだろう」

「そんなこと、考える必要はないとちゃうか」

「だが他にルートが、なんて思うことはないのか？」

「別に——」

なんだ、その器械に頼り切った態度は。世界の中心で愛を叫ぶカップルみたいに、自分中心のナビに自分を託しているのか、などとひとり苦笑いをする。

やがて、何の問題もなく猪苗代湖の遊覧船乗り場に到着した。そして小一時間ほどの船の揺れを楽しむと、ふたたび山形へと向かって出発する。

むろんカーナビをセットし直す。と、画面に磐越自動車道経由のルートが表示された。

「あちゃー、これを使っていればもう少し早かったな」
もちろん「地図帳を見ればいけば」などとは言わない。

ただ黙したまま、今度は私が運転席に、女友達が助手席に座る。それにしてもカーナビは便利だ。方向音痴の彼女が隣りに座っても、怖れる必要はない。

その後、我々は何のトラブルもなく山形の遊佐町に到着することができた。しかし時刻は星空がきれいな真夜中。待ちくたびれた知人はすでに酔い潰れていた。

もし地図帳があれば寄り道はしなかった……？

大阪日記

新田 由紀子

ビルの上の観覧車 肥後橋のホテルを出て中之島を渡る。と一帯は堂島・北新地。大通りを右へ入り歓楽街を抜けて大阪梅田の駅前に入る。HEP FIVEとかいうビルの屋上から観覧車に乗り込んだ。幅広いベルトコンベアをたぐるように遠くが見えてくる。山は生駒いこまと六甲。大阪湾にそそぐ淀川とその支流。目を凝らすと、大阪城はビルと高速道路の間で鬼の置物のように見えた。

J R環状線 大阪駅二番線を出た外回り線は十六の駅に止まって四十分で一周する。一区間切符で出ようとしたらアラームが鳴った。一周三三〇円と言う。大人しく払って改札口を出ると、人だかりのスタンドで名物ミックスジュースを飲んでホテルへ帰った。

鞆公園 朝早く園内を散歩。ビルに囲まれて東西に長い緑地の前身は飛行場。江戸期は海産物市場、古代の難波潟なみわがた。せせらぎがバラ園を巡って中央の噴水に注ぐ。

遊歩道やベンチで人と犬と猫と鳩たちが憩うひととき。何気ない時間が人の心に潤いを積んでいく。

磐船神社いわふね 本町から乗った中央線は、けいはんな線となつて県境の生駒山地を長いトンネルで抜ける。生駒駅発奈良バス終点北田原下車。生駒山系北端の山あいの村。空模様が怪しい。黒い雲が動いて一陣の風と共に粗い雪を吹き付ける。物部ものべ氏の天孫降臨の地には空さえ演出過剰だ。天の磐船の残骸は苔むして重畳累々。今日の岩窟巡りはナシと言われて意気消沈。そそくさと岩や瀧や蛇しめなわや注連縄しめなわに手を合わせて引き返す。

大阪天満宮と天神橋商店街 生駒駅から遠回りして王寺經由JR大和路快速乗り替え天王寺駅へ帰阪。堺筋線で南森町下車。寄席や飲食店に囲まれたなにわの天満さんを表敬参拝して日本一長い商店街へ。スーパーまるごとぶちまけたアーケードにあれもこれもと目がクラクラ。古書店に逃げ込んでモードを切り替え、天神橋六丁目駅まで2kmを歩き通して、熱爛におでんのごほうび。

弘川寺 心齋橋のホテルに移動後、阿倍野橋駅から南大阪線で富田林とみだやし駅へ。金剛バス終点河内下車。葛城山麓かつらぎのふもと

の村外れに西行法師終焉の寺を訪ねる。歌碑を辿って裏山に登ると桜木の間に庵跡。鳥がさえずる。穏やかな陽を浴びて南河内の家並みの向こうに堺の海が光る。ここにまた立つときがあるだろうか。『年たけてまた越ゆべしと思いきや命なりけり小夜の中山』(西行)

道明寺と天皇陵 沿線に小高い森がいくつも見えたのは古墳に違いない。帰路を土師ノ里駅で下車。住宅街を行くと梅香る道明寺天満宮、その隣に清らかな道明寺。いくつかの小さな古墳を過ぎると巨大な森に突き当たった。応神天皇陵・宮内庁。柵を越えて歩いてみたいが入れない。薄暮の空に鳴き騒ぐカラスまでが大きすぎる。

信貴山朝護孫子寺 難波駅から近鉄大阪線で信貴山口駅へ。ケーブルとバスで山門下車。標高四〇〇mを超えてピリリと冷たい。朱塗りの橋を渡ると、赤や紫の幟をたなびかせて堂宇が上へ続く。スピーカーの読経が山腹にこだまする。極彩色の大福寅、世界一の大地蔵、毘沙門天のお使いの大ムカデ。見なきゃ良かったと頂上目指して三十分。大和三山を望んで大満足。帰路は奈良県側信貴山下駅へ出てJR大和路韋駄天快速で天王寺へ。

生駒越え 再び生駒駅。ケーブルで宝山寺へ。奥の院への階段をそれて山道に入る。登るにつれて雪が現れ、標高六四二mの山頂はあつけらかんと白い園地の中。凍結した階段を大阪側に下る。今日のハイライト、石畳の辻子谷道はひっそりと山門を構える興法寺へ。急勾配の道に祠や辻堂や石仏が並んで里へ導く。

石切劔箭神社 急斜面に人家が増えて足元に東大阪市街が広がる。近鉄線の線路をくぐって参道商店街へ。ご利益蕎麦に大福に門前煎餅、運勢判断に手相鑑定。いきなり大賑わいの人の波。歴史の山越えも興をそがれて新石切駅から市内に戻り、たこ焼きを買って帰った。

大阪港と天保山大観覧車 十時にホテルをチェックアウト。心斎橋・井池・船場街を本町まで。中央線で大阪駅下車。『日本一低い山・天保山四・五m』をひやかしてから目前に立ちはだかる大観覧車へ。高さ二二・五m。梅田より少し大きい。海のへりから山ぎわまで商都大阪が眼下に脈動する。たれ込めた雲にまぎれて淡路島と明石海峡大橋は見えない。おそろおそろ席を動いて東を望むと四〇〇kmのはてに首都の片隅の家が浮かぶ。

医者よ、なぜ黙っている

新山 章一郎

去年の六月、脊柱管狭窄症なるものにかかった。ある朝、起きようとしたら突然激しい痛みが背中から腰に。八十二年の生涯でかつて経験したことのない激痛に体がどうしても動かない。ベッド上に起き上がろうとしても、体幹はもちろん腕も脚も、一ミリでも動かそうとすると、筋肉が骨から引き剥がされるような凄まじい痛みが背骨に走る。ベッドから離れるまでに「ウンウン」と呻吟すること小一時間、動物のナマケモノのような仕事で、ようやくへっぴり腰で一步を踏み出すことができた。

早速医者へ。先生、なにか机の上の書類を見ながら顔も上げずに僕の話聞く。僕を見もしなければ質問もしない。こつちもいろいろと訴えたいのだが、この態度では話す意欲をそがれて黙ってしまふ。先生、やおら傍らの診察台上がれと手で指示する。「横になつたら起き

るのに三十分はかかりますよ」と言っても表情一つ変えるでもなく、黙って指先で診察台へと促す。

診察台で型どおりの診察を終えて起きるのが大変。ウンウン言いながら起きようとするがダメ。看護師が「随分痛そうですね」と手を貸そうとした時、先生いきなり電動の診察台のスイッチを押すから、上半分がぐつとせり上つた。一ミリ動かすのも大変なのに、いきなり十センチも上げるから正に絶叫モノ。「チクシヨウ。なぜそんな乱暴なことをする！ 見ててわかんないのか」と見ると、先生はすでに向うをむいてカルテに何か書き込んでいる。その背中が「問答無用」とすべての会話を拒否。レントゲンを撮るときも、技師が撮影台に寝ろという。「診察室で起きるのに大変でした」と文句を言っていると、その時初めて「あ。その患者さん、立位でお願いします」と看護師が飛んできた。その後、僕の顔も見ないで「脊椎の12番が潰れて変形している。痛み止めをだしておきます」と簡単に一言のたまっただけ。その間、会話調の話は全くなし。取り付く島もないとはこのこと。

患者は現実の症状のほか、何でそんなことになったのか、これからどんなことが起きるのか、どうすればよいのかなど、色々なことを知りたがっている。さらに、あれこれと取り越し苦労をしたりして、医師からすれば実にくだらないことをよくよと悩んでいることが多い。

そんなことを質問すると医師はまず無視する。くだらないことを聞くな、素人のたわごとにつき合ってはられないという感じで、軽蔑の薄ら笑いすら浮かべる。普通、誰かが何かを尋ねた時、返事をしないなんて考えられない。彼らはなぜそんな社会の基本ルールすら守らないのだろうか。少なくとも患者にはそう取れるような態度だ。

無視の次は最小限の情報しか与えないということだ。患者が聞かなければ彼らは言わない。念のため、なんてめったに言わない。僕の場合はそれから約半年間、痛みが、腰、背中、脚、腕、足裏などと移動し、便秘などもおきて、その度にどうしてかと思ひ悩み、他人に聞いたりもした。しかし、医師はそんなことが起きることもあ

るなんて一言も言わなかった。後で市販の健康雑誌で読んだのだが、脊柱管狭窄症とはそんな病で療養は長期にわたり、殊に排泄障害がおきた時には早急に手術も考えなければいけないと書いてあった。つまり僕は医師にかかりながら、その医師以外からの情報に頼らざるを得なかったのだ。理由はただ一つ。初診の時に医師が十分説明せず、また相談など受け付けない雰囲気だったからだ。

NHKラジオの健康相談などでも、「そんなことぐらいい、今、かかっている医師に聞けばよいではないか」と思うような質問が少なくない。つまり、多くの患者が自分の医師に聞けないで第三者に聞いているのだ。

医師に言わせれば「忙しくて、その暇がない」のかもしれないが、患者はその情報を求めて医師にかかるのだし、医師はその道のプロなのだ。説明責任がある。そして、そのために我々は高い医療費を支払っているのだ。我々はその情報が与えられないために悩み、他人に聞きまわり、時には危険な民間療法に走るのだ。

医師はこのことをもつと真剣に考えてもらいたい。

英語を読もう会

昨年の会では、政治および経済関連のテキストが取り上げられました。他に、長編小説のイントロやスポーツに加え、皇室などのトピックスも読まれました。単に英文を読むだけでなく、内容についてメンバー間で意見交換を行い、理解を深めるようにしています。

政治・経済関連の情報は、外電からも入手できますが、外国人の書いたものを読むことによって、日本が外国からどのように見られているかもよくわかります。

この会の悩みは、相変わらずの担当講師不足です。英語力を気にする必要はありません。考えようによっては、誤訳は話題の提供にも通じ、会を活発にすることに資します。英語力アップのために、気軽に考えて申し出てくださる。

一月	大泉 潤	Chap. One of In The Beginning from The Rugby War
二月	松谷 隆	“The Imperial Family” by Donald Keene
三月	野瀬 隆平	“Joy Divisions”

四月	中村 将陸	from The Economist The Myth of Japan's Failure from The New York Times
五月	平尾 富男	In Europe, Now What? From The New York Times
六月	大泉 潤	Chap. One from The Good Earth by Pearl S. Buck
七月	松谷 隆	Annual Survey of the Nation's Centenarians
八月	野瀬 隆平	夏休み Stop Blaming Fukushima on Japan's Culture
九月	野瀬 隆平	With China's Rise, Japan Shifts to the Right from The New York Times
十月	中村 将陸	A Declining Japan Loses its once-hopeful Champions
十一月	平尾 富男	The Price of Inequality by Joseph E. Stiglitz
十二月	大泉 潤	(プロマネ 大泉、中村将)

創作短編



危険なメソッド

大西 宏

第一話 魔法のメソッド

河田教授がある結婚パーティのスピーチで、教え子のカップルのなり染めについて伝えた内容は次の通りだった。

ある日の教授の四年生の心理学のゼミナールの授業は約三十人、男女がほぼ同数だった。

「今日は『聞く魔法』の時間です。人の話を聞くことなんて、誰にだってできるじゃないかって思うでしょう。それは間違いです。本当に聞くことができる人は、めったにいないのです」

教授はそう話して、カール・ロジャーズの「クライアント中心療法」のあらましを説明した。そして、「まずは、実験してみましょう」と言って、次のようなロールプレイングのルールを説明した。

一．親しい人どうしでないことが望ましいので、乱数表

でペアを決める。

二．二人が聞き手・話し手となって、どんなことでもよい、交代で、今実際悩んでいることを打ち明けあう。

三．聞き手は、相手が話し終っても、まだ聞く。それがたとえまちがっていると思っても、相手がそう思っている事実の理解に努め、助言・忠告の類はしてはならない。

四．その結果、聞かれた方も聞いたほうも、自分の心に起こった気づきについて観察すること。

A君は、見ず知らずのBさんと組んで、自分が最近失恋した悩みを打ち明けて、Bさんにその心をどうすれば癒やすことができるのか相談するというロールプレイをしたのである。

僅か三十分のカウンセリングの真似ことが、魔法の結果をもたらせた。Bさんと心が通じあうようになったのである。

糸余曲折はあったが、河田教授が二人の結婚パーティに招かれたのは、その授業から一年後だった。

「みなさん、『本当に聞く』ということは、実はこれほ

どのものなのです」

教授はスピーチをそのように締めくくった。

第二話「無力だったメソッド」

その日の河田教授は、三年生と四年生のゼミナールのあと、オフィスで質問を受けた。次にカウンセリングルームで、一週間ほど前に自殺しかけた学生のカウンセリングを行い、終わったのは夜の十時を過ぎていた。

教授が疲れきって帰宅し、「ただ今」「お帰りなさい」

——まではよかったが。次のように夫人の怒りが暴発し、そのことで教授のやるせない憤りが、みるみる破裂しそうになった。

「あなた、こんなに遅くまで、いったいどこで遊んでいたの？」

「?!……」

「その胸元のマークは何？」

「えーっ？ な、なんだって？」

見ると、それはゼミナールでの赤いチョークが誤ってついたものだった。二本の指によるもので、それはあま

りにも唇の形に似ていた。

教授の心の爆発を辛うじて抑えたのは、今日のゼミナールで講義した「感情移入的理解」というカウンセリングの手法だった。

「彼女の目にチョークがそのように見えるのはムリもないかもしれない。そう見えたら、そのように怒るのは当然だ」

教授のこのような心の動きを察する術(すべ)もなく、夫人の激しい追求は続く。

「だれか居るんじゃないの？ その名前、言つて頂戴！」
(心の中で)「こんちくしょう！　そこまで言うなら、自然のまま自分の感情をさらけだしたほうがすっきりするかもしれない」

「いや待て。そうすれば、ものの投げ合いになるに決まっている。今の彼女は被害妄想の症状なのだ。それを癒さねばならない。プロのカウンセラーがそれをできなくてどうする！」

しかし教授はなぜかこの相手にカウンセリングのプロセスをふむことができず、心境も「無条件の肯定的理解」

というものとはほど遠いものだった。

それから一週間経って、やっと二人の会話が回復したが、それはただ「時間の経過」によるものだった。教授はまだ「あのときは本当に赤いチョークだったのだよ」という言葉を投げかけた場合の彼女の反応を読みかねている。

第三話 危険なメソッド

その日、河田教授はカウンセリングルームで、キュートな女性Cさんと向き合っていた。Cさんの親が離婚し、叔父叔母の家で親切に育てられたが、やっぱり心の穴は埋められないままだった。しかも今、数年愛しあった恋人からも捨てられて、荒涼とした気持ちで、鬱病のような状態に陥ったのである。

すでに四回も話を聞いているうちに、教授は初恋の女性に似たCさんの容貌に魅せられていく自分に気づいた。以心伝心、彼女もまた教授に心を惹かれて、そのことを教授が察知しないはずがなかった。そして五回目、ついに彼女の方から教授の方にじり寄り、唇を求めた

のである。

しばらく経って教授は、避けようとしながらも自分に応じてしまった理由を考える。「ほんとうに彼女を愛してしまったのか?」「単なる欲望なのか?」「愛されることに飢えた彼女の心の穴を埋めてあげようとしたのか?」

なお、その瞬間、教授は脳裏で、Cさんとよく似た境遇の女性患者サブリナと恋に落ちたユングと、患者を「色彩的」と断じて突き放したフロイトとを対比していた。

教授には、「カウンセラーとして一線を越えた」という罪の意識は強くある。しかし、その一線を越えてでも、患者の「感情移入的理解」を行い、心の空虚を埋め合わせたという正当化の気持ちをも秘かにもっている。

その後、Cさんが別の男性と本物の恋愛関係を持ったことに、大きな安心と同じくらいの無念さを感じながら……。と同時に教授は、ユングとサブリナのその後の関係と心理、そしてサブリナが送った人生について調べ始めた。

隠蔽工作 — 大人の童話 —

馬場 真寿美

ここはどこ？

ぼくは どうして ここにいるの？

どこから来たかなんて わからない

ネグレクト 虐待

何のこと？ そんな言葉知らない

だけど これから ぼくは

いったい どこに 行くんだらう

温かな腕に抱かれたことも、柔らかな甘い乳首を含んだ記憶もなかった。ただ口にあてがわれたものに、ひもじくて恋しくて飛びつくように吸いついたとき、ほとばしり出てきたものは、無造作に熱湯で溶かれた火傷するほどの白いミルク。音をたてて喉が焼け、泣き声がかすれた。

胃が引きつりそうなほどの強烈な空腹感。べつとりと張りつく汚物の不快な感触。吐いたミルクのすえた臭いがこびりついた濡れた衣服。暗く、冷たく、歯の根も合わぬほどの寒さ。

けれど、そんなことにも遠く及ばない『この世でひとりぼっち』という圧倒的な暗闇に赤ん坊は縛られていた。寂しいというより、恐ろしいというより、ただひたすら悲しかった。

もし、もう少し成長していて、より複雑な感情を理解することができたとしたら、彼はまさしく絶望していたのだ。始まったばかりの人生に。誰にも祝福されず、一点の光さえ見出し出すことのできない、これからの自分の運命というものに……。

次第に混濁し遠のいていく意識の底で、何やらヒソヒソと男たちの低いささやき声だけが、耳障りに記憶の片隅にこびりついていた。

「あれ、おかしいな。もう、ここには届いてるじゃないか」
「へ？ そんなはずないだろ。ほら、住所だって合っ

てる。えっと、子宝市不幸町2丁目5番地。ここに間違いないぜ」

「うーん。だとすると、前回ここに運んだのが間違えてたんだな」

「えーっ！ おい、まずいぜ！」

「そうだなあ……」

「どうするよ？」

「しょうがねえな。今から取り替えるか」

「おいおい、大丈夫かよ」

「平気、平気。届いてから間もないし、今のうちなら分かりやしねえって」

真新しい白木のベビーベッドで、すやすやと眠っていた赤ん坊が、何に驚いたものか突然、ビクビクッと両手を大きく広げ痙攣すると、次の瞬間「ひいー」と火がついたように激しく泣き出した。

心配そうに眉を寄せた若い女性が、ベッドの中を覗き込むと、

「まあ、急にどうしたのかしら？ ほらほら、いい子ね、

坊や。ママですよお。ほうら、もう大丈夫。あらあら嫌だわ。涙まで浮かべてる。泣かないの。ママがそばにいるでしょ」

と、赤ん坊を優しく抱き上げた。

母親の柔らかく温かい腕に包まれても、赤ん坊はなかなか泣き止まなかった。まだ、ヒクッヒクッとしゃくり上げながら、まるで悪夢に怯えてでもいるように、小刻みに震えている。

「本当にどうしたのかしら？」

首をかしげる若い母親に、

「そうねえ。これはモロー反射といって、生まれたばかりの赤ちゃんには必ず見られるものだけど……。でも、もしかしたら、赤ちゃんには私たち大人には見えない何かが見えるのかも知れないわね」

と、目尻に皺を寄せた上品な老婦人が、思慮深げに娘に答えた。

この母娘が、むずかる赤ん坊をなだめるのに気を取られていた窓の外では——ここは二階のバルコニーのはず

なのだが——夜のしじまにのって、低く抑えた男たちのくぐもった声が聞こえてきていた。雲の隙間からわずかに覗く月の明かりに照らされて、レンガ仕立ての床に、二つの黒い影がぼんやりと浮かび上がっている。

「やれやれ、こっちはどうやらうまくいったようだな」

「間違うのも無理ないぜ。子宝市幸町2丁目5番地じゃあ」

「一字違いか。まあ、これからはせいぜい気をつけようぜ」

「ところで、あつちはどうだろ？」

「あつちはどうもこうもないさ。かわいそうだけど、どのみち長くはないだろ」

「あーイヤだ、イヤだ！ 因果な仕事だねえ。一方では俺たちの来るのを長くして待たせてくれる人間もいるつてのにさあ。あんな連中に運んで行かなきゃいけないこともあるなんて」

「まっ、仕方ないさ。どれ、どちらもうまくいったみたいだし、俺たちもそろそろ退散とするか」

床に映った二つの黒い異形の影が揺れ、バサリッと大きな羽音をたてると、二羽のコウノトリは、今は星一つない漆黒の夜空へと消えていった。



腐れ縁つて……

福本 多佳子

二十代後半から二十年近くも、ずっとやきもきさせられていたというのに、突然、浩一が存在がエリカの心の中ですうっーと軽くなってしまった。

（明日、病室に彼が来たら、どういう態度を取れば良いの？ 長年の自分の気持ちでも書き留めてみるか……）
などと考えていて眠れなかったというのに、彼が現れた途端に、全ての感情の動きが停止したような気分だった。海外からお見舞いに来てくれる事に感激していたはずなのに、朝起きて、昼過ぎに彼が着くまでの間に自分の心の中から何かが飛び去ってしまったような感じだった。（会いたくてたまらなかつたあの気持ちはどこへ行ってしまったの？ 一陣の風に吹き飛ばされるような想いなら、もっと早くに消えてほしかった。そうであれば私の生き方も変わっていたはずなのに……）

浩一が親身にエリカの身体を心配して、麻酔から覚め

たらメールしてくれと頼まれていたのに——しそびれてしまっていた。そこに携帯電話が振動音を発した。

「メールが来ないから心配で電話したんだ……」

「手術代は仕方ないけど、札幌から東京までの飛行機代なんて払えないわ」と言った時、「そんなの出してやるよ」と言っ、すぐ振り込んでくれた。それを感謝しながらも、何故、気持ちはさめてしまったの？

「そんなの——」という言葉に、エリカの中で複雑な気持ちは芽生えてしまったことは事実だ。

（彼としては信頼出来る病院で治療を受けてほしい、という好意。その為にしてくれた事は感謝する。でも、何かしつくりこない。今回の治療に彼を巻き込んでいいの？ それによって二人の関係が深くなるか、あるいは終わりへと進むか……どちらかになるという気がしていた。経済的な援助をしてくれたことは有り難いけど、何がさめてしまう原因ともなった……）

何も特別なことはしてもらっていないという自分の支えのようもの——それが切れてしまったのだ。

「これって、腐れ縁が切れたということなのかしら。腐れ縁って、結局、経済的なことが関係しているわけ？ 弟が結婚して五年目に海外駐在で別居して、夫婦それぞれが独立した暮らしを始めたなら離婚となって『金の切れ目が縁の切れ目かな？』と言っていたのに、私の場合はお金の縁が出来たら、縁の切れ目になったわけ？ 勿論、今回のことで二十年目にして初めて醒めた感覚で彼と会ったんだから——おしまいになるということかしら？ まあいいか、これでやつと他の出会いが楽しみになるんだし……」そうエリカは考えていた。

浩一は学生時代に地方の資産家のお嬢さんと結婚していた。元々病弱な彼女は出産前から実家に戻り、そのまま親元で暮らし、双子の子供たちは彼女の実家の跡取りとして育っている——浩一からは、そう聞いていた。

十年前にロンドン短期留学から帰国したエリカに、出張で帰国した浩一が電話をしてくるなり、

「相変わらず生活態度が変わっていないな。女は十一時前には帰っているもんだ」

「何を言ってるの。東京で仕事している女性が十一時

前に家に帰っているなんて、あるわけないでしょ」

そう言って喧嘩したのに、彼がロンドンへ戻る土曜日の朝には急に悲しくなって涙がこぼれ落ちて、流れるままにしていた。午後になって、このままずっと泣き続ける位なら、(そうだ、リムジンバスに乗って成田へ行く) そう思ったって、初めて成田行きのリムジンに自分の旅の為ではなく乗車した。夜の空港ロビーで待っていた。乗客の殆どがチェックインを済ませた頃になっても彼はまだ来ない。変更になったのかも、と諦めかけた時に現れた。多分、泣きはらした目をしているのに気がついたと思う。少し話した後、彼が「もう行くからね」と言った。「うん」とエリカはうなづいた。

成田まで出かけたことで気が済んだのか、帰りのリムジンではよく眠れた。

エリカがロスで働く事になった一年後に、浩一から「航空券を送るから遊びにおいでよ」と言われて、ロンドンに飛んだ事があった。ロスに戻る前夜、エリカはせっせとパッキングをしていた。彼はソファーに座って、時々振り返って彼女を見ていた。「アメリカ出張は殆ど無い

から、今度会うのもここだね」と彼が言ったが、エリカは黙っていた。(もう——イヤ——こんなの。何で、こんな愛人みたいな行動をしないといけないの?)

そう思いながらバッキングを続けていた。

ロスへ戻って半年ほどしてから、良い相談相手だったロンからプロポーズされ、「自分を幸せにしてくれるのは浩一ではなくてロンだろう」と考えて、結婚することにした。でも、浩一に手紙を書いた。「他の人から知ってほしくないから、真つ先に貴方に結婚の連絡をします」

すぐにロンドンで働いている友人から電話があり、

「浩一さんから頼まれて結婚祝いを買ったから送るわね。彼ったら『夏にエリカはここに来れないかな』って言うから『結婚したんだから無理でしょ』って答えたわ」「そうね。行けないのは結婚した事もあるけど、仕事に追われてイギリスへ行く時間なんて取れないの……」

一年ほどたって、エリカにドイツ出張の機会があった。

「いつ来るの。日にちを決めてくれないと、こっちも、どんどんスケジュールが入って来ちゃうよ」

「今回はロンドンに寄る時間は取れないの。そりゃ会いたいよ。だって、ずっと会っていないんだもの……」

無造作にエリカがそう付け加えたことで浩一が喜んでるのが感じられた。

五年後、ロンとは別れることになった。体調を崩していたエリカが札幌の実家に戻って静養していた時に、臍臓がが見つかったのだ。ごく初期のものだった。

退院して二年後の十月には、エリカも東京で新しい仕事についていた。

「やっと東京に帰ってきたんだ。食事をしようよ」

と、二年近く会わなかった浩一が、あっけらかんと嬉しそうな声で電話をかけてきた。約束のホテルロビーに着くと、正面エレベーターから出て来た浩一と目が合った。すつと寄って来て、笑顔で「久しぶりだね。会いたかったんだ」エリカも自然と良い笑顔になった。

(何だ、結局、元の木阿弥かしら? やっぱり彼と会うのって——嬉しいことなんだ。腐れ縁って……そんなに簡単に切れるものじゃないのね……)

悠遊の記



散歩

金京 法一

春の桜、夏の緑、秋の紅葉、冬の枯れ木と四季の移り変わりを毎日感じている。自然は毎日目に見える形で変化するには驚かされる。散歩は当分続きそうである。

家から五分ぐらいのところに、井の頭恩賜公園の入り口がある。公園を中心に毎日午後散歩に出かける。少々の雨でも傘を持って出かける。夏は四時ごろ出かけ、冬は二時半ごろ出かける。所要時間は休憩を含め一時間十五分ぐらいで、三キロ前後歩く。午後所用があるとき以外年間三百回ぐらい出かけることになる。気分転換と運動のためである。

同じようなことをしている人もいるらしく、いつも同じ時刻に同じ場所で見会える人も何人かいる。もともとは何年たつても挨拶をしないので、ちょっと気まずい感じではあるが。犬を連れてくる人にも出会うが、犬は気まぐれらしく、同じ場所同じ時刻に出会うということはない。



厳しい時代の売り込み

高橋 孝蔵

一九八〇年代後半のある年、東京国際映画祭に審査委員長として来日した米映画俳優グレゴリー・ペックは、新聞記者の映画作品についての質問にこう答えた。「映画はつまるところ二種類の作品しかない。質が良かろうが悪かろうが、当たる映画か、当たらない映画」。この分け方は映画に限らない。本やテレビにも言えることだ。大衆の気持を捉まえねばならない産業にとつて、当たる、当たらないは死活の問題だ。活字離れ、スクリーン離れで、当たる作品は極めて少なく、出版、映画、TV業界の不振が続いている。

しかし、かつてはそれぞれに光り輝いていた時代があった。出版社は本を一冊でも当てればビルも建てられた。娯楽がない時代は、どんな映画でも映画館を大入り満員にした。テレビが珍しい頃、誰もかれもがテレビにしがみついた。当時の紅白歌合戦の最高視聴率八十一%

強の記録は永遠に破られることはない。

だが、そんなおらかな時代は遠い昔。映画・テレビのプロデューサーなら観客動員数や視聴率を、出版編集者なら販売本数をいかに伸ばすかを考える。会社の経営が不振なら、彼らも経営者側に立って物ごとを考える。

この厳しい時代では、素人の原稿なら、編集者は読みもせず、買い取り保証してくれという要求も出てくる。

彼らに受け入れて貰うには原稿も重要だが、あなた自身が「当たるかもしれない」というオーラを発せねばならない。

売上に寄与できる要素を伝えたらよい。ホームページやブログ、メールマガジンを運営しているなら、ポイントになる。講師をしているなら生徒数を、趣味やスポーツのクラブに属しているなら、会員の数伝えるとよい。知り合いに新聞・雑誌の書評を書いているような人、社会的な影響力のある人がおれば、これは武器だ。七十五歳の加藤廣が書いた『信長の棺』が、当時の小泉首相が新聞で褒めあげたのをきっかけに爆発的に売れた例を、編集者は思い出し、点数をあげてくれるかも知れない。

「800字文学館賞」 特別企画

昨年続き、第四回の「800字文学館賞」の作品を募集したところ、二百四十九編の作品が寄せられた。

審査の結果、残念ながら最優秀賞については、該当作品がなかったが、次の五編が優秀賞に選ばれた。

優秀賞 「黄昏どき」 清水 せき子

優秀賞 「孟宗竹」 高橋 俊助

優秀賞 「日本人の桃」 大須賀 正央

優秀賞 「坂道の家」 遠藤 隆

優秀賞 「お礼肥」 土居 ヒサコ

紙面の関係で、すべての作品を紹介できないが、新年会に福井より参加した、清水せき子さんの作品、「黄昏どき」を掲載する。なお、他の作品はホームページで閲覧できる。

(プロマネ 志村、市川、野瀬)

黄昏どき

清水 せき子

いつもは混んでる店内がひっそりとしている。どうやら客は私一人のようだ。今日は家人は留守で主婦休業。黄昏どきのコーヒータイムもいいもんだな。

歌が流れている。シャンソンらしい。らしいというのは、シャンソンの何たるかをよくは知らないのだ。哀切を帯びた女性歌手の歌声が、意味も分からないのに胸を揺さぶる。一人もいいもんだ、とうそぶきながらもちよっぴり人恋しい。お店の若い女性に話しかけてみた。

「これ、シャンソンよね」

「さー、たぶんね」

「こんな音楽聴いてると切なくならない？」

「……そうですかー」

「そうかー、あなた若いもんね。私のような歳になるとね、こんな音楽聴くと古傷が痛むのよ。あなたにはまだ傷なんてないのよね」

「ありますよ！ でも傷ついたらすぐ蓋してしまっんです」

「そー、でも、蓋しても蓋しても噴き出す傷もあるのよ」
独りごとのようにつぶやく私に、皺一つない彼女は、
窓の外に視線を移しながら「ふーん」と相槌を打つてく
れた。

「今日のコーヒーおいしいね、いい香り！」

「はい、スペシャルブレンドです」

大して味が分かる訳でもない私にも深いコクが感じら
れる。

カウンターを見ると「本日のお勧め、スペシャルブレ
ンド」と表示してある。ここはコーヒー豆専門店でその
日のお勧めを試飲させてくれる。

朝一番、挽きたての香りが好きで、毎週のように豆を
買っている。コーヒー代もバカにならない。年金暮らし
だというのに。——手ごろないつもの豆で充分よ——。
主婦の私がささやいている。

「……いつもの……」いいかけてことばを呑んだ。傍ら
のスペシャルブレンドがやけに気になる。百グラムで
二百円は高い。

「スペシャル」ねえ……。

大してドラマチックでなくとも長く生きてきたという
だけで胸が痛む。この痛みこそコクじゃないの。……と
すれば大切に時間を積み上げてきたコクの分かる私が飲
まずに誰が飲むの。

「スペシャルブレンド、2000下さい」

黄昏どきは主婦を惑わすらしい。



ペン俳句のこの一年

佳句鑑賞

西川 知世

二〇一二年は嬉しいことに、前年はゲスト参加であった猪股重子さん、保坂令華さんが年初から入会され、四月から男性陣に安藤晃二さんを迎えた。プロマネ雅道さんのもとにみなさん、楽しくにぎやかに、そしてなによりも、熱心に句会を楽しんでくださっていることは、進行役としてこの上ない感謝と喜びである。

今年は一泊吟行地として長野の小諸を選び、中村雅道さんの労で、十一月一日、七名の参加を得て敢行した。お天気に恵まれ、小諸城址を吟行、小諸グランドホテルに句会を持った。それぞれがたくさんの句をものにされた。翌日は有志が伊藤文明さんの案内で、志村良知さんの車に便乗、上田市に足をのばし、国宝安楽寺八角三重塔、戦没画学生慰霊美術館「無言館」などを観て一日を歩いた。無言館では、私の父と同世代の画学生の絵の前に父の面影が重なって、貴重な思い出深い吟行となった。

『悠遊』二十号に、一年の句会の成果を纏めさせていただくことに感慨ひとしおのものがある。

如月の音たて撓ふ竹林

淋しさのほどけぬ朝の辛夷かな

枝垂れ桜真昼の刻の決壊す

誰がための赤を極むる蛇苺

黄落や饒舌なる絵無言の絵

山装ふ千曲に日の斑増やしつつ

ハドソンの流れ蕩蕩夏深し
火焰樹の赤を極めし盛夏かな
風涼し椎の木天を極めて
石積に苔の妙なる城の秋
雨戸開け万両の実の日日赤し

安藤 晃二

ハドソン川の句で、ペン俳句デビューされた。海外生活
経験に加え、趣味が豊富で、句会後の会では楽しい話を
してくださる。「風涼し」の句は、天を極めるほど高く
そびえる椎の木に渡る夏の風の涼しさを詠い、秋の近づ
く気配も読み手に感じさせる句として秀逸。

髪切って自分の歩幅風光る
札節の少しはみ出す暑の極み
北へ行く貨車長々と冬銀河
除夜の鐘明日へ生きる句読点
寒卯今日一日の恵みとし

猪股 重子

重子さんの句には、機知があつて、いつも感心させられる。
「髪切って」の句は理髪後の心の軽やかさを歩幅に転換し、
初夏の光の中を颯爽と歩く姿を彷彿とさせる。「札節の」
の句では酷暑を過ごす自分を冷静に見つめる目を持つて
いる。一日一日を恵みのうちに過ごして欲しい。

春暁や鉛筆二本削り置き
読み疲れ眼を休めある春の雲
沈丁の香りに猫の昼寝かな
菖蒲田に百年祭の雅楽の音
宿怨を洗ひ流せり大夕立

大泉 子泉

「春暁や」近頃はパソコンに向かって文字を書く。しかし、
丹念に削られた鉛筆が机にあれば、どんなにか心落ち着
いて文字を書くことができるであろう。春暁の光が部屋
に届き心地よい空間である。句会では点取りのお役を引
き受けて句会を支えてくださる。感謝である。

肩車して春泥の轍踏む

上田 信隆

片仮名の知らぬ名ばかり苗木市

釣鐘草我が浅学に出口なし

流木を浜に燃やして夏果つる

豊年や草のはみだす飼葉桶

信隆さんは俳句の面白さに取りつかれてしまったのだらうと観察している。いよいよ精進していただきたい。読み手にああこんなこと（場面）があった、こんな気持ちだったなあと鑑賞してもらうことも俳句の大切な要素である。掲出句はそれを踏まえて秀逸である。

春燈や娘三人母の部屋

志村 良知

店仕舞店主敬白夕立風

秋澄むやコーヒー豆を購はむ

紅葉晴登坂車線へ車寄せ

染付の皿に朝餉の蒸小蕪

良知さんの句は姿が美しい。声をだして読み上げるのになめらかである。「店仕舞」の句、閉まった戸口に店仕舞いの挨拶が張られ、おりしも夕立でもきそうな風が吹き始めた。仮名文字を使わずその光景を表現できている面白い句である。夕立風が句に現実感を際立たせる。

長生きは寂しくもあり年明ける

玉山 和夫

我はただ足るを知るのみ蓬餅

放射能防げぬ畑に春来る

大いなる入日追ひつつ雁急ぐ

見上げれば空にひろがる枯柳

この欄を担当していて、一年に一度玉山さんの句を読ませていただけることは嬉しいことである。「長生きは」の句は、玉山さんの年齢にならなければわからない境地であろうと感銘をうけた。年明けるの季語が、寂しさのうちに希望を表現して、句に深みを出している。

抜け道の春泥に足とられをり

中村 晃也

たこやきの匂い広がる花の土手

花水メルトダウンは二十五時

ロボットの声はデジタル文化の日

千本の水際の杭や夕千鳥

角川の月刊誌「俳句」に投句され、「春潮や先祖は隠れキリシタン」で茨城和生氏の秀逸選受けられた。句友として頼もしく心強い。句柄は多岐におよび、句作に懐の深さを感じる。「ロボットの」「花水」の句に見られるように晃也俳句は大胆で独特の視線を持つ。

立春や志功の女肌あらは

中村 雅道

春一番櫻の四方に咆哮す

神苑の緑陰統べる鴉かな

同期会ひとり欠けるて大文字

水底に沈み紅葉の色褪せず

雅道さんは「水底に」のような王道の句が秀でているが、最近は何柄に変化が見られる。「立春や」の句は棟方志功の絵にある豊満な女性を詠った。立春の季語が句に品格を与える。「春一番」の句、風の強さの表現の工夫で春浅くまだ葉が出ていない櫻の大きさが出ている。

余寒とも躓き落とす鍵の音

保坂 令華

穏やかに生きて飾りぬ古雛

何もかも遠し母の忌さくら舞ふ

露座仏の肌和らげし新樹光

初雪やたたむ袱紗に夢の文字

言葉づかい、季語の斡旋がたおやかである。「穏やかに」の句は句会で高得点であった。愛蔵の雛を飾るたびに、来し方が胸に迫る。いくつもの山があったはずの来し方であろう。それをおだやかに生きてきたものだと、達観して詠える人生は、読む人に共感をよぶ。

冬暁や夢の温みに君とゐて

冬暁や鏡に薄き光映ゆ

冬暁や昨日のままの酒と薔薇

枯菊や明るき宙を持って余す

枯菊を焚けば薄闇身を離る

水原 亜矢子

「冬」と題して、五句を送ってくださった。感謝である。お忙しいので、なかなか句会をとものにできないが、ときおりの参加を句会のメンバーは亜矢子ワールドの句と言って楽しみにしている。冬の五句には亜矢子さんの虚と実が混在している。



二〇一二年「ペン川柳」勉強会の成果

川柳勉強会 世話人 平尾富男

「ペン川柳」は、二〇一二年九月に第一〇〇回を迎え、見学参加、他に文芸本出版でお世話になっている青蛙房の加藤千秋編集長をお迎えして、盛大な祝賀会を開催してきました。

昨年同様、十二月の合評勉強会は、川柳子の面々が忙しくもないのに走り回り、一同に会することが出来ませんでした。お題を「師走」に決め「投句大会」となりました。

銀座の薩摩料理のお店「黒薩摩」に於いて、喉をビールで潤しながらの昼間の勉強会に続き、五時から呑み放題の懇親会を大いに楽しむようになって五年半が過ぎました。

メンバーも一人増えました。同時に、見学参加者の句、投句も加え、益々意気盛んに活動を続けています。新しいメンバーの加入、見学参加を歓迎します。

「卒サラ川柳」のシリーズ第三作として、「掌編小説勉強会」の面々の作品も取り込んだ『卒サラびとの文芸館』の出版を三月から準備し、年末には完成の運びに漕ぎ付けました。

以下は、常任メンバー十名が二〇一二年に詠んだ句から自薦の優秀（！）三句、或は世話人の選句です。メンバーの過去の人生が色濃く表出された作品が多く詠まれていて、興味深いですね。（作者・作品は順不同）

酔雅

- ① ああ師走ポーナスお歳暮今昔（師走）
- ② 柔肌が香る座席につと移り（香る）
- ③ 初恋が線香花火に見え隠れ（花火）

不言

- ① この噂嘘よと言いつつ広めてる（噂）
- ② 宝くじ芝浜夢見る師走かな（師走）
- ③ あの世でも嫌われ追われ甦る（甦る）

酔深

- ① ママ老いてなお艶が増し店流行る (流行る)
- ② ありもせぬ名誉汚すと叱る親 (汚す)
- ③ 百回の見合いの果てにこの夫 (百)

井波

- ① もう遅いあれが魔の笑みはまり込む (魔)
- ② 過ぎ去りし浮名の噂白い髪 (噂)
- ③ もう師走賀状書きつつ娑婆の味 (師走)

零門

- ① 数百の羊数えて不眠症 (百)
- ② 一年と続かぬ主に椅子呆れ (椅子)
- ③ 出世しろ家名汚すななんのこと (汚す)

西貢

- ① 大いびきいつ甦る山の神 (神)
- ② 流行ったと思えば廃るマニフェスト (流行る)
- ③ すれ違いねっとり香る厚化粧 (香り)

損得

- ① 遅すぎた女が魔物と知った日が (魔)
- ② 拝むほど遠く逃げてく金の運 (拝む)
- ③ 通り過ぎシャネル香って振り返る (香る)

昂

- ① 風邪流行りマスク美人につい見とれ (流行る)
- ② 正論で部長の椅子は遠くなり (椅子)
- ③ いい歳が仕掛け花火で大火傷 (花火)

安兵衛

- ① 浴衣着て百花繚乱夢花火 (花火)
- ② 魔がさしてついなんちゃって花を摘み (魔)
- ③ ヘンな夢会社に行ったら椅子が無い (椅子)

だし

- ① ガタが来た祖父の歳までとても無理 (祖父)
- ② 又ですかいつも拝まれ仏様 (拝む)
- ③ この噂人に語るな女郎花 (おみなえし) (噂)

以下は新しく加わったメンバー、投句だけの参加メンバー他の最優秀句の厳選一句です。

繭玉

① 光らずに鳴かず三途の濡れ花火 (花火)

晃二

① 記念日と誘う男の下心 (記念)

空家

① 濡れ落ち葉師走になれば粗大ゴミ (師走)

火酒

① 老いてなおホームじゃ噂の色事師 (噂)



『卒サラびとの文芸館』が誕生しました！

西川 武彦

川柳勉強会は、昨年末で百回目の開催を迎えた当クラブの名門です。そこで選ばれた秀句に小話をつける「卒サラ川柳」本の第三作が、年末に完成して、二〇一三年の年明けには書店に並びました。

題して『卒サラびとの文芸館』。

前二作と同じく青蛙房から上梓しましたが、今回は「掌編小説勉強会」で書き溜めた二百三十余編の短い小説などから、エディターが選んだ七編を盛り込んで、一段と華やかです。

表紙の装丁も、開けて吃驚の玉手箱風イラストが、赤白緑の配色を得て鮮やかにきまっています。

章立ては、「傍」「若」「無」「人」。なんとなく不良老人っぽいではありませんか。

第一作『不良老人たちの溜息』は、キャッチコピー曰

く、「高度成長時代に第一線で活躍したサラリーマンたちも定年となり、実はもつと厳しい『家庭』の荒波に飛び込んだ。遊びたくとも利かなくなる身体を憂い、川柳とエッセイに吐露」。

それから数年たつて出された第二作『卒サラも遠くなりにけり』では、

「我が家に『転勤』となつて久しく、心身ともに枯れてはきたものの、燃えのこる遊び心おさえ難し。365連休の熱き想いを、『卒サラ川柳』と『800字文学館』におつける」。

そして第三弾『卒サラびとの文芸館』では、ちよつと名の知れた文芸コンテストなどで入選する輩が現われたとあつて、

「素人文芸のままでは終わらない。定年後の趣味のつもりが、すっかりはまつてのめりこみ、川柳に、エッセイに、小説……鼻息あらくペンを走らせる元企業戦士たちは、かつてのように昇進、表彰を夢見つ……」と昇華しました。

最年長の作者はなんと九十二歳！ 七十五歳で芥川賞

を獲得した黒田夏子さんなんのそのの鼻息なのです。

折からの「シルバー川柳」ブームが追い風となつて、大手書店では、川柳本コーナーも目につきやすい場所に移動しているようですが、書店に向かなくても、近年流行りのアマゾン (Amazon.com) など、ウェブで簡単に購入ができるようになりました。

次の出版企画につなげるためにも、会員の皆様には是非お求め頂き(註)、PRして頂きたいと念じております。

(註) 1600円 (税込み1680円)

【卒サラ川柳】

卒サラびとの 文芸館

企業OBベンクラブ / 編著



◎推薦びと
下重暁子 「仕事は楽しく趣味は真剣に」
が私のモットー。それを実践
した元企業戦士に乾杯！

素人文芸のままで終わらない
定年後の趣味のつもりが、すっかりはまってるのめりこみ
川柳に、エッセイに、小説etc. 真意あらくペンを走らせる
元企業戦士たちは、かつてのように辞書、画報を夢見みつろー

青蛙房 定価：本体1600円+税

一．主な記録

年初の理事会、運営委員会において、800字文学館、エッセイコラム、掌編小説のホームページへの、掲載に至る手続きについて提案を頂いた。関係者が集まり、対応を協議し、掲載マニュアルを徹底することが議論された。あわせて、ホームページ運営のリブラス社と協議した結果、各プロジェクトの運用の問題点が明らかになった。同社と運用上の問題を明確にし、契約の見直しを行ない、一部改定をおこなった。

二．IT勉強会

会員にアンケート調査を行ったところ、約十五項目について勉強、演習の希望があった。これを整理し、十月から勉強会を月例会の前一時間をあて開催した。

十月は、ホームページの開設、コンテンツの掲載、十一月は年賀状のつくり方、印刷法、十二月は文章への写真の取り込み、写真の説明の挿入法を勉強した。講師の方々には、重いパソコンを持参してボランティアで説

明を頂いた。志村さん、リブラス社の中村さん、松谷さん、平尾さんの皆さんに厚くお礼を申し上げます。

三．ホームページ閲覧数

二月からログ集計を公表することになった。年末までの合計は三四三六二で、ピークの九月は四八〇〇に達しました。一日当たり一一五である。あわせて、800字文学館、エッセイコラム、写真館は上位二十人、七人を公表している。閲覧者の傾向を読むことができる。

四．今後のテーマ

ホームページは、会員相互の情報交換、オピニオン、文学、写真などの外部発信をはじめ、会員の絆を強める当クラブの重要なインフラである。アンケートによる会員からの要望は十五項目以上あった。タブレット端末の活用法、過去に発行されたホームページの活用法の再説明等がテーマとなろう。機会を得て、また勉強会を行いたいと考えている。

(プロマネ 大泉、上田、山縣、志村)

ペン・フォト句会の実績

『悠遊』十九号に、はじめてペンフォト句会の作品が掲載され、好評を得ております。早いもので、二〇一三年一月で二十五回目の勉強会を迎えました。約十名の常連メンバーが毎月二点の作品を持ち寄って勉強会に参加しています。

勉強会は、お題写真にあった五七五をつける「付け句」と自前の写真に五七五をつける「自由題」があります。

これまでの優秀作品の数を見ると、「つけ句」の場合三春さんが十三回入選で、次いで上山さん、矢澤さんが十二回、平尾さんが十一回と続いています。特に矢澤さんは第六回からの参加ですので注目に値します。

ついで大月さん（九回）、池田さん（八回）、中村（六回）が第二グループを形成しています。池田さんも十五回からの途中参加のハンデにも拘わらず健闘されています。その後は大越さんと第十九回から参加の安藤さんが四回で続いています。

「自由題」の場合は、三春さんが十七回入選、中村が十五回。次いで途中参加の矢澤さんが十一回入選です。

第二グループでは上山さん、大越さん（九回）、大月さん（七回）。次いで濱田優さん（五回）、途中参加の池田さん（五回）、第十九回から参加の安藤さん（四回）、平尾さん（二回）と続きます。

こうしてデータを比べてみますと、「つけ句」と「自由題」共に好成績で、フォト句との相性がいいのは、三春さん、上山さん、矢澤さんで、特に後のお二人はフォト句の勉強会だけに出席されているので、意気込みが違うのかも知れません。

「つけ句」の成績がいい人は、お題写真を見て名句が浮かぶ、感受性の良い人で、写真さえよければ、「自由題」でも好成績がとれるポテンシャルがある人です。

「自由題」の成績の割には「つけ句」で振るわない人は、フレキシブルな想像力に乏しい、生活態度が真面目な？人に多いようです。そんな人がプロマネをやっているのでしょうか？

（プロマネ 中村 晃也）

新年会の余興（575大会）

今年の新年会は盛りだくさんであった。例年のセレモニーに加えて河村幹夫さんの講演、800字文学館賞の入選者紹介、それに新刊書籍『卒サラびとの文芸館』の出版記念会である。

その後の限られた時間に行うアトラクションは、出版記念を兼ねた、ペンクラブに相応しい催しで、しかも全員が楽しめるものを企画する必要がある。

クラブには俳句、川柳、フォト句の勉強会があり、共通点は575の句作りであるので、出版記念を絡めて掌編小説の「小」と川柳の「川」の字を読み込み材料とした575大会を企画した。

昨年の十一月からクラブ会員を対象にキャンペーンを始めたが、流石ペンクラブだけあって、ありがたいことに三十四名の会員から応募があった。作者名を伏せたまま俳句、川柳、フォト句の各勉強会に予選を依頼し、予選通過作品五句をそれぞれ選定した。そして新年会の席

上、本邦初の575大会が開催された。

入選句を書いた大きな用紙を前にして各プロマネが、絶妙のジョークを混ぜながら、各句の評論を行い、句の内容の理解を深めてから、最後に全員の挙手で順位を決める仕組みである。

最後に入選順位に従っての作者の紹介では、思わぬ方が上位に入選したりして、会員のポテンシャルの高さに感銘した。当日の入選者は次の通りである。

俳句（読み込み「小」）

一席	弾き初めのピアノ小さき手が踊る	保坂令華
二席	友寄りて遅き昼餉や小豆粥	猪股重子
同	出版を寿ぎ集う小正月	中村晃也
佳作	小春日に皇帝ダリアが空に映え	大月和彦
佳作	隠居家の小部屋の窓に初日照る	浜田道雄

大月、浜田の両氏はペン俳句会のメンバーではなく、隠れた才能が発掘されたのは当日の大成果といえる。

以前ゲスト講演をして頂いた著述業の山田篤美さんか

ら佳句の投稿があったが、連絡の不備で締め切りに間に合わず、ご披露できなかったのは残念である。

川柳（読み込み「川」）

一席 人生は川の流れさ…溺れたぜ

三 春

二席 三途の川先に渡れと妻が言う

中村晃也

三席 川の字に寝た娘が今は朝帰り

平尾富男

同 見得切って三途の川に紙吹雪

西川知世

佳作 川柳は無理と不貞寝の年の暮れ

保坂令華

ペン川柳の常連メンバーは宗匠の平尾さん以外は残念ながら選に漏れた。川柳は、世の物事や庶民の生活を「へそ曲がり」の目で裏から横から突いて、笑い飛ばそうというもの。思いがけない「へそ曲がり」たちの出現に乾杯！

フォト句（お題「カボチャ」）

一席 何食わぬ顔してそっとくらべ合い

野瀬龍平

二席 討論もかぼちゃ頭でまとまらず

玉山和夫

三席 新年会どちらを見ても深い皺 浜田道雄

佳作 見ぬ振りをしつつ眺める妻の顔 野上浩三

佳作 種同じ畑違いの故なれば 大越浩平

佳作 何にするパイかプリンか絵を描くか 福本多佳子

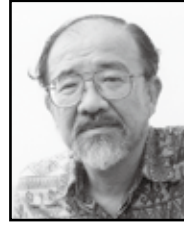
こちらにも、フォト句の常連メンバーで入選したのは大越さんだけだった。矢澤正二さん出題のお題写真が結構難しかったのに、初めてフォト句をつくったと思われる方々の隠れた才能が開いた。特に、九十二才になられてなお果敢にフォト句に挑戦された玉山さんの意欲には脱帽である。

本邦初演の575大会はお陰さまで盛会裏に終了した。何人かの方に「ペンクラブらしい企画で感心した」と言われて、苦勞のし甲斐があったと感じた。ご協力いただいた会員諸氏に深く感謝する。これを機会に575関連の勉強会の参加人員が少しでも増えれば、と念願する次第である。

（世話人 中村 晃也）

追悼

垂水健一さん



平成24年7月28日ご逝去
享年73歳
平成18年1月当クラブ入会

日中友好への熱い思いを偲ぶ

西川 武彦

奥様のお話では二十五年前から闘病生活が始まり、好きなお酒も断って精進して頑張っていたという。

氏は大阪市立大学文学部（中国）を卒業後、東京新聞の記者として活躍、最後は論説委員で終えられた。

筆者と知り合ったのは、一九八〇年代の初めである。

一九九七年の香港返還を巡って中英交渉が始まる頃で、氏は香港支局長として活躍。筆者は、香港に拠点を置くJALのアジア・オセアニア地区で広報・渉外の責任者として飛び歩いていたが、他方、当時のJAL路線網における香港線の比重は極めて高く、香港返還の帰趨で大きく影響を受けるため、地元香港で、ブンヤさんなどの各種情報筋からいち早く見通しを得るのも重要な任務だった。

そうした状況の中で垂水さんとお付き合いが始まった。酒好きの二人だから、外国人記者クラブのバーなどで杯を交わしながら、情報を探ったのが懐かしい。

中国語に堪能な垂水さんは、そうでない多くの特派員と違って、地元紙に自ら目を通し、直に中国人と接するという特技があった。飾らない温かいお人柄もあって現地での人脈は広く、氏から得た裏情報は心強かった。

上の娘さんが筆者の長女と同学年だったので、香港では家族ぐるみの親しいお付き合いもさせて頂いた。といっても、旦那たちは毎晩飲み歩いていたから、連れ合いと子供達である。

垂水さんはその後、本社勤務を挟んで、北京、上海の支局長も務められ、海外特派員歴は十五年におよび、中国通の貴重なスペシャリストであった。

退職後は、日中友好協会参与と

して、同協会が隔週で発行する日中友好の新聞『日本と中国』の編集長を長く務めていた。中国を心から愛され、市・省・特別行政区・自治区など三十四に及ぶ同国の行政区画のうち、二箇所を除いて全て訪問したという。残りの二つが少し心残りだったに違いない。

OBペンクラブには筆者の誘いで入会され、傘サラ本出版をネタに、当クラブの活動を東京新聞で大きく紹介して広報して頂いた。

決して気取らず、現地を廻って取材する旅好きでもある同氏は、遺影でも気楽な旅姿であった。

告別式には、日中友好協会、台湾日本代表など中国筋からの供花、弔電が数多く届けられていたが、中に『北京友の会』からのお

花もあった。垂水さんの北京支局長時代、人柄を慕って集まった異業種を含む在北京日本人駐在員たちの親睦会だという。最近までOBペンクラブの会員であった渡里清さんもメンバーの一人で、告別式でばったりお目にかかった。

最後に、『日本と中国』紙の二〇一二年八月五日版で、同氏が持っていたコラム「フォーカス」に載った垂水さんの遺稿をかいつまんでご紹介したい。

題して『相互理解』深まる中国旅行を』。

「中国に行きたいがどこがよいかの質問には、①洛陽、西安などの古都、②発展著しい上海・広州などの沿海都市、③大連などの東

北地方や南京など日本の侵略と切り離せない地域、と答えている。③の希望者も少なくなく、それなりの感動を受けるようだが、心配な面もある。侵略地での反省が単なる歴史の回顧で終わっていないか。かつて日本人が中国各地で何をしてきたかをしっかり胸に刻んでほしい。多くの日本人が本当に反省した時、真の意味での日中の相互理解が深まるはずだ。中国旅行の意味がいっそう深まり、両国の国民感情の改善につながってくれることを願いたい。」

尖閣問題に端を発して混乱する日中関係を、垂水さんは天上からどう眺めているだろうか。

合掌

企業OBペンクラブの本年の歩み

平成二十四年(二〇二二年) 〓

(会員への敬称略)

一、役員人事

二〇二二年～二〇一三年の任期の第一年目に当る
二〇二二年は、会員の選挙により左記の役員が、
二〇二一年十一月に選出され、二〇一三年までの二年間
を務めることとなった。

会長	西川 武彦 (出版担当)
副会長	平尾 富男 (事務局長)
副会長	大泉 潤 (財務担当)
理事	浜田 道雄 (運営委員長)
理事	大越 浩平 (運営副委員長)
理事	志村 良知 (副事務局長)
理事	清水 勝 (会計担当)
監事	山縣 正靖

二、年度方針

二〇二二年の年度方針の概要は、

- ①七十名を適正規模としたクラブ活動の更なる発展
- ②ウェブサイトの改良と充実
- ③掌編小説など当クラブの特色を活かした出版の推進
(電子書籍を含む)
- ④広報活動の一環として『800字文学館賞』コンテ
ストの継続実施。

三、月例会

一月例会(十九日)

- ・退会会員 渡里清、下平紀代子
- ・新入会員 猪股重子、保坂令子
- ・新春ゲスト講演 ①田辺嫩子さんの講談

②演劇集団「呼華」による舞
踊と歌

・新年会Ⅱゲストを交えた五十人近い参加者で、大いに賑わった。

・「何でも書こう会」熱海合宿Ⅱ四回目となる合宿に、勉強会有志十五名が一泊の勉強・懇親会に参加

二月例会（十六日）

・退会会員Ⅱ牛坊貞夫

・会員講演Ⅱ高口恵子

『三つ子の魂百まで』

会員講演Ⅱ廣澤重穂

『色の不思議』

・『会員名簿』（二〇一二年二月）の確定・配布（会員総数七十二名）

三月例会（十六日）

・退会会員Ⅱ佐藤洋子

・ゲスト講演Ⅱ中村保氏（IHI出身、日本山岳

会名誉会員）

『最後のフロンティア—アルプス、チベット、

更に奥地へ』

・『会員名簿』訂正版配布、会員総数七十一名
・出版企画Ⅱ前二作に続き第三作目を企画

四月例会（二十六日）

・ゲスト講演Ⅱ坂井定雄氏（元共同通信社出身、龍谷大学名誉教授）

『アラブの春』

・『悠遊』第十八号の印刷完成・配布

五月例会（十七日）

・『悠遊』第十九号の合評会

六月例会（二十一日）

・新入会員Ⅱ西田昭良

・ゲスト講演Ⅱ松木光正氏（関東医療クリニック院長）

『笑いと健康』

七月例会（十九日）

・新入会員Ⅱ羽田壽夫（再入会）、森田晃司

・会員講演Ⅱ寺井融

『ミャンマーの春』

八月例会（夏休み）

・会員の訃報Ⅱ垂水健一

・文芸作品第三弾来年一月上梓決定Ⅱ「ペン川柳」

「800字文学館」エッセイコラムⅡ「掌編小説」のコラボレーション

九月例会（二十日）

・会員講演Ⅱ水原亜矢子

『俳句、芭蕉』

十月例会（十八日）

・ゲスト講演Ⅱ田村正義氏（蓮田市特別養護老人ホーム園長）

『修行―介護を受ける準備として』

・パソコン勉強会Ⅱホームページの作り方

十一月例会（二十二日）

・会員講演Ⅱ三春

『うまい話〜食にまつわるロシアこぼれ話〜』

・会員講演Ⅱ池田隆

『原子力と私の関わり』

・パソコン勉強会Ⅱ年賀状の作り方

十二月例会（二十日）

・退会会員Ⅱ黒崎昭二、伊藤文明、上山裕次

・パソコン勉強会Ⅱワード文章への画像挿入

・ゲスト講演Ⅱトゥン氏（ベトナム出身で電通大M1知能機械工学専攻の奨学生、世代を超えた意見交換と懇親）

『ロボカップ、出身地ベトナム』

・「800字文学館賞」公募

最優秀賞 該当なし

優秀作品

①『黄昏とき』（清水せき子）、②『孟宗竹』（高橋俊助）、③『日本人の桃』（大須賀正史）、④『坂道の家』（遠藤隆）、⑤『お礼肥』（土居ヒサコ）

①『黄昏とき』（清水せき子）、②『孟宗竹』（高橋俊助）、③『日本人の桃』（大須賀正史）、④『坂道の家』（遠藤隆）、⑤『お礼肥』（土居ヒサコ）

①『黄昏とき』（清水せき子）、②『孟宗竹』（高橋俊助）、③『日本人の桃』（大須賀正史）、④『坂道の家』（遠藤隆）、⑤『お礼肥』（土居ヒサコ）

①『黄昏とき』（清水せき子）、②『孟宗竹』（高橋俊助）、③『日本人の桃』（大須賀正史）、④『坂道の家』（遠藤隆）、⑤『お礼肥』（土居ヒサコ）

まとめ（総評）

二〇一二年三月の「会員名簿」に掲載された総数は

七十一名。二人の新人会員を迎えることが出来た一方、

逝去・病气などで四人が退会され、年末には六十九名と

なった。

分科会活動としては、「サロン21」の活動が、内容も充実して、参加人数の増加と議論の活発化による進化を遂げた。伝統的な「サロン」としての中身を維持しつつ、当クラブらしい運営の方向性を見極める段階に来ていると思われる。

出版企画として、三月に立ち上げたプロジェクトが年末に完成し、二〇一三年新年早々に『卒サラびとの文芸館』として結実した。二〇〇六年に始まった「卒サラ川柳」を主体とした文芸出版が、掌編小説の分科会からの作品掲載を果たし、シリーズの第三弾『卒サラびとの文芸館』が上梓できたことは、最大の成果であったと思われる。今後の方向性と、更に充実した内容で世に問える出版を目指したい。関係会員の努力に感謝します。

ホームページを利用した更なる外部発信への積極的な対応を今後とも構築していきたい。

文責 事務局長 平尾 富男



氏 名	出 身 会 社	
富岡喜久雄	とみおか きくお	フジタ (藤田組)
富田 佳瑞	とみた よしみつ	三菱商事
鳥海 博	とりうみ ひろし	山一証券
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業
中村 晃也	なかむら あきや	三菱化学
中村 爽	なかむら そう	日本工営
中村 將陸	なかむら まさみち	富士通
新山章一郎	にいやま しょういちろう	在日米国海軍基地
西川 武彦	にしかわ たけひこ	日本航空
西川 知世	にしかわ ちよ	三菱倉庫
西田 昭良	にしだ あきよし	東京放送
新田由紀子	にした ゆきこ	Springer-Verlag Tokyo
野上 浩三	のがみ こうぞう	日本生命保険
野瀬 隆平	のせ りゅうへい	石川島播磨重工業
橋本 政彦	はしもと まさひこ	日商岩井
羽田 壽夫	はねだ ひさお	三菱重工業
馬場真寿美	ばば ますみ	ヤマハ
浜口須美子	はまぐち すみこ	稲畑産業
浜田 道雄	はまだ みちお	労働省
濱田 優	はまだ ゆたか	三菱化学、三菱化学エンジニアリング
原田 信	はらだ まこと	NHK
平尾 富男	ひらお とみお	キヤノン
廣澤 重穂	ひろさわ しげほ	シータス
福本多佳子	ふくもと たかこ	日本航空、Creative Tours
古川 幸雄	ふるかわ さちお	安宅産業、石川島播磨重工業
保坂 令子	ほさか れいこ	
細谷 博	ほそや ひろし	日立製作所、日立メデイコ
松浦 武弘	まつうら たけひろ	伊藤忠
松谷 隆	まつたに たかし	富士通
水原亜矢子	みずはら あやこ	東急電鉄
森田 晃司	もりた こうじ	三菱商事
矢澤 正二	やざわ しょうじ	信金中央金庫
山縣 正靖	やまがた まさやす	三菱銀行
吉寄 清己	よしぎき きよみ	関西ペイント

会 員 名 簿 (五十音順)

氏 名	出 身 会 社
阿久澤 泰子	あくざわ やすこ 興和企画
阿部 洋己	あべ ひろき キリンビール、キリンビバレッジ
阿部 典文	あべ みちふみ 石川島播磨重工業
新井 良侑	あらい よしゆき ダイセル化学工業
安藤 晃二	あんどう てるつぐ 三菱商事
池田 隆	いけだ たかし 東芝
市川 忠夫	いちかわ ただお 東芝
稲宮 健一	いなみや けんいち 三菱電機
猪股 重子	いのまた しげこ
岩崎洋一郎	いわさき よういちろう 三菱レイヨン
上田 信隆	うえだ のぶたか 東芝情報システム
上原 利夫	うえはら としお 住友商事
鵜飼 直哉	うかい なおや 富士通
大泉 潤	おおいずみ じゅん 三菱化学
大越 浩平	おおこし こうへい NECインフロンティア
大月 和彦	おおつき かずひこ 労働省
大西 宏	おおにし こう 松下電器
大平 忠	おおひら ただし 三菱化学
大野 晷	おおの ただし 三井物産
門屋 信行	かどや のぶゆき 監査法人/中央会計事務所
金京 法一	きんきょう ほういち 三菱商事、三菱総研
倉藤 金助	くらふじ きんすけ 桜井会計事務所
児玉 忠雄	こだま ただお 三菱銀行
小寺 裕子	こでら ひろこ
三 春	みはる 住友商事
清水 勝	しみず まさる 明治安田生命 (安田生命)
志村 良知	しむら りょうち リコー
杉浦 右蔵	すぎうら ゆうぞう NTT、三菱電線工業
高橋 孝蔵	たかはし こうぞう 丸紅、松竹
田原 敬	たはら けい 和田製本工業
玉山 和夫	たまやま かずお 通産省、日英協会
寺井 融	てらい とおる 民社党本部、産経新聞
都甲 昌利	とこう まさとし 日本航空

創刊二十周年に当たつての特集テーマ「日本再生のために」が決まったのは、十一月初めだった。まもなく、安倍自民党は「経済の再生」「教育の再生」を連呼し始めた。やはり、国を思うとき、誰もが同じ気持になる証拠か。しかし、何を為すか、どうやって為すかは至難である。書くことは自分をしる。敢えてこのテーマに踏み込んだ筆者に共感と敬意を感じている。(大平)

昨年夏、市役所から新しい「後期高齢者健康保険証」が届けられた。その字面を眺めながら「後期高齢者」っていやな言葉だなど思った。だって、『後期』のあとは『終末期』しかないじゃないか。『もうあなたの人生は終わり間近だ』と宣告しているようなものだ。だが、『悠遊』はようやく二十歳。まだまだこれからだ。今回の特集「日本再生のために」にちなんで、私も再生に頑張ろう！(浜田)

プロマネを務めて早や四年？ 創刊二十周年に立ち会えるとは光栄である。日本の将来を見つめてメッセージを送り続ける会員諸氏の底知れぬ活力にはいつもながら舌を巻く。今回は記念号のためかひとときわ熱い真摯な作品が多かった。抱腹絶倒・皮肉たつぷり・ほのほの温か・スリルとサスペンス・郷愁と哀感など、盛り沢山にしたいなと思うが、こればかりは蓋を開けてみないとわからない。(三春)

企業OBベンクラブ同人誌

「悠遊」創刊二十周年記念号

二〇一三年四月十六日発行

発行者 企業OBベンクラブ会長

西川 武彦

印刷所 株式会社 毎日新聞東京センター

東京都千代田区一ツ橋一―一―(〒一〇〇―〇〇三)

TEL 〇三―三三二二―〇四七九

連絡先 企業OBベンクラブ事務局 平尾 富男

横浜市青葉区田奈町三三―二二(〒二二七―〇〇六四)

Eメール: hira03321@04.iiscom.net

クラブURL: <http://www.obpen.com>

口座 三菱東京UFJ銀行海老名支店(409)

企業OBベンクラブ 会計担当 清水 勝

(普通) 1086096

ペン・フォト句 (プチライフ編)



池田 隆



平尾 富男



三 春



大越 浩平

樽とも
帽子とも



はた
髪とも

中村
晃也